

三郷村の埋蔵文化財第5集

東小倉遺跡Ⅲ

(～下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書～)

2003・3

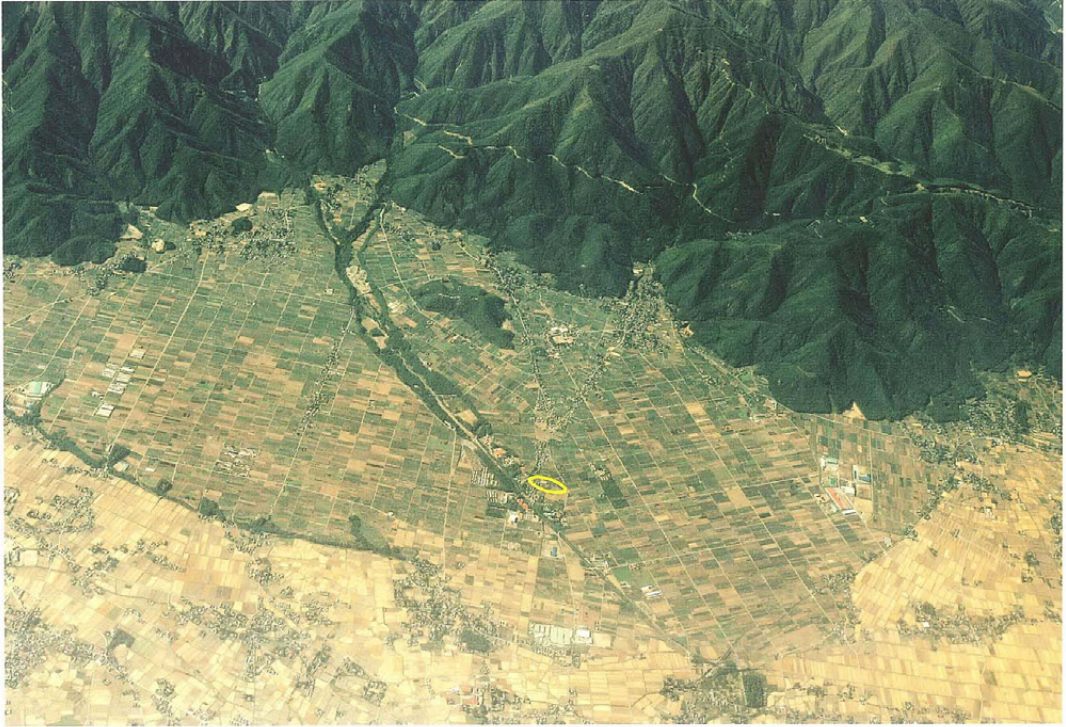
長野県南安曇郡三郷村教育委員会

東小倉遺跡Ⅲ

(～下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書～)

2003・3

長野県南安曇郡三郷村教育委員会



黒沢川扇状地写真 円内は発掘調査地点



24号住居址 埋甕



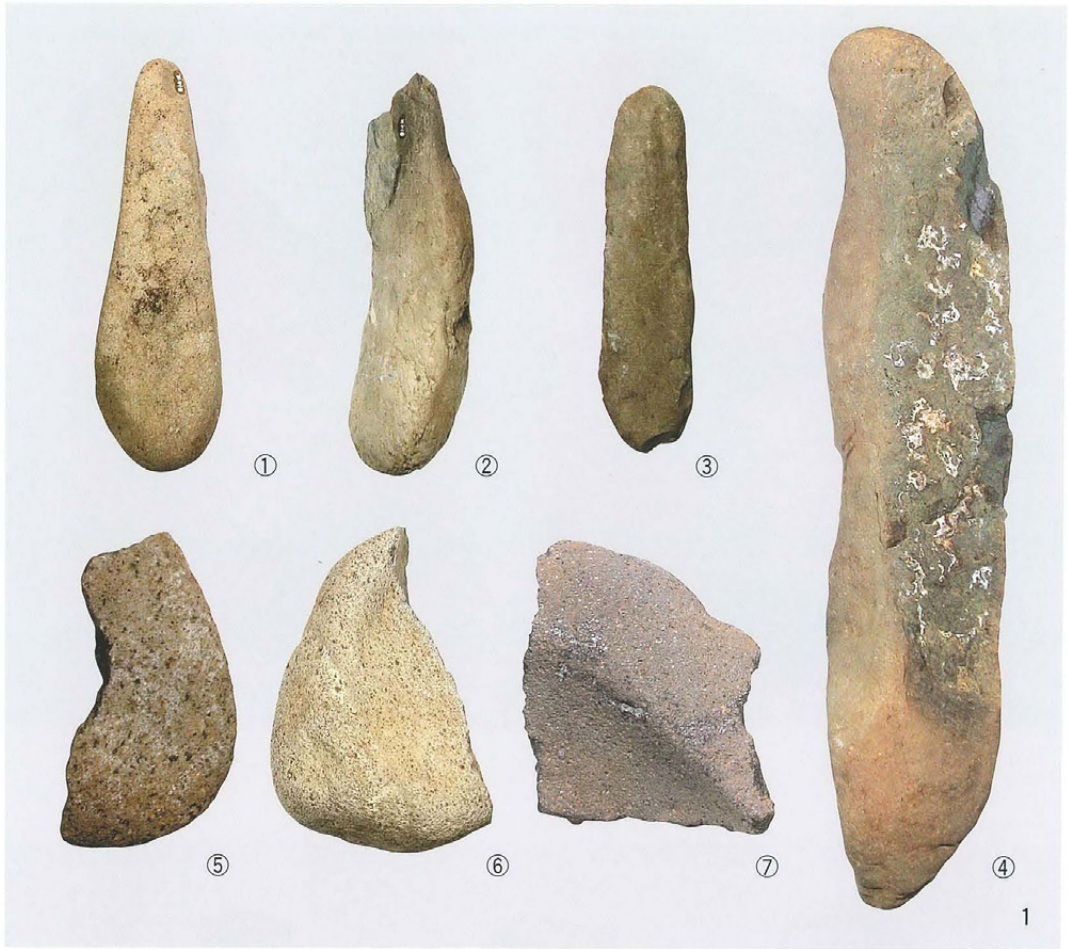
1. 24号住居址、埋甕 2~5. 道路工事



1 道路工事



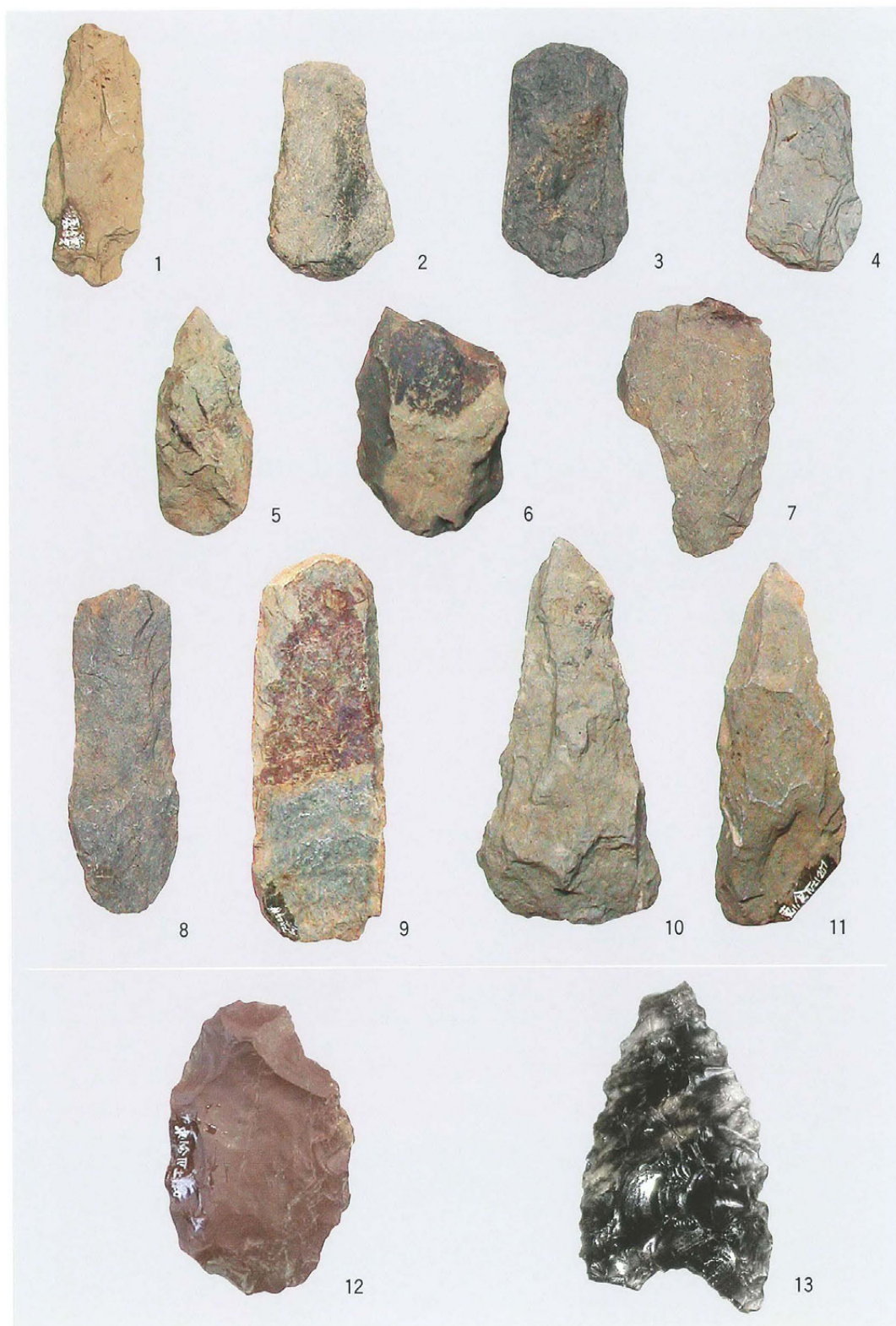
2 道路工事



⑥ 17住 他は道路工事



2 道路工事



1. 2-22住 3. 土坑101 4. 5. 7. 8. 9. 11-土坑120 6. 10-道路工事 12. 土坑120 13. 21住

序

東小倉遺跡は、縄文時代を中心とする包蔵地が集まる黒沢川流域の中で最も下流に位置する遺跡で、かねてから土器、石器の密度の濃い散布地として知られており、三郷村でも最大級の縄文集落があった所とみられています。

今回、県の流域下水道工事が遺跡内を通ることになり、平成14年7月から8月にかけて発掘調査が行われました。この発掘調査は、下水道管敷設のために影響を受ける1～1.5mの限られた幅で行われたため、住居址などの全容がつかみにくく、作業がやりにくいなどの制約の中で、炎天下、小さな遺物にも細心の注意を注ぐ地味な作業が続けられました。

その結果、今回の調査では、10軒の住居址と71個に及ぶ^{どこう}土坑（人為的な穴）、多くの土器などの遺物が発見されました。また、古い流路の発見や遺跡の境界の一端を確認するなど貴重な成果を収めることができました。

発掘された住居址に降り立ち、四千年前の人々の暮らしに思いを馳せると、いろいろな感慨を覚え、また数々の疑問や興味も湧いてきます。私たちの祖先の様子を知ること、今を生きる私たちの足元を見つめることに外なりません。今回のような調査の機会を通じて、地域の歴史への関心や理解が深まることを期待するものです。

最後になりましたが、調査全般に渡りご指導、ご協力をいただいた山田瑞穂団長・今村 克調査主任を始めとする調査団の皆様、保護協議段階から全面的なご協力をいただいた長野県豊科建設事務所、その他、ご協力いただいた多くの方々に心より感謝を申し上げます。

平成15年3月

三郷村教育委員会
教育長 中村 孝信

例 言

- 1 本書は、東小倉遺跡内村道514号線に沿って設置される流域下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 調査は、三郷村教育委員会が調査団を組織して実施した。
- 3 本書の編集は、主として那須野雅好と山田瑞穂、今村克が行った。
- 4 本書の執筆は、調査団で決定した分担によって行い、各文末に氏名を明記することにより、文責を明らかにした。
- 5 本書作成における分担は次のとおりである。

遺構図整理・トレース	今村 克	荒井留美子		
遺物整理	山田 瑞穂	田々井譽子	畑中智恵子	上兼 美香
遺物実測・トレース	山田 瑞穂	畑中智恵子		
写真（発掘調査）	今村 克			
写真（遺物）	那須野雅好	中田 育成		
測量・実測図	今村 克	荒井留美子	道浦久美子	
- 6 実測図等の縮尺は図に示してある。
- 6 土器の復元は、福沢幸一氏に依頼した。しかし、10数個復元後、作業中に病に倒れられ、薬石効なく他界された。これまでの村内遺跡出土土器復元作業にかかわられた真摯な取り組み方に対し、衷心より感謝と哀悼の意を表する次第である。
- 7 調査の諸記録・実測図・遺物は、三郷村教育委員会において保管している。
- 8 遺構番号は、平成9年の東小倉遺跡発掘調査から、本調査に先行する県道梓橋小倉線の調査に続けての一連のカウントである。

本文目次

序

例言

第1章 発掘調査の経過	1
第1節 調査に至るまで	1
第2節 調査体制	1
第3節 調査の経過	2
1. 発掘作業	2
2. 遺物整理作業	4
第4節 調査の方法	4
第2章 東小倉遺跡周辺の環境	5
第1節 地形・地質	5
1. 黒沢川扇状地	5
2. 調査地点	6
第2節 歴史的環境と村内の遺跡	7
第3章 遺構と遺物	17
1. 竪穴住居址	17
2. 土坑	44
3. 溝址	63
4. 過去の道路工事に伴って出土した遺物	64
第4章 まとめ	70

挿 図 目 次

第1図	東小倉遺跡周辺	5
第2図	地質柱状図①・②	6
第3図	三郷村埋蔵文化財 遺跡包蔵地図	9・10
第4図	調査位置図①	11
第5図	調査位置図②	12
第6図	遺構配置図①	13・14
第7図	遺構配置図②	15・16
第8図	第16号住居址	17
第9図	第17号住居址	19
第10図	第17号住居址出土土器拓影	20
第11図	第18号住居址	22
第12図	第18号住居址出土土器拓影	23
第13図	第19号住居址	25
第14図	第20号住居址	26
第15図	第21号住居址	28
第16図	第19・20・21号住居址出土土器拓影	29
第17図	第22号住居址	31
第18図	第22号住居址出土土器拓影	32
第19図	第23号住居址	34
第20図	第24号住居址	36
第21図	第23・24号住居址出土土器拓影	37
第22図	第25号住居址	39
第23図	第25号住居址出土土器拓影	40
第24図	出土土器実測図	41
第25図	出土石器実測図	42
第26図	出土石器実測図	43
第27図	土坑66～73	44
第28図	土坑74～83	45
第29図	土坑84～87	46
第30図	土坑88～95	47
第31図	土坑96～103	48

第32図	土坑104～112・117	49
第33図	土坑113～119	50
第34図	土坑120～123	51
第35図	土坑124～131	52
第36図	土坑132～134	53
第37図	土坑135～139	54
第38図	土坑74～92出土土器拓影	59
第39図	土坑101～115出土土器拓影	60
第40図	土坑116～127出土土器拓影	61
第41図	土坑129～137・遺構外出土土器拓影	62
第42図	溝 址	63
第43図	道路工事出土土器及び土偶実測図	66
第44図	道路工事出土土器拓影	67
第45図	道路工事出土土器拓影	68
第46図	道路工事出土土器拓影	69

第1章 発掘調査の経過

第1節 調査に至るまで

三郷村の黒沢川橋左岸一帯に広がる地域は、縄文時代中期の住居址を中心に、土器や石器の密度の高い遺跡として知られていた。本地域一帯の遺跡の中では、南松原遺跡が年代的に古く、勝坂式土器の集落である。これに対し、東小倉遺跡においては、平成5年の第1次調査における堀内国利氏宅北側に隣接する畑地、及び、平成9年の第2次調査における県道梓橋小倉線からは、加曽利E式土器が出土し、縄文時代中期後半の遺跡であることが確認されている。この東小倉遺跡一帯は南安曇郡下でも最大級の縄文遺跡であり学術的価値の高い地域である。

今回の発掘は、東小倉遺跡内の村道514号線について、県の流域下水道工事に伴う埋蔵文化財保護調査である。

三郷村教育委員会では、これまでの確認事項と工事の規模とを勘案し、次の諸点に立って、県教育委員会、並びに豊科建設事務所と協議しながら、平成14年度に発掘調査を実施することにした。

- 1 調査団長を、前回までの黒沢川右岸調査並びに東小倉遺跡において統括をお願いした山田瑞穂氏に依頼し、長期にわたる発掘に備える調査団を組織した。
- 2 今回の第4次調査となる村道514号線は、流域下水道工事ラインに沿って、堀内宅側から北へ向かって調査し、第1次調査における堀内氏の畑地での調査内容とを照合しながら、東小倉遺跡の東端及び北端を明らかにしたい。

第2節 調査体制

調査団長	山田 瑞穂	(日本考古学協会員)			
調査主任	今村 克	(長野県考古学協会員)			
作業員	荒井留美子	有沢 芳明	飯田 三男	小穴 兆司	
	待井 敏夫	道浦久美子	山崎 照友		
整理員	上兼 美香	多々井誉子	畑中智恵子		
事務局	務台 一之	(三郷村教育委員会・教育次長)			
	那須野雅好	(〃	・村誌編纂係長)	
	中田 育成	(〃	・村誌編纂係)	

第3節 調査の経過

1. 発掘作業

期間 平成14年7月1日（月）～8月7日（水）

7月1日（月）

本日から調査開始、作業員5名でスタート。調査区南端より重機を使用して表土除去を行い、検出作業を行う。作業を始めて間もなく17号住居址を検出。続いて16号住居址を検出する。

測量用の杭をトランシットを使用して設定。

7月2日（火）

前日に引き続き、16号・17号住居址を掘り下げる。

7月3日（水）

16号・17号住居址完掘。開始から18m地点まで終了。

7月4日（木）

前日までに終了した区間を埋め戻す作業を業者が行い、併行して次の調査区を重機で開けていく。検出作業を行う。18号住居址を検出し、引き続き掘り下げを行う。

7月5日（金）

18号住居址完掘。38mまで終了。

7月8日（月）

終了区間を埋め戻し、次の調査区を開ける。検出作業を行う。遺構は少ない。

7月9日（火）

検出した土坑を掘り下げる。

7月10日（水）

雨で作業中止。

7月11日（木）

19号住居址の炉を調査し、この区間終了。66m地点まで進む。

7月12日（金）

次の調査区を開け、検出作業に入る。

7月15日（月）

20号・21号住居址を検出し、掘り下げる。21号住居址は覆土中に礫が多く入る。人為的な投棄であろうか。

7月16日（火）

引き続き20号・21号住居址を調査する。

7月17日（水）

20号・21号住居址完掘。

7月18日（木）

土坑を掘り下げる。この区間は遺構が多く、日数を要した。

7月19日（金）

調査を終了し、埋め戻す。89m地点まで調査進む。

7月22日（月）

次の調査区を開け、検出作業に入る。

7月23日（火）

22号住居址を検出し、掘り下げる。

7月24日（水）

22号住居址の調査過程で、23号住居址を発見し、調査を続ける。

7月25日（木）

日程の都合から、この区間の調査を継続しつつ、次の区間を開けることとする。

7月26日（金）

24号住居址を検出し、掘り下げる。

7月29日（月）

引き続き29号住居址を調査する。埋甕を発見する。

7月30日（火）

121m地点まで終了し、埋め戻す。

7月31日（水）

24号住居址の調査、及び、周辺の土坑の掘り下げを続ける。

8月1日（木）

24号住居址の埋甕を取り上げる。

8月2日（金）

24号住居址完掘。138m地点まで終了する。

8月5日（月）

次の調査区を検出し、25号住居址を確認する。掘り下げ完掘する。遺構が少なく、調査を終える。151m地点まで終了する。

8月6日（火）

次の調査区を開けるが、遺構はなく、遺跡の北端を確認できた。

8月7日（水）

第2・3次調査で確認された溝址の続きを、210m地点で検出した。調査区をさらに北へ伸ばすが遺構はなく、242m地点までで4次調査をすべて終了した。

8月8日（木）

撤収作業を行う。

2. 遺物整理作業

平成14年7月1日（月）～平成15年1月31日（金）

場所 三郷村民俗資料館作業室

第4節 調査の方法

東小倉遺跡一帯の中で、今回の村道514号線に沿った西側部分は、平成5年度に第2次調査としてその中央部を試掘している。畑の中を約80mのトレンチを3本開け、3週間にわたって調査した結果、住居址4戸、土坑2、埋甕1、土器片の入ったピット等の遺構・遺物を確認している。また、本年度4月に3週間実施した第3次調査における、住居址6戸、土坑58、溝址1、土器片等という調査結果を踏まえ、東小倉遺跡の範囲の特定と、新たな遺構・遺物確認を主眼に実施することとした。

流域下水道工事に伴う下水道本管埋設幅に沿い、次の点に留意して調査作業を実施した。

- 1 周辺の下水道工事との関係から、調査を県道梓橋小倉線側から実施した。
- 2 周辺住民の生活道路であることから、作業スパンを20mずつA区・B区・C区……とし、スパン毎に完掘後は埋め戻し、住民の安全と動線を確保した。
- 3 重機による表土の除去作業後検出に当たり、遺構の分布状況・土層の状況を把握することにした。
- 4 調査幅が狭小であるので、遺構にかかった場合は、その全体像を慎重に描くように努め、特に切り合う遺構の有無について確認をした。
- 5 小片の遺物については、その箇所を明記して分納し、型の大きなものについては全体像を残し、写真撮影・図書き・測量を実施した後に取り上げた。また、測量は光学測量を実施し精度を高めた。

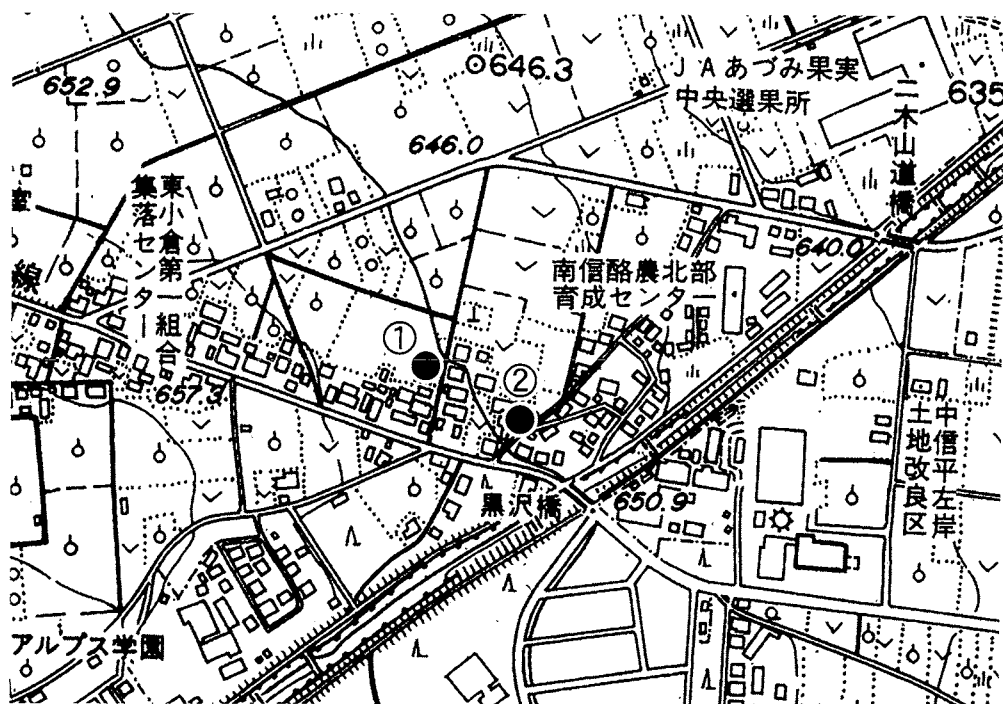
第2章 東小倉遺跡周辺環境

第1節 地形・地質

この付近の地形・地質については報告書『東小倉遺跡』（第3集）に述べてあるので、調査地点付近について述べる（第1図）。

1. 黒沢川扇状地

黒沢川扇状地の堆積物は、梓川村の上角から三郷村野沢にかけて発達する段丘崖で見ることができる。この崖では下部に梓川の運搬した砂礫を主に、二次的に堆積したロームがレンズ状に挟まれる。この礫中には乗鞍安山岩や焼岳安山岩の円礫が上部に目立つ。黒沢川の運搬した角礫状の砂礫は硬砂岩や泥岩・チャートが主でその上に2m～3mの乗鞍ロームが重なる。ローム堆積後、黒沢橋付近を境として、それより上流は北アルプスの隆起などの影響で黒沢川による下刻作用が進み、黒沢扇状地を解析し黒沢川合流点では比高24mの段丘崖をつくっている。一方黒沢橋付近より下流では解析され運ばれた土砂が二次堆積を行い東は上長尾の南、北は堀金村付近にかけて氾濫した。近年黒沢川の流路は固定されたが川床への砂礫の堆積ははげしく、下流は天井川となっている。

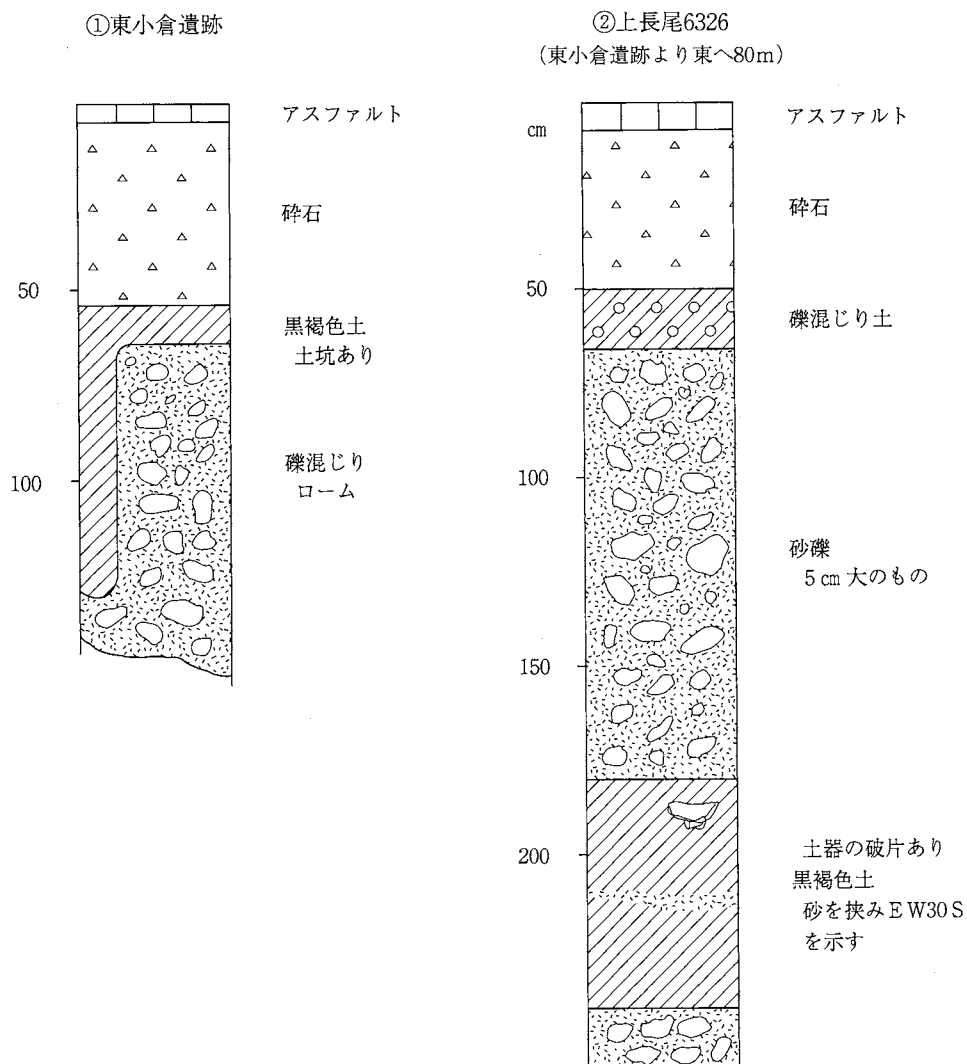


第1図 東小倉遺跡周辺

2. 調査地点

この付近の黒沢川扇状地は主として黒沢川によって形成されたものである。上野面形成以後、その上面は黒沢川の氾濫堆積物及び北アルプスよりの押し出しによる堆積物によって覆われている。調査地は第2図①に示すごとく、第6号住居址付近に比べ比較的浅く、村道514号線造成時の碎石が約50cmあり、その下に黒褐色土が約15cm、その下は、黄褐色のローム混じりの砂礫層が続く。土器片はその黄褐色の砂礫層の上で採取できる。

この付近での地質的な特徴は2点あげられる。その一つは、東小倉遺跡の北端に当たるとされる地点で、報告書『東小倉遺跡』（第3集）6頁で示した小川の下流が発見されたことである。この小川は縄文時代にもあり、当時の人々の生活にも利用されていたと推定される。



第2図 地質柱状図

また二つめは、この地点より約80m東に当たる、上長尾6326番地の沢口地域での下水道工事で見られた、地質柱状図（第2図②）である。この付近では地表面下180cmの黒褐色土層から土器の破片が採取された。また、この中のレンズ状の砂層のラミナが走向E-W傾斜30°Sを示していることから、黒沢川が運んできた土砂があり、その土が当時地表だったことを示している。このことから推定すると、縄文時代の黒沢川は、現在の沢口付近にあり、この付近は東小倉遺跡から黒沢川へ坂をなしていたと思われる。そして、その後の洪水で沢口は土砂が堆積し、現在に至ったと思われる。黒沢川は現在より東小倉遺跡の近くを流れていたと推定できそうである。

第2節 歴史的環境と村内の遺跡

第3図でみるように、本村には現在までに、47箇所の遺跡が確認されている。そしてその分布は、山麓沿い、黒沢川沿い、鳴沢川沿い、段丘下の水田地帯の4地帯に濃厚にみられる。段丘下の水田地帯は、平安期の遺跡が多いが、他は縄文期の遺跡が圧倒的に多いという特徴を示している。

今回、調査の実施された東小倉遺跡は、黒沢川沿い（黒沢左岸）に所在し、広範囲にわたって縄文時代前期・中期・後期の遺物を出土することで知れわたっている遺跡の一つであった。黒沢川沿いの遺跡は、上流から左岸では、黒沢浄水場東、南松原、本遺跡、三角原の各遺跡が、右岸では、押込（梓川村中塔）、長者屋敷（梓川村境界）、稻荷西、調整池北、黒沢川右岸、チンクラ屋敷、若宮、堂原等の各遺跡が続いている。黒沢川は現在は住吉神社西方で終わり、堰に接続するという珍しい川であるが、かつての氾濫原もしくは流路の延長である上長尾、楡、住吉の各地区に存在している各遺跡も黒沢川沿いの遺跡と呼んでもよいと思われる。昭和24年の楡道下遺跡（当時は及木遺跡と呼ぶ）の発掘調査では黒沢川の小自然流を示すかのような堆積物が観察されている。

この黒沢川周辺に人々の往来があったのは先記遺跡の内容から考えて縄文時代早期楕円押型文土器を持った人々の稻荷西遺跡への訪れにまでさかのぼると考えられていたが、前回の東小倉遺跡の調査で草創期にまでさかのぼることが判明した。次いで縄文前期には、本遺跡をはじめ、調整池北、黒沢浄水場東、黒沢川右岸（特別養護老人ホーム）に生活の場を残している。特に、本遺跡の対岸に当たる黒沢川右岸遺跡は、昭和58年に発掘調査が実施され、住居址と小竪穴を検出している。出土土器は絡条体圧痕文土器や繊維を含む縄文土器、薄い器厚の条痕文土器等であることから、縄文早期末から前期初頭に比定される内容である。黒沢浄水場東遺跡は、縄文前期末の下島式土器を出土する小範囲の遺跡であったが圃場整備事業で消滅してしまった。黒沢川沿い以外では、鳴沢川右岸に位置する北小倉の才の神遺跡が注目される。有尾式、北白川下層式の前期土器を

出土する他に、後期、晩期までの内容をもつ遺跡として、三郷村はもとより南安曇郡下でも特筆される遺跡である。

縄文時代中期になると黒沢川沿いは最盛期を迎える。本格的な村づくりが始まって、その集落が、長者屋敷、南松原、そして本遺跡にみられる。南松原遺跡は、昭和45年に発掘調査され、遺跡範囲の一部分の調査であったが、14軒の竪穴住居址の確認があった。広範囲からの遺物出土があるので規模の大きい集落が考えられる。勝坂式土器が中心を占めることから、本遺跡で今回調査されたものより先行する内容をもった遺跡といえる。黒沢川右岸遺跡からは本遺跡と同時期の竪穴住居址を検出している。鳴沢川沿いにも中期遺跡があり、三郷村で11箇所が数えられ、一番遺跡の多かった時期である。

縄文後期になると本遺跡の他に、才の神、鳴沢、地藏沖、楡小路の各遺跡が、そして晩期になるとさらに数が減って本遺跡と才の神遺跡が知られるだけである。全盛を極めた中期文化も次第に衰退の様相を示していることが遺跡数の上からも示されたといえよう。この現象は全県的な傾向であり、冷涼化する気候が大きく影響しているものと考えられる。三郷村の後・晩期は、上記遺跡からの散発的な土器片の出土があるだけで、その生活内容等を知る資料は今のところ得られていない。

次いで弥生時代を迎えると南安曇郡下では他地域に先がけて黒沢川右岸、堂原の両遺跡にその文化の伝来をみている。黒沢川右岸遺跡の昭和58年の発掘調査では、弥生中期の竪穴住居址を2軒検出しており、弥生文化の波及を考える上で貴重な遺跡となっている。しかし後続せず、短期間の居住で終わってしまっている。そしてこの黒沢川右岸遺跡を最後にして上流域では遺跡がみられなくなるが、古代に至って下流域の三角原、楡小路、楡中村、楡上手、楡道下、住吉丁田等に人々の居住がみられるようになる。水田地帯となっている沖積地であるが、黒沢川の川尻に当たり、黒沢川の小支流を利用しての生活であったものと考えられる。これらの遺跡は平安期の遺物を出す遺跡が多く、長尾・栗の木下遺跡や坂がいと遺跡等を含めて、住吉庄開発の歴史を考える上で大切な遺跡群となろう。

また本遺跡の範囲内であるアルプス学園前に古墳と呼んでよいのか躊躇ちゆうちよするような小古墳があり、昭和25年に調査されている。石室は1 m程度のもので2個の石が残っていたのみで、出土遺物等は不明である。

以上、東小倉遺跡の所在する黒沢川沿いの遺跡を中心に列記したが、先記のように三郷村では遺跡の密集する地域である。これは黒沢川の水が人々の生活にとって必要なものであったり、両側に展開する広大な扇状地は食料獲得の地として極めて重要であったりしたからであろう。特に採集生活を中心とする縄文時代にあっては、そのことが強くうかがわれる。しかし稲作りを中心とする弥生時代以降にあっては、多孔質の扇状地は水もちが悪くて水田耕作には適さないため、順次沖積地への進出となったのである。(山田瑞穂)

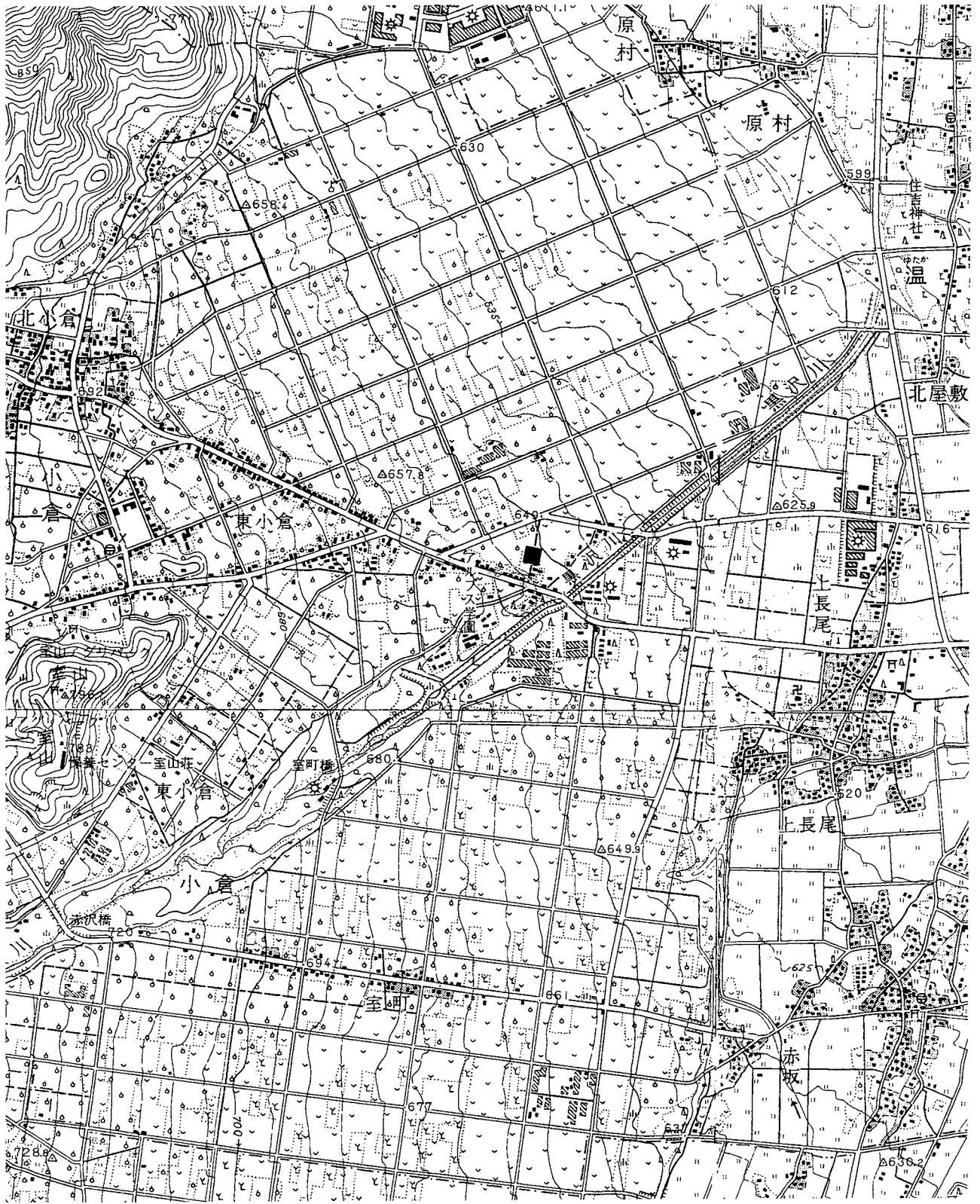
編集 平成 3年12月
平成11年 6月部分修正

番号	時代	名称
1	縄文	一本松遺跡
2	"	鳴沢A遺跡
3	"	塞の神遺跡
4	古墳時代以降	浄心寺南塚
5	縄文・歴史時代	浄心寺附近遺跡
6	縄文	東小倉
7	古墳	アルプス学園前古墳
8	縄文・弥生	黒沢右岸遺跡
9	縄文・弥生	チンクラ遺跡
10	縄文	南松原遺跡
11	"	調整池北遺跡
12	"	稲荷西遺跡
13	縄文・古墳	丁田遺跡
14	古墳	三角原遺跡
15	"	中村遺跡
16	縄文	楡小路遺跡
17	土師	楡上手遺跡
18	土師	栗の木下遺跡
19	土師以降	三柱神社東遺跡
20	縄文	白山神社横遺跡
21	"	一日市場郵便局南遺跡
22	土師	上総屋敷遺跡
23	弥生	川岸最氏宅地遺跡
24	弥生・古墳	堂原遺跡
25	土師	若宮遺跡
26	平安以降	道下遺跡
27	歴史時代	坂がいと遺跡
28	古墳	平福寺附近古墳
29	縄文	長尾城址北遺跡
30	歴史時代	長尾城址
31	縄文	赤坂西遺跡
32	"	住吉竹原遺跡
33	"	鳴沢尻遺跡
34	"	西牧遺跡
35	"	地藏沖遺跡
36	弥生	犬塚遺跡
37	"	堀尻遺跡
38	歴史時代	小倉城址遺跡
39	古墳	北小倉1号.2号塚
40	弥生	堂屋敷遺跡
41	土師	山の腰遺跡
42	縄文	大日堂北遺跡
43	土師以降	中沢遺跡
44	縄文	妙の久保遺跡
45	"	黒沢浄水場東遺跡

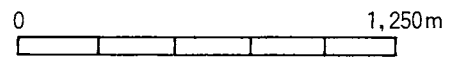
番号	時代	名称
46		富士塚
47	縄文	長者屋敷
48	縄文	千国橋北
49	縄文	大室遺跡
50	平安	及木西村遺跡
51	縄文	鳴沢B遺跡
52		龍峰寺跡



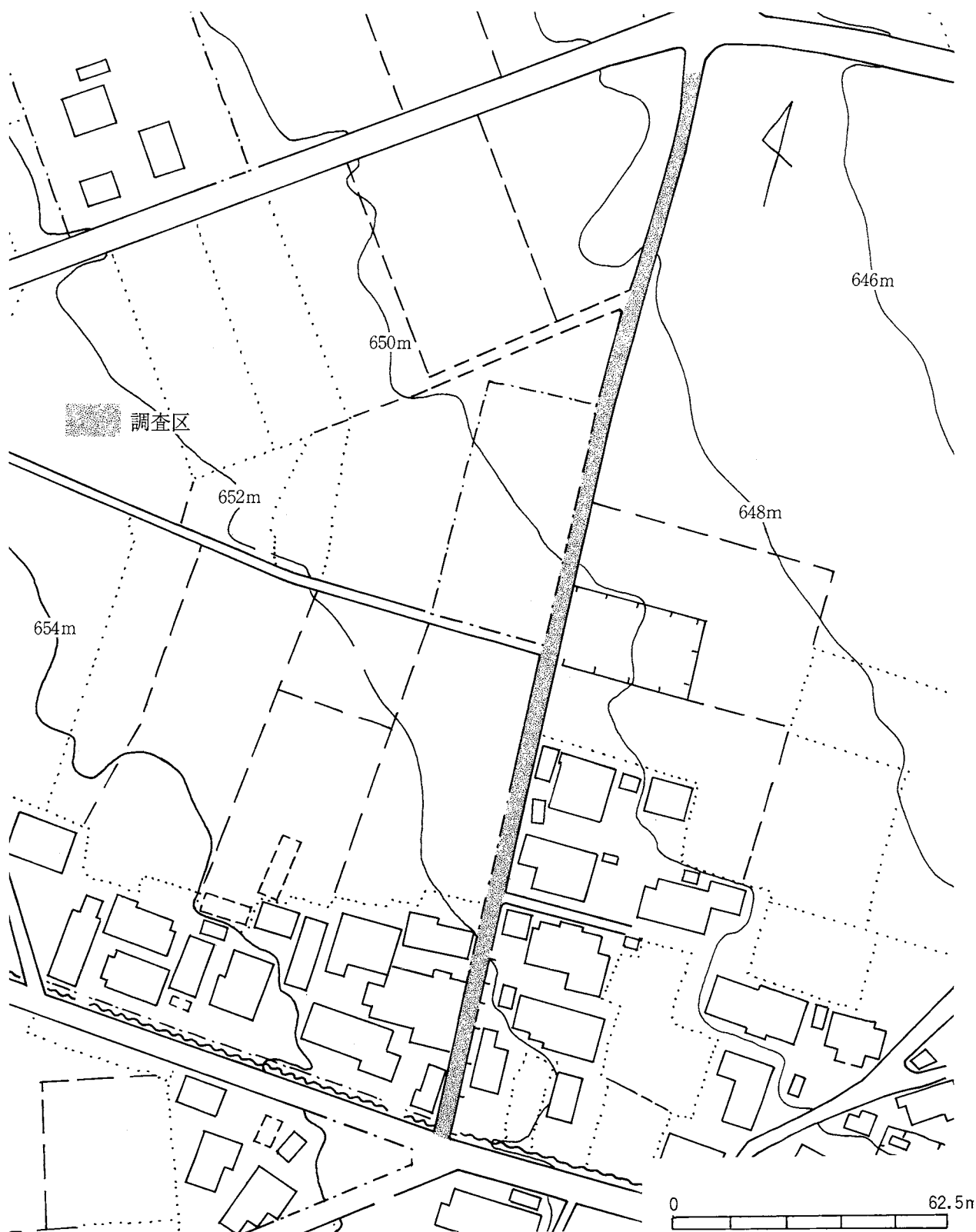
第3図 三郷村埋蔵文化財 遺跡包蔵地図



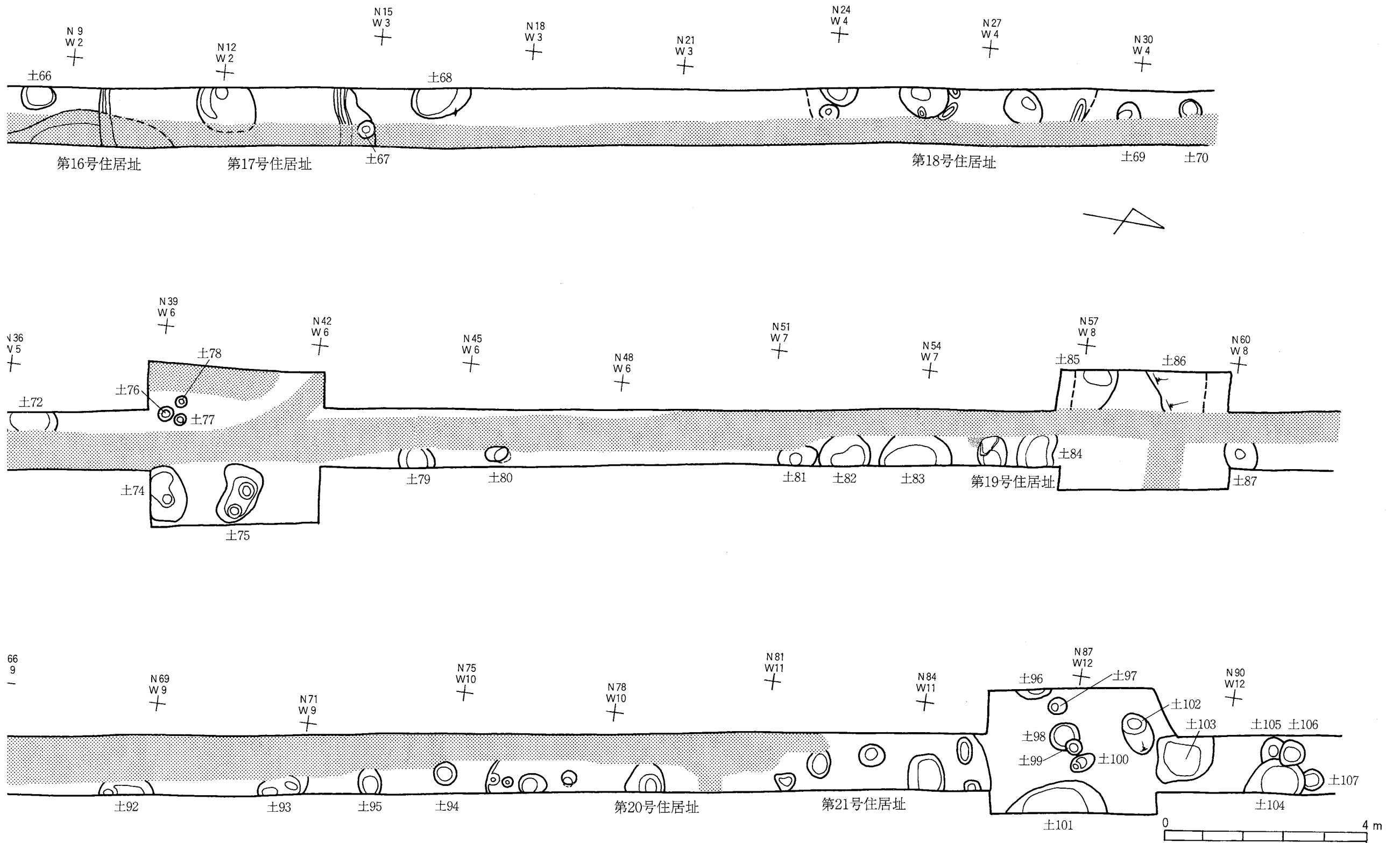
■ 調査位置



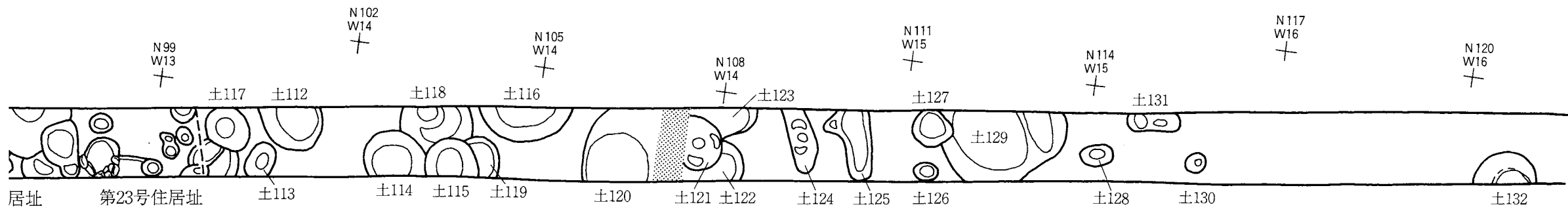
第4図 調査位置図①



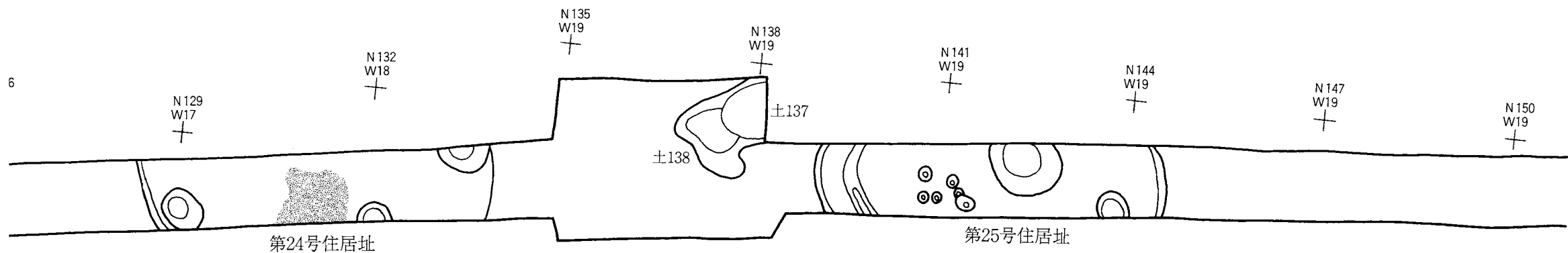
第5図 調査位置図②



第6図 遺構配置図①



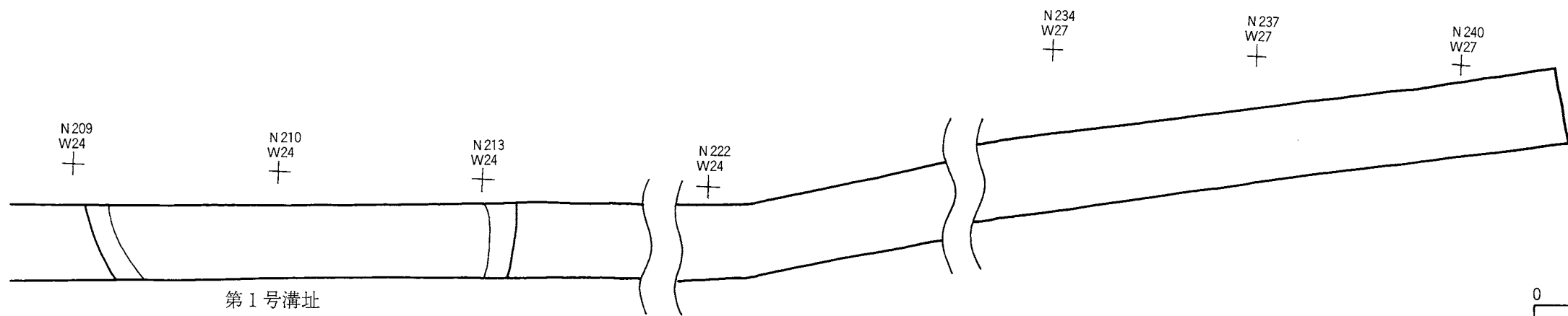
居址 第23号住居址 土113 土114 土115 土119 土120 土121 土122 土124 土125 土126 土128 土130 土132



6

第24号住居址

第25号住居址



第1号溝址



第7図 遺構配置図②

第3章 遺構と遺物

1. 竪穴住居址

(1) 第16号住居址

① 遺構 (第8図)

位置 N 9 付近に位置する。17住が上に床を貼る。

形状・規模 直径5 m程の円形か。

検出・調査状況 17住調査後、東側カクラン部分を取り除いたところ暗褐色土の落ち込みを検出。遺構の大半は調査区外にあるが、黄色土ロームの地山を掘り込んだ竪穴住居址の西端部分にあると判断した。西壁で40cmを測る。床面は特にたたきしめていない。

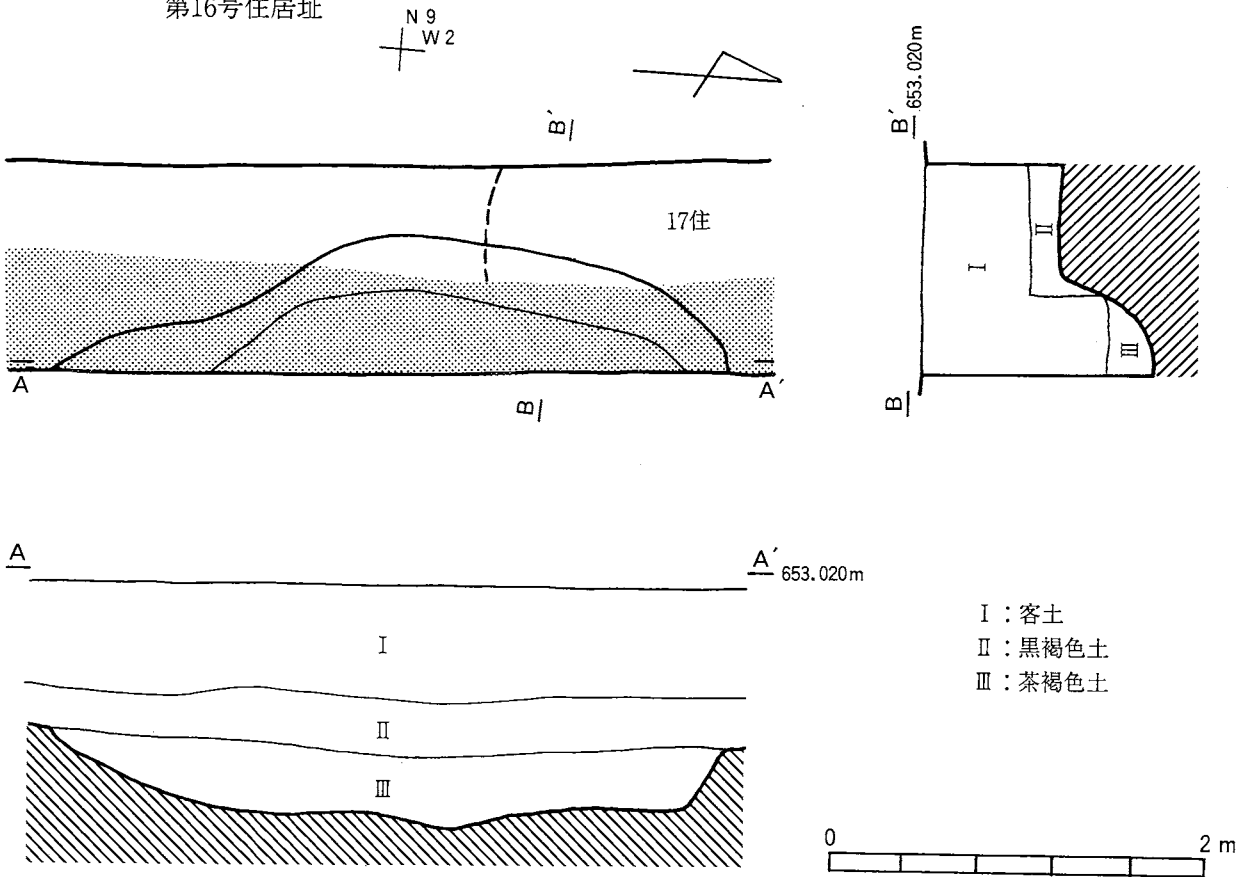
炉 確認されていない。

周溝 確認されていない。

② 遺物

図示していないが無文の小片が5点のみ出土している。

第16号住居址



第8図 第16号住居址

(2) 第17号住居址

① 遺構(第9図)

位置 N12付近に位置する。16住に床を貼る。

形状・規模 直径5.2m程の円形か。

検出・調査状況 黄土色ロームを掘り込む暗褐色土の落ち込みを検出。掘り下げたところ遺構の東半分は、農業用水道管工事によって壊されていた。西半分を10cm程掘り下げると、固くたたきしめられた床面を確認し住居址とした。南壁は18cm、北壁は14cmを測る。炉 住居址のほぼ中央部に1m×80cm×深さ42cmの土坑があり、覆土を取り除くと内部は赤橙色に焼けていた。住居址内の位置等から判断して、この土坑を大型の地床炉あるいは石囲い炉の石が抜かれた後埋没した炉址と判断した。

周溝 南壁から25cm内側に、幅20cm、深さ9cmの周溝が1条巡る。同じく北壁から10cm内側に、幅16cm深さ8cmの周溝が1条巡る。

② 遺物(第10図1~27、第26図14)

石器と土器の出土があるが土器はすべて破片であり量的には多くない。出土地点も炉とその周囲にまとまっていたが復元可能なものはなく器形の判明するものは本址にはない。

1~4は無文口縁部の破片で、いずれも深鉢形の器形をとる土器である。1は波状口縁をなすもので円状突起と口唇に刻目が施されている。5、6、8も口縁部片で、5は波状口縁の最頂部片で隆線と刻目がみられる。6は口縁部外側に刻目が、8には口縁下に縄文が付けられている。7、9~21は条線で飾られる深鉢形土器の胴部片で、条線が縦方向に付けられるものと綾杉状に施されるものがみられる。そして特徴のある渦巻文(11、12、16、17)や半弧状文(7、9)で飾っている。21は器外は黄褐色、器内には赤色塗彩されたらしく朱色を呈している。

22~25は縄文を施したもので、22は内弯する口縁部片で太い沈線と縄文がみられ、器外に赤色塗彩された痕跡がみられる。23、24は胴部片で垂下する沈線間に縄文を施す一群である。26は推定底径11cmほどの底部片で底面に網代痕をもつ。27は底径7.5cmの底部片で垂下する沈線が底部近くまでみられる。

13、16は炉址出土であり、他も同内容の土器であることから中期後葉Ⅱ~Ⅲ期に比定できるものであり、本址の所属時期もそこにおける。石器は1点のみであるが石皿状(第26図14)のものがある。砂岩製の半欠品であるが残存の長さ18cm、幅12.5cmほどであり、使用を示す磨面がみられる。石皿の器形をとらないが、自然石利用の石皿機能をもったものと考えたい。

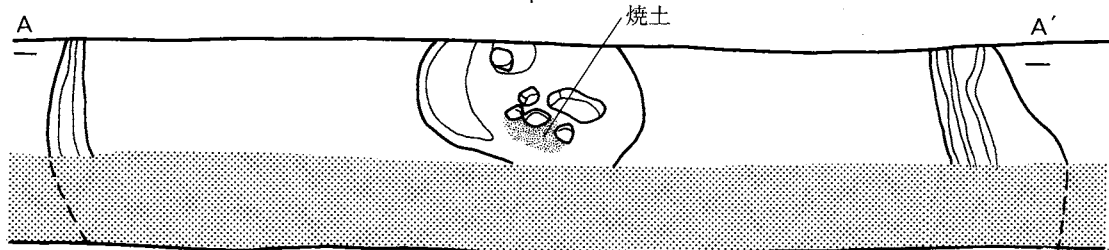
炉内に石片が約10点ほど入っていた。砂岩、粘板岩、チャート、黒曜石である。また骨片の出土があり、鑑定の結果、鳥骨ではないかとのことである。

第17号住居址

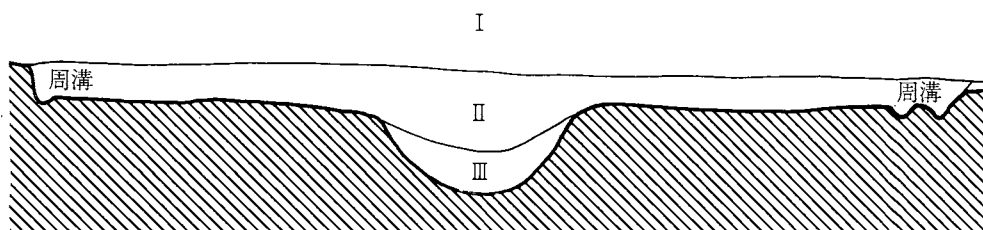
N 9
W 2



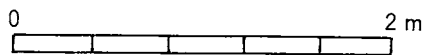
N 12
W 2



A A' 653.020m



- I : 客土
- II : 黑褐色土
- III : 茶褐色土



第9图 第17号住居址



第10图 第17号住居址出土土器拓影（1：3）

(3) 第18号住居址

① 遺構(第11図)

位置 N24～N27付近に位置する。切り合いはない。

形状・規模 直径5.6m程の円形か。

検出・調査状況 道路改良工事で入れられた碎石(厚さ約40cm)を取り除くと、小礫を多く含む黄色土層が現れた。この層を掘り込む暗褐色土の土坑が3個確認できた。3個の土坑は、ほぼ等間隔に位置している。中央の土坑を調査の結果炉址とし、両側の土坑を柱穴と考え、住居址の範囲を推定した。床面は工事で削平されて無くなっていた。

炉 中央の土坑120cm×(80cm)×深さ40cmを掘り下げたところ、底部付近に10cmの厚さに赤橙色の焼土が堆積していた。続いて土坑周辺部を詳しく調べると、コの字型に長細い長円形の掘り込みが巡ることから、この土坑は石囲い炉で炉石は抜かれていたと判断した。

周溝 確認されていない。

柱穴 P₁、P₂が柱穴と思われる。

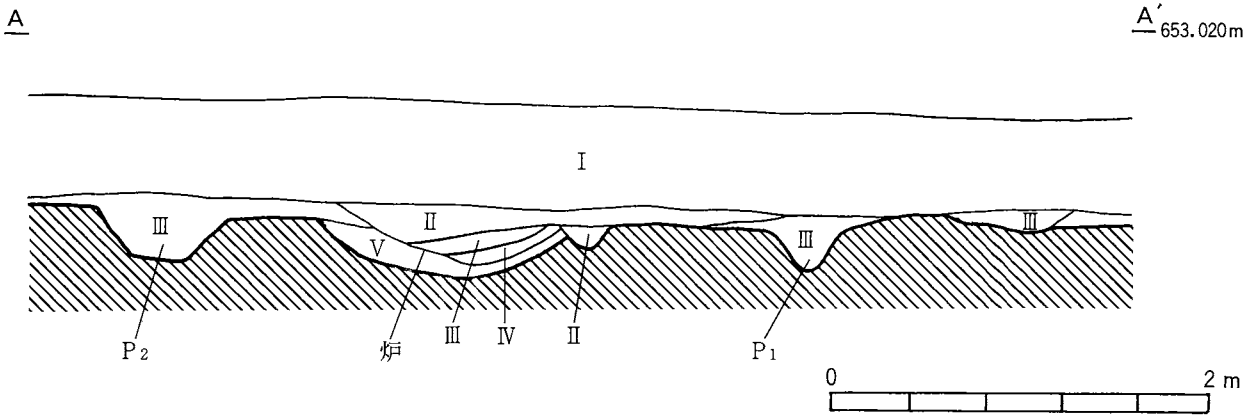
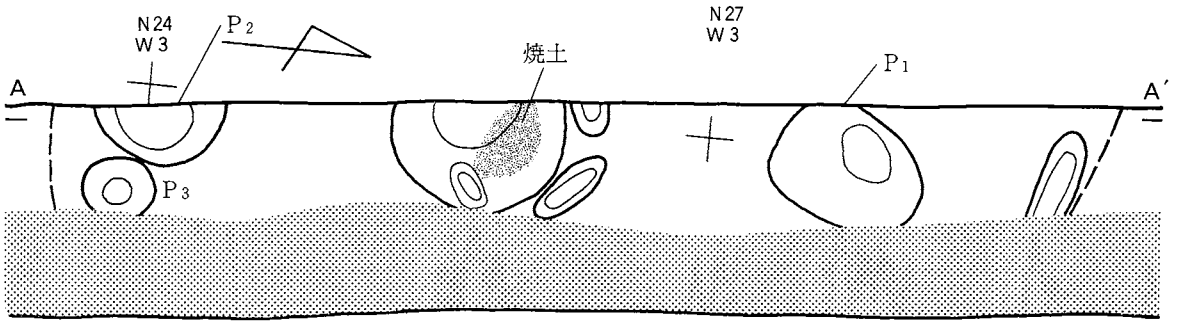
② 遺物(第12図1～15)

石器の出土はなく、土器のみの出土である。本址も炉址出土のものが中心で量的には少ない。炉址出土No.1土器が口縁部から胴部にかけて図上復元できるもので、1に図示した。これと同じに取り上げられたNo.1土器が図示の4、5、14であり、No.2が3である。この他に炉出土が6、8、10～13、15とある。

1は推定口径38cmで、黄褐色を呈し胎土、焼成共に良好である。やや内弯する無文口縁の下に隆線による区画を作り、垂下する渦巻文の周りに篋書きで沈線を綾杉状に引いて満たしている。いわゆる唐草文土器の代表であり、2～13もその破片ないし同様土器である。

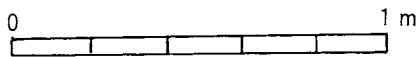
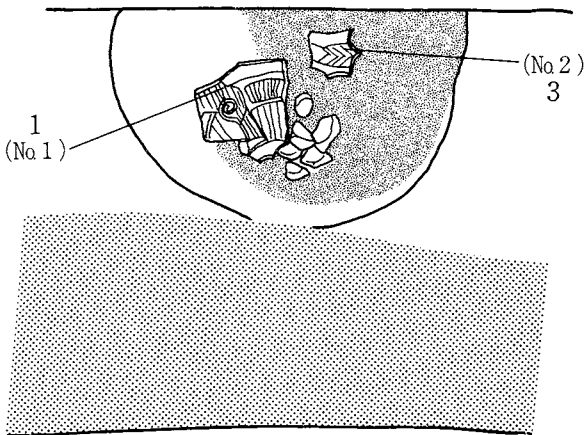
14、15は沈線内に縄文をもつ胴部片である。中期後葉Ⅲ期に比定される土器であり、本址の所属時期もそこにおける。

第18号住居址

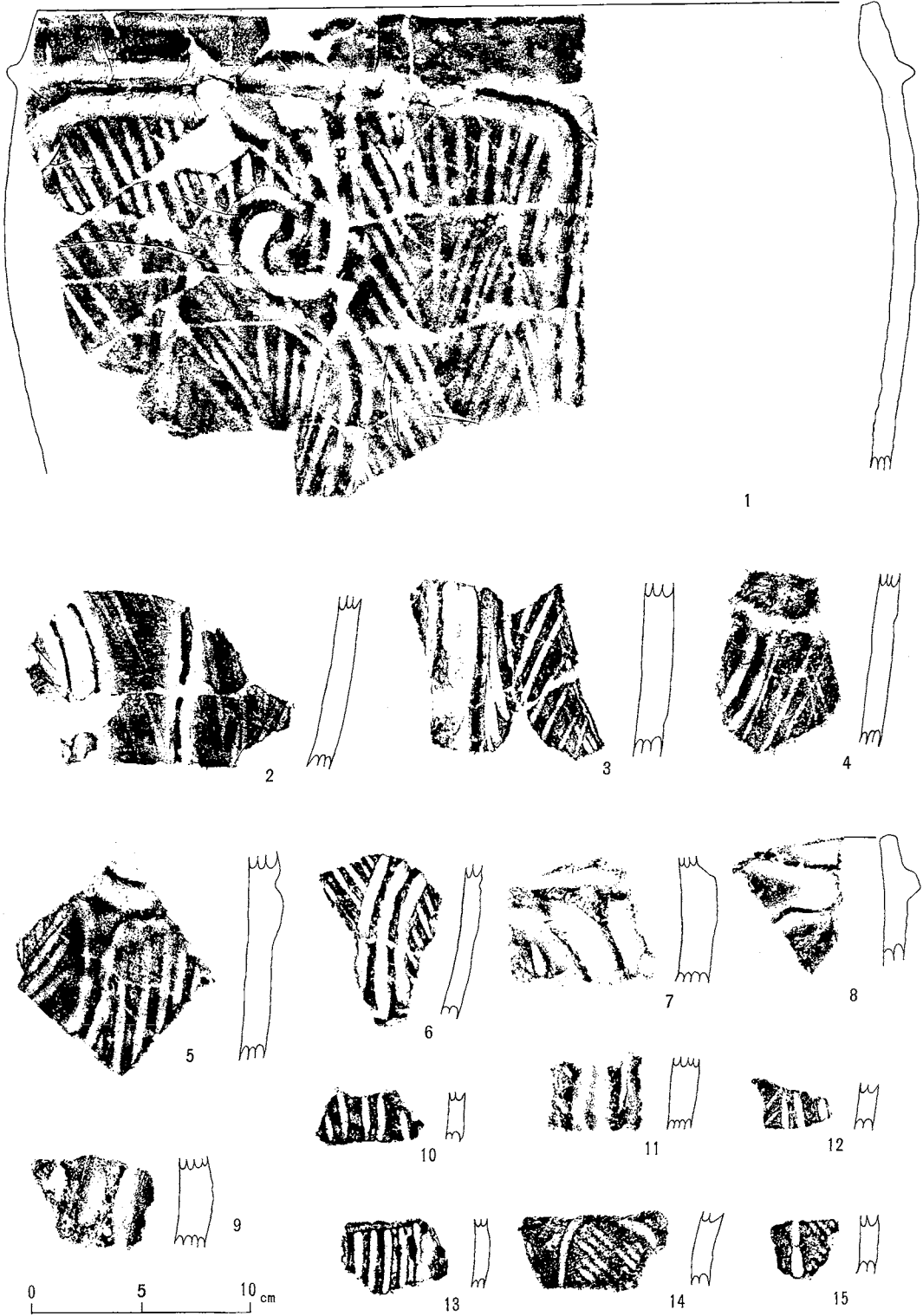


炉

- I : 客土
- II : 黒褐色土
- III : 暗褐色土
- IV : 赤橙色の焼土
- V : 褐色土



第11図 第18号住居址



第12图 第18号住居址出土土器拓影 (1:3)

(4) 第19号住居址

① 遺構(第13図)

位置 N55付近に位置する。切り合いはない。

形状・規模 不明

検出・調査状況 工事による削平が著しい。こぶし大から人頭大の礫が集中した個所を検出し、図化後に礫を取り除いたところ、下から(80cm)×60cmの土坑が現れ、内部には被熱した礫が崩れ落ちていた。土坑の南のへりには被熱し赤く焼けた床面の一部が残っていた。この土坑を炉址とし、周囲を精査したが、北側は工事ですべて削平されていて、住居址の痕跡がなかった。南側も土81、82、83に切られ、住居址の範囲を確定できなかった。

炉 石囲い炉と考える。壊されて廃棄されたと思われる。深さは28cmを測る。

周溝 確認されていない。

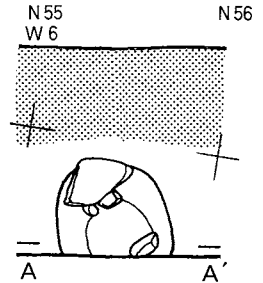
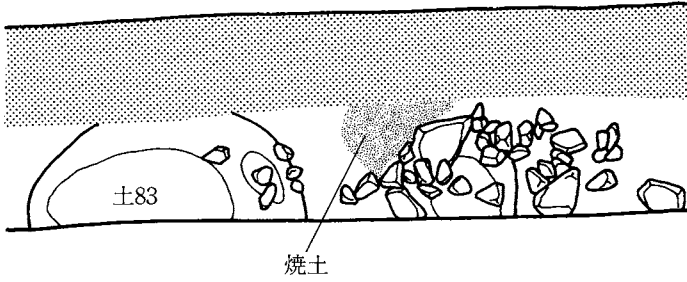
② 遺物(第16図1～3)

図示した1～3の土器片があるのみで石器の出土はない。1の口縁部片は全体の約1/5ほどであり、復元すれば推定31cmほどの口径をもつ深鉢となる。炉址No1土器として取り上げられたもので、2、3も同一個体である。黄褐色を呈し、胎土焼成共によく、固く焼きしまっている。無文口縁部下に棒ないし指で押し引く幅広い沈線のためにその両側が隆線となっており、この隆線が垂下して区画を作っている。太い沈線内には押し引いた際の痕がかすかな条線となって残っている。そして区画上部に半円形の勾玉状文を配し、それ以下は篋状工具による綾杉状ないし「ハ」の字状文で満たされている。

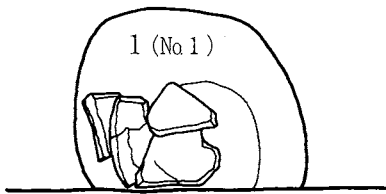
中期後葉Ⅳ期に入るもので、炉の土器であることから本址の時期もそこにおける。

第19号住居址

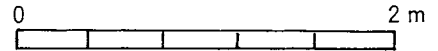
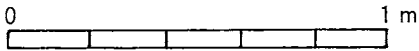
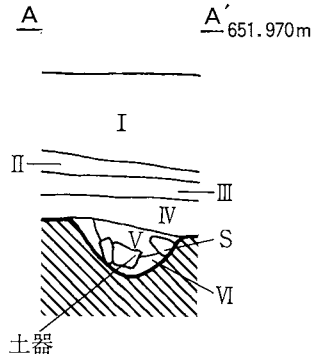
+ N54
W7



炉・遺物出土



- I } 客土
- II } 客土
- III: 黒褐色土
- IV: 褐色土
- V: 暗褐色土
- VI: 暗赤褐色土



第13図 第19号住居址

(5) 第20号住居址

① 遺構 (第14図)

位置 N78付近に位置する。21住と接するが切り合いは不明。

形状・規模 5 m程の円形か。

検出・調査状況 小礫を多く含む黄色土層を明瞭に掘り込む暗褐色土を検出。掘り下げると南側で壁高10cmを測る。床面は地山の黄色土層で特に床はたたきしめてはいない。21号住と接する位置に水道工事によるカクランを受けているため、双方の切り合いは不明である。

炉 確認されていない。

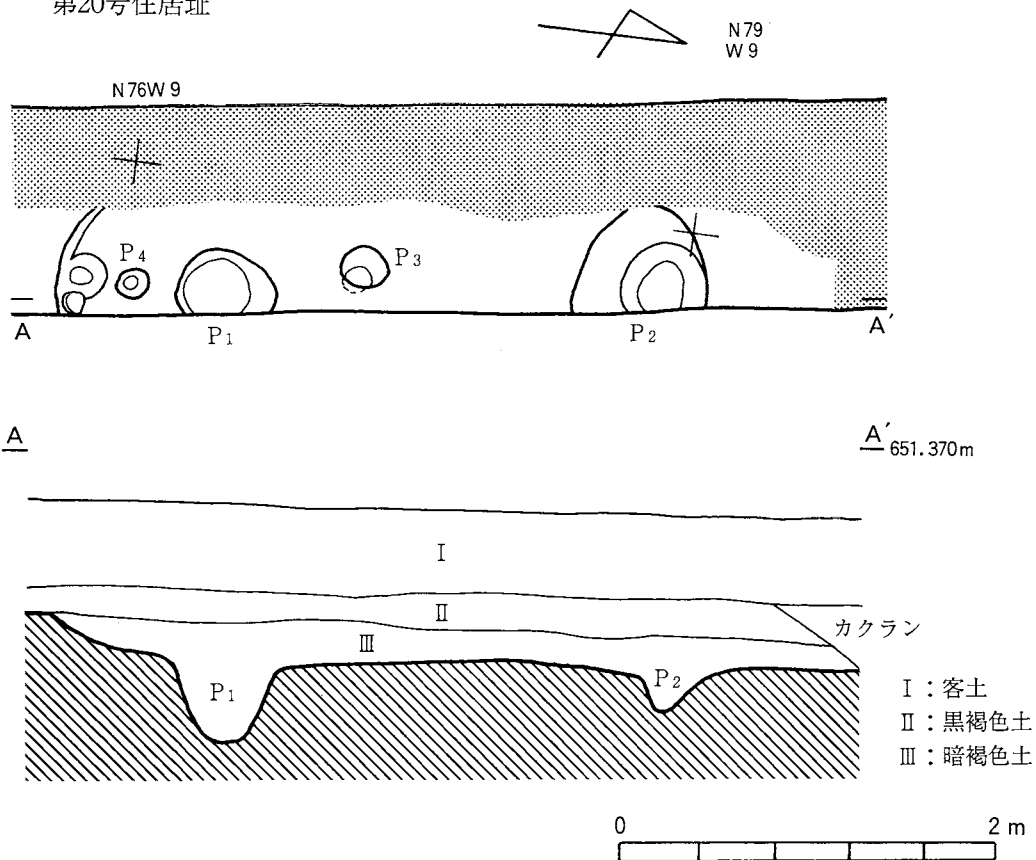
柱穴 P₁が考えられる。

周溝 確認されていない。

② 遺物 (第16図4～7)

石器の出土はなく、土器片が図示した4～7の他に小片が10点ほどあるのみで出土量は少ない。いずれも磨滅しており表面がざらついてもろい感じのするものである。

第20号住居址



第14図 第20号住居址

4は土器胴部につく把手片である。5は無文口縁部下に押し引いて隆線を作り出しており、6と共に粗雑な作りである。おそらくその下は逆U字状文になるものと思われる。7には篋状工具による条線がみられる。

中期後葉Ⅳ期に比定されるものと思われる。

(6) 第21号住居址

① 遺構(第15図)

位置 N81～N84付近に位置する。20住と接するが切り合いは不明。

形状・規模 5.5m程の円形か。

検出・調査状況 20住の北側に10～20cmの礫を多量に含む暗褐色土の広がりを確認した。礫を図化した後取り除くと、P₁～P₆を検出した。断面観察の結果、北壁は礫混じりの黄色土を10cm程掘り込みゆるやかに立ち上がる。覆土は床面まで平均20cmの厚さをもつ。南壁はカクランにより不明。

炉 確認されていない。

周溝 確認されていない。

② 遺物(第16図8～13、第25図1)

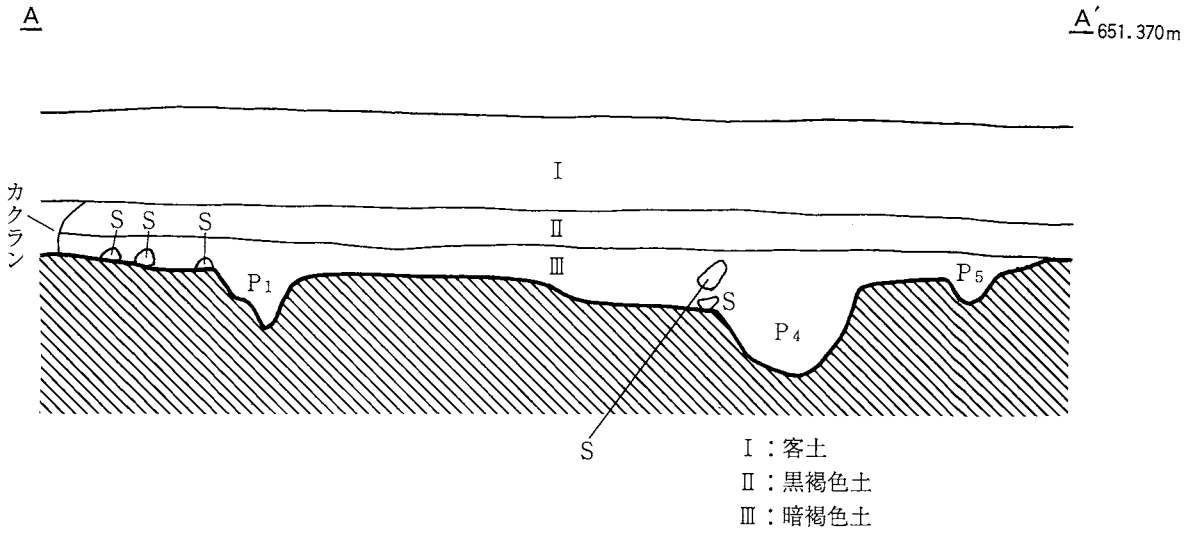
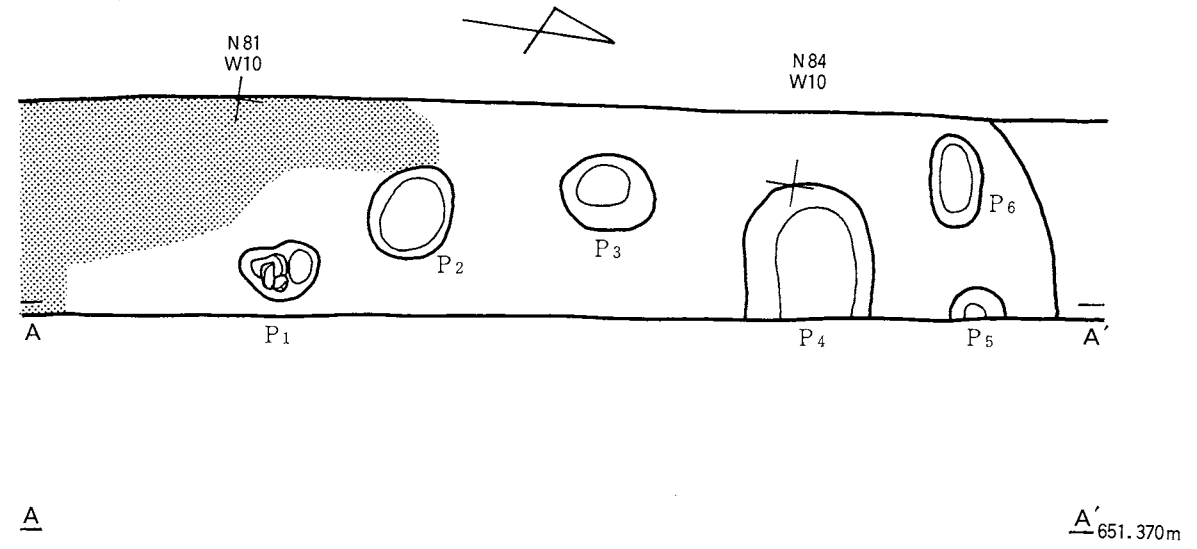
本址からは石器と土器が出土している。石器は石鏃1点のみである。長さ2.3cmの黒曜石製のほぼ完形品である。

土器は図示した8～13の6点の他に小破片がビニール袋1/3ほど出土しており、量的に多くない。

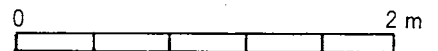
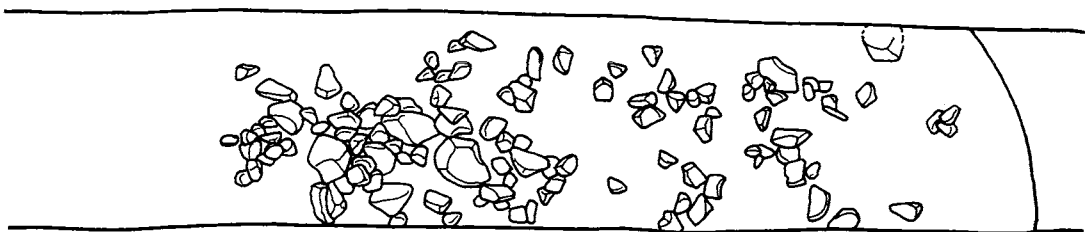
8～10は磨耗がみられ、いずれも縄文が施されているが9、10ではかすかにしか拓影には残らない。逆U字状内を満たす縄文とみられる。9は底部片で垂下する隆線と沈線がみられる。10はP₆出土である。11～13は篋書きの綾杉状文ないし「ハ」の字状文が区画内に施されるものであり、13の円状の凹みは勾玉状文の一端とみられる。いずれも固い焼きで磨滅はない。

中期後葉Ⅳ期に比定される土器である。

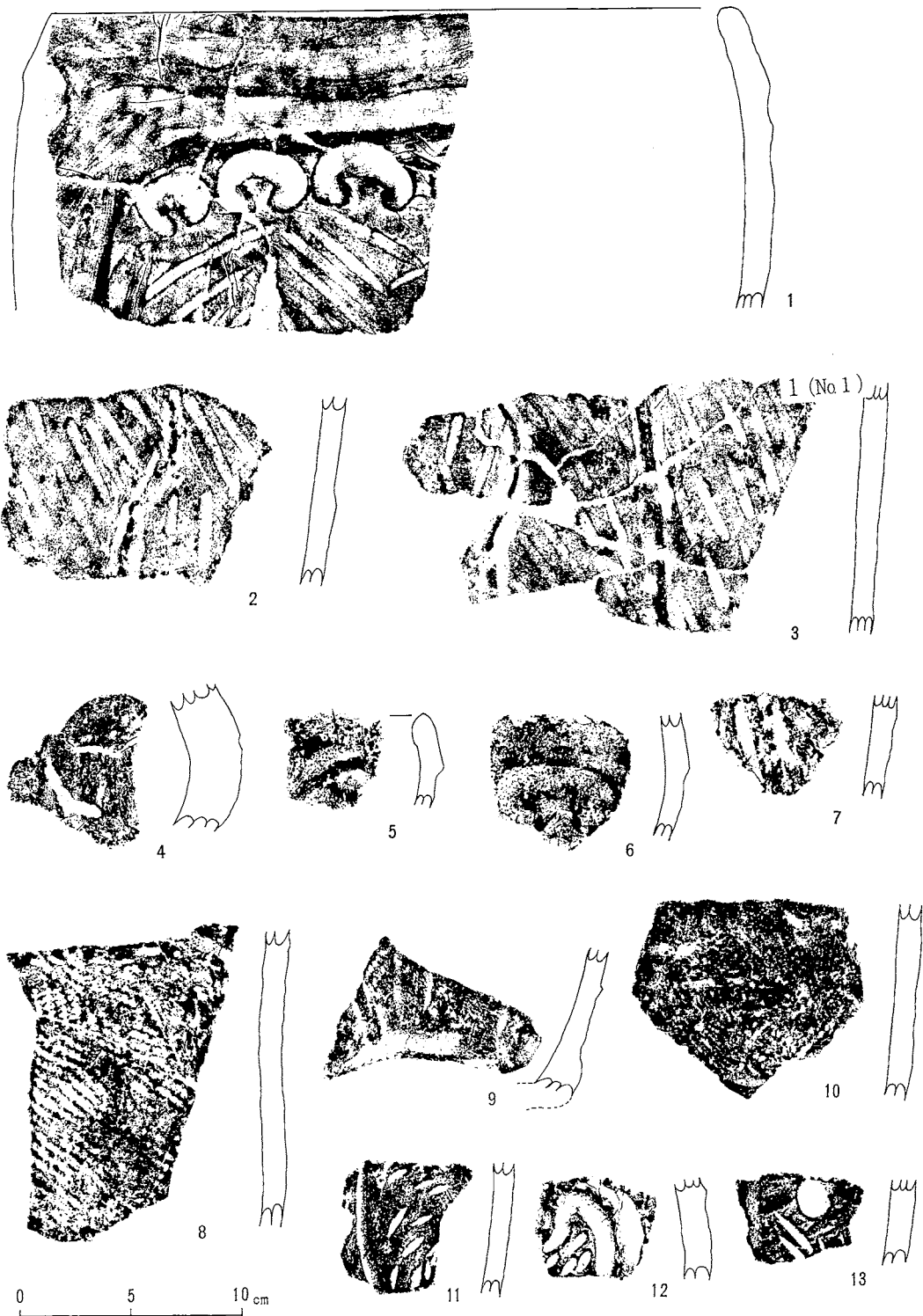
第21号住居址



礫出土図



第15図 第21号住居址



第16图 第19·20·21号住居址出土土器拓影(1:3)(1~3-19住, 4~7-20住, 8~13-21住)

(7) 第22号住居址

① 遺構(第17図)

位置 N96～N99付近に位置する。23住が床を貼る。

形状・規模 5.5m程の円形か。

検出・調査状況 23住の調査中に炉址南側を掘り進めていくと、23住床面より12cm程低い位置に別の床面を発見した。これを22号住の床面と考え、住居址の範囲を調査した。

炉 中央に160cm×(160cm)×深さ60cmの土坑がある。内部は被熱していないが、大型の地床炉の可能性はある。

周溝 南側に幅22cm深さ20cmの周溝が1条巡る。北側は確認されていない。

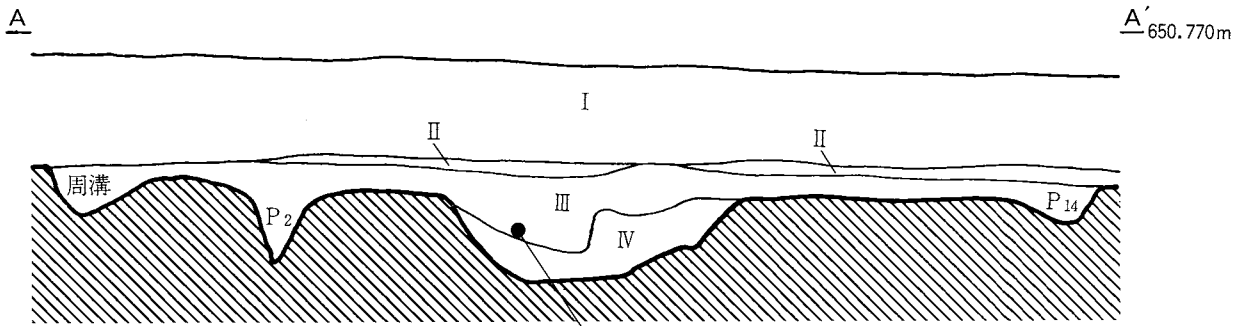
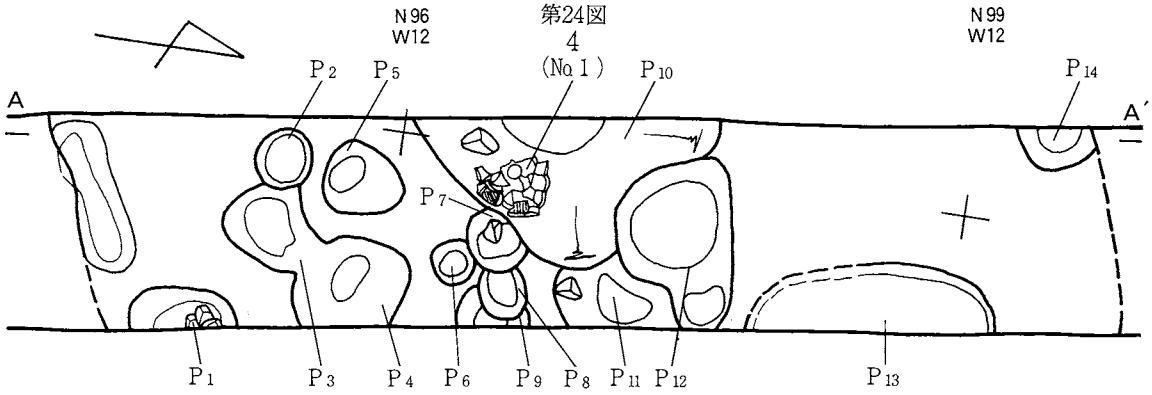
② 遺物(第18図1～27、第24図4、第26図1～2)

本址出土遺物には石器と土器がある。石器は第46図1～2の打製石斧でいずれも覆土からの出土である。1は粘板岩製の長さ10.6cm、最大幅4cm、2は硬砂岩製の長さ10cm、最大幅5.3cmのものでいずれもほぼ完形品である。

土器は図示した以外に約100片ほどで量的に多くない。器形の判明するものは、第24図4だけである。4は底径12cm、最大胴径37.5cm、残存高31cmを計るもので、他遺跡出土例から推察すると頸部にかけて一旦しまり、更にそこから外反する器形をとるものと思われる。渦巻文と縄文で飾られる、いわゆる唐草文土器である。茶褐色を呈し、胎土も焼成も良好。

拓本図の1～4、7、8は口縁部ないしそれに近い破片で、1、4、7、8は横帯区画の中に1、7は縄文を、4、8は条線を満たしている。2、3は横に隆線が走っており、3は波状口縁になるらしい。1、4、7には磨耗がみられる。5、6、9～21、24はいずれも胴部片で渦巻文の5、綾杉状ないし「ハ」の字状文の9～13、16、24、区画内に縄文を施す14、15、17、19がある。20は逆U字状に沈線を描くもの、22は口縁下に勾玉状文をもつものである。25は底面に網代痕がある。26は肥厚した口縁の突起部で縁にそって沈線と刺突列点文がある。27は断面が円形の把手部片である。このように本址出土土器には中期後葉Ⅲ～Ⅳ期の様相が混在してみられるが、覆土出土はⅣ期、床面出土はⅢ期の傾向が多くみられる。

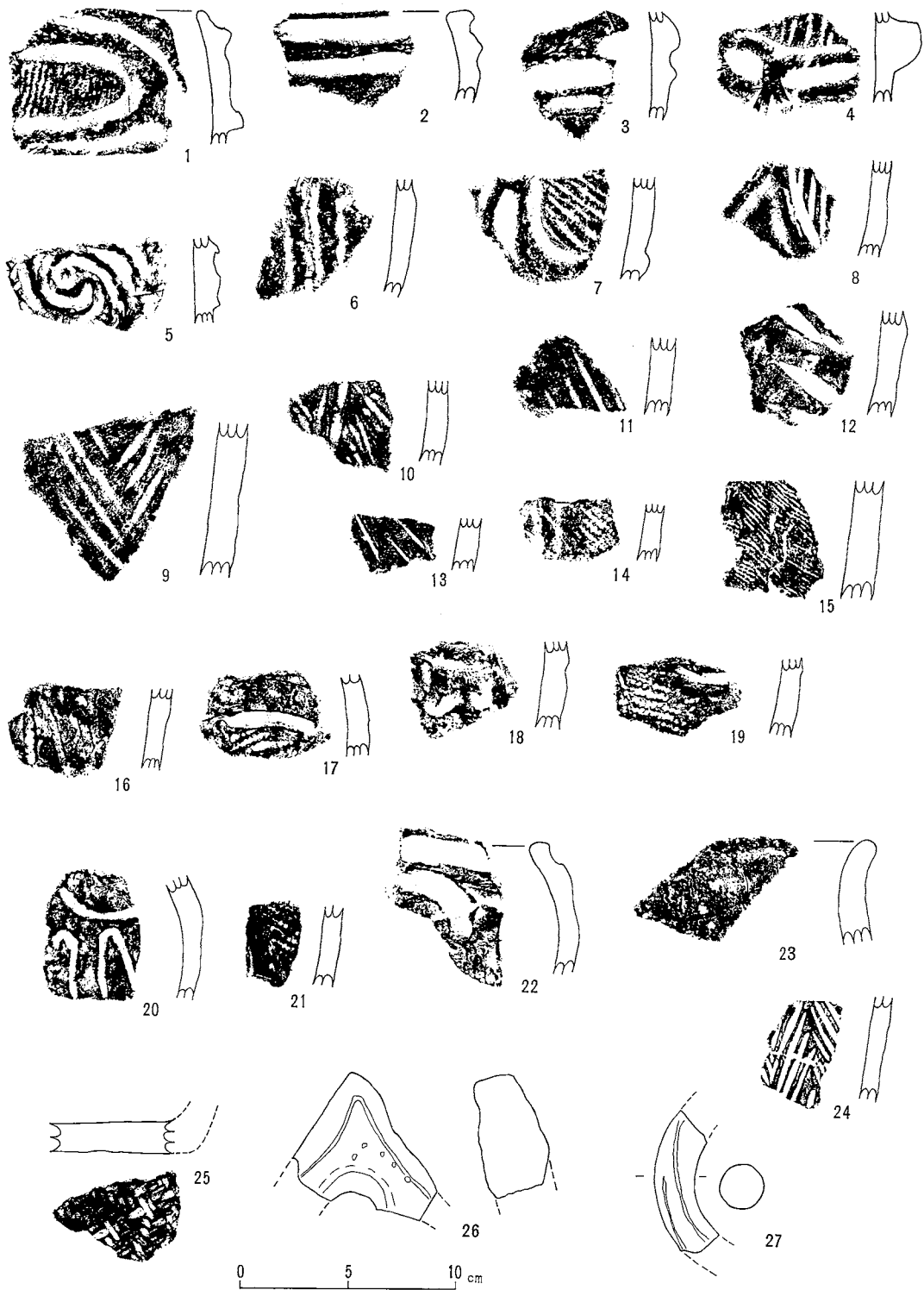
第22号住居址



I : 客土 III : 暗褐色土
 II : 黒褐色土 IV : 茶褐色土

第24図
4

第17図 第22号住居址



第18图 第22号住居址出土土器拓影 (1:3)

(8) 第23号住居址

① 遺 構 (第19図)

位置 N96～N99付近に位置する。23住に床を貼る。土117に切られる。

形状・規模 径6 m程の円形か。

検出・調査状況 道路工事に伴う客土を取り除いた段階で、こぶし大～20cmの礫と10cm前後の大型の土器片が幅1 m位の範囲に集中して現れた。図化後これを取り除くと、石囲い炉が現れた。23号住の炉として周辺を調査し、住居址の南北の周溝を捉えた。床面は、炉を中心とした北側は黄色土ロームを敷いてあったが、南側は明瞭でなかったため22住の床面まで掘り抜いてしまった。断面を観察し22住に貼り床をして23住が構築された状況を確認した。

炉 石囲い炉75cm×55cm×深さ23cmの長方形。東半分の炉石は現存しない。内面はわずかに焼けている。

周溝 北側に幅13cm深さ5 cmの溝が周溝と思われる。

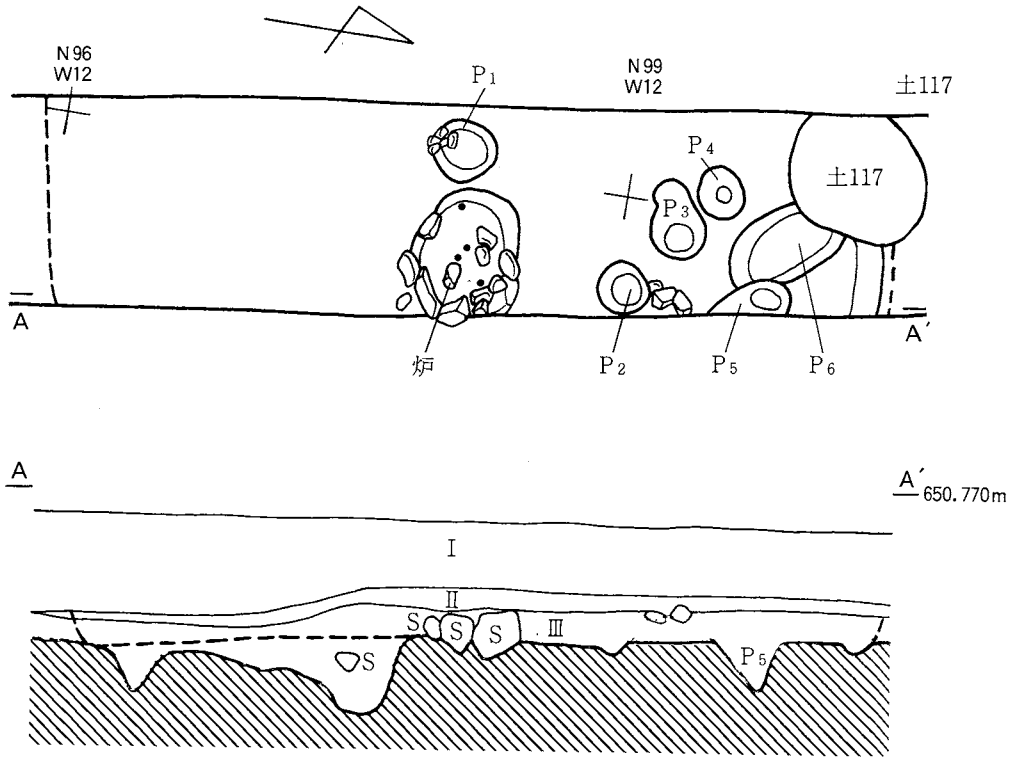
② 遺 物 (第21図1～11)

土器片の出土が図示以外に炉内より約30片ほどあるだけで量的には少ない。勿論器形の判明するものはない。

1～9は器厚の大形土器の破片で、簡略化され、くずれた綾杉状文ないし「ハ」の字状文が付けられるものであり、1は直斜状に大きく開く口縁をもつ土器である。4は内弯する口縁部で区画隆線内に半円状の勾玉状文が施されている。1～3はNo.3土器として取り上げられたもので磨滅がみられる。4と9はNo.2土器、5と10はNo.1土器、6～8は炉出土土器として取り上げられている。

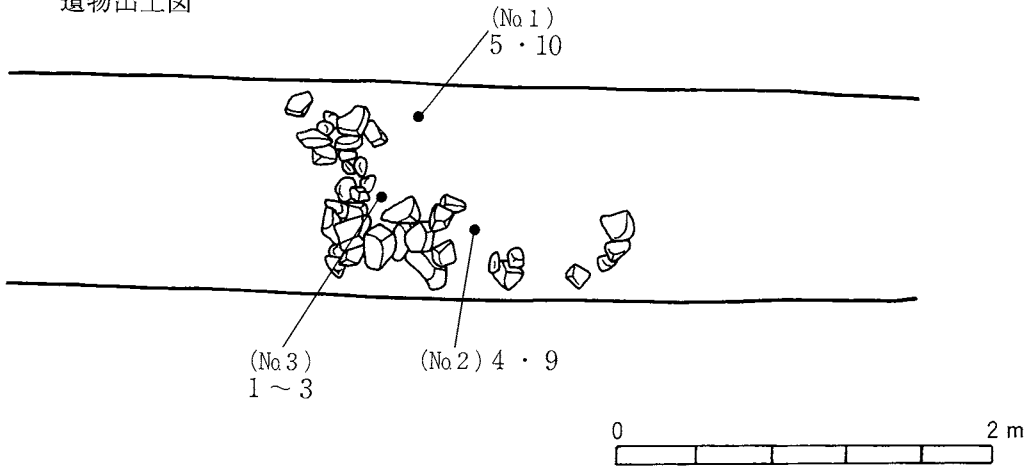
10はゆるい波状口縁をなす器形をとり、口唇下に押し引きされた太い沈線が、その下には縄文が施されている。胎土焼成共によく黄褐色をしているが外面には多量の煤が付着し、煮沸使用がうかがわれる。炉内出土土器から本址は中期後葉IV期に営まれたものであろう。

第23号住居址



I : 客土 III : 暗褐色土
 II : 黒褐色土

遺物出土図



第19図 第23号住居址

(9) 第24号住居址

① 遺構(第20図)

位置 N129～N132付近に位置する。切り合いはない。

形状・規模 径5.6cmの円形か。

検出・調査状況 黄色土を明瞭に掘り込む暗褐色土の広がりを検出。掘り下げると北壁から1m40cmの地点に蓋石と埋甕が検出された。床面は、黄色土を敷きつめ固くたたきしめられている。P₂南側の床面は焼けていて、赤橙色に変色している。

炉 確認されていない。

柱穴 P₂、P₃が柱穴と思われる。

埋甕 逆位で埋設されていた。土器の上端部を取り囲むように1～2cmの小礫が敷きつめられていた。埋甕の内側を観察すると、軟性でしまりのない暗褐色土が上部ぎりぎりまでつまっていた。埋甕の覆土上面にこぶし大の礫が入っており、蓋石と接合した。埋設時の様子がうかがえる資料である。

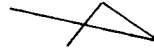
② 遺物(第21図12～25、第24図1)

本址も土器の出土だけで図示以外に小片が約100点ほどあり量的に多くはない。第24図1は本址埋甕であり唯一の器形の判明するものであるが胴部下から底部を欠いて使用している。口径31cm、残存高33cmを計る。最大径は36cmで口縁部下にあり、渦巻状文で飾られる典型的な唐草文土器である。胎土焼成ともにあまり良好とは言えず、ややもろい感じのする土器で茶褐色を呈している。

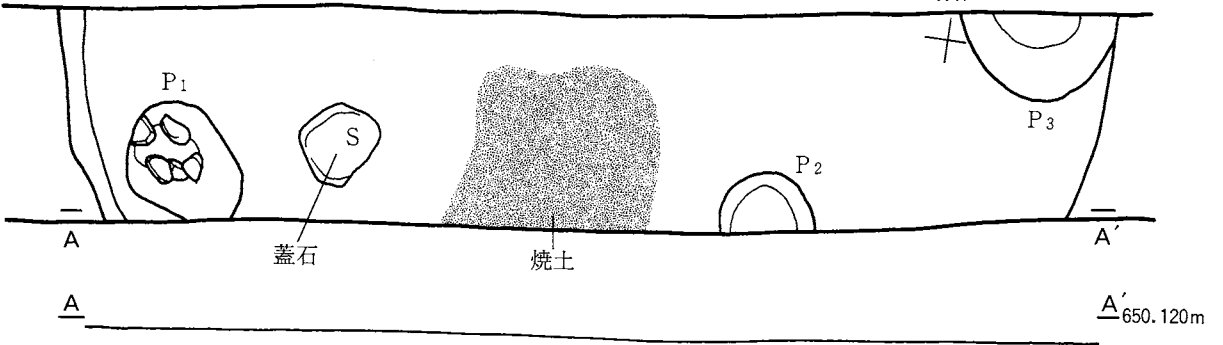
拓本図12は口縁部下に櫛形文を有するもの、13、14は口縁部に横帯区画を作り、13には条線文、14には縄文がみられる。15は口縁近くで区画隆線がみられ、他は茶褐色をしているのに、これのみ黒色を呈している。16～20は綾杉状文をもつもの、22、23、25は縄文の施されたものであり、25は推定底径8cmほどの底部片である。24は渦巻状文で、これらはいずれも中期後葉Ⅲ期に比定されよう。21は横帯区画内に半截竹管による押圧がみられるもので1片のみ本址に先行するものである。まぎれ込みであろう。

第24号住居址

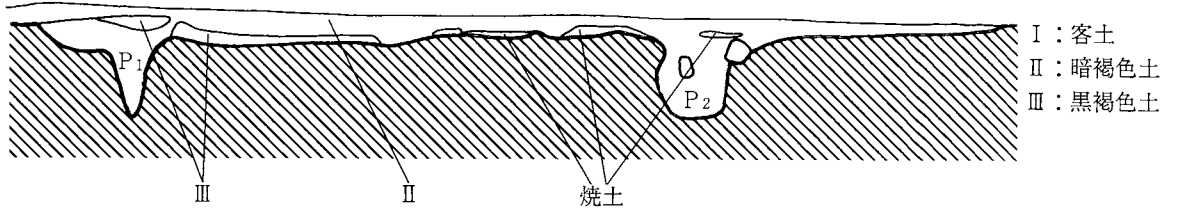
N130
W17



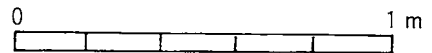
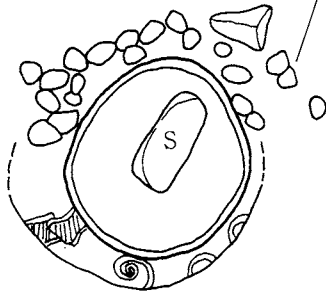
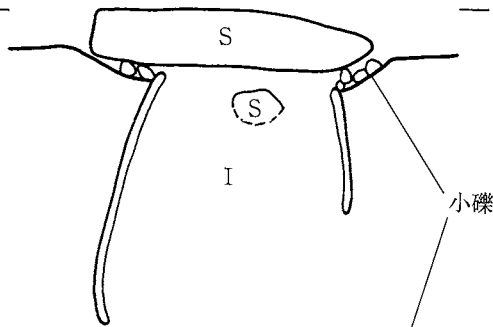
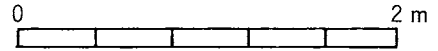
N133
W17



I



埋甕と蓋石



第20図 第24号住居址



第21图 第23·24号住居址出土土器拓影（1：3）（1~11-23住，12~25-24住）

(10) 第25号住居址

① 遺構(第22図)

位置 N141～N144付近に位置する。切り合いはない。

形状・規模 径5.6mの円形か。

検出・調査状況 黄色土を明瞭に掘り込んで作られている。南壁で23cm、北壁で10cmを測る。床面は全体に固くたたきしめられている。P₁のへりには台石が置かれていた。

炉 中央北寄りに径1m程の土坑がある。内面はあまり焼けていないが、大型の地床炉あるいは石囲い炉の石が抜かれた跡と考えられる。

周溝 南壁から32cm内側に1条巡る。北側は観察されなかった。

② 遺物(第23図1～26)

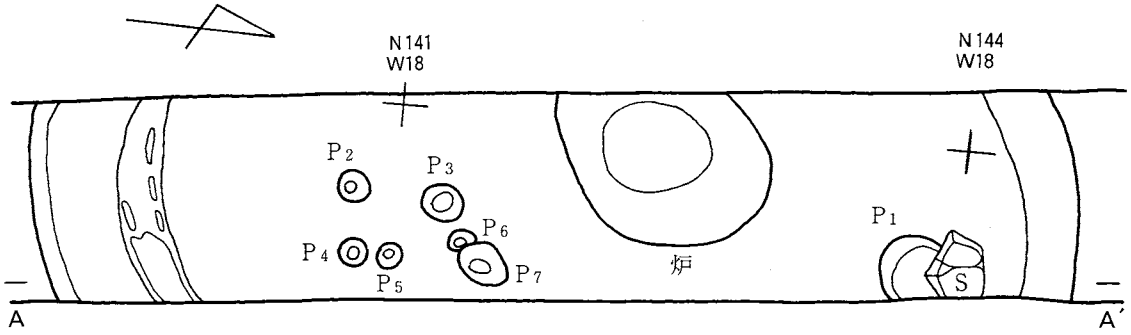
本址も土器のみで図示した26片の他に、ビニール袋約半分程で量的に多くない。炉址から23—No1、8—No2、6—No3、10、15、22—炉として取り上げられている。20が覆土出土だけで他は床面出土となっている。

1、4～11、23～25は縄文をもつ一群で、口縁下に横帯区画とその下に垂下する2本の沈線で縦長区画を作り、共に縄文を満たしている。縄文と無文とのバランスのとれた土器である。23、24は底径6cm、25は5cmほどの底部片で、23には明らかに縄文がみられるが、24、25は磨滅しているため縄文はかすかにしかみられない。

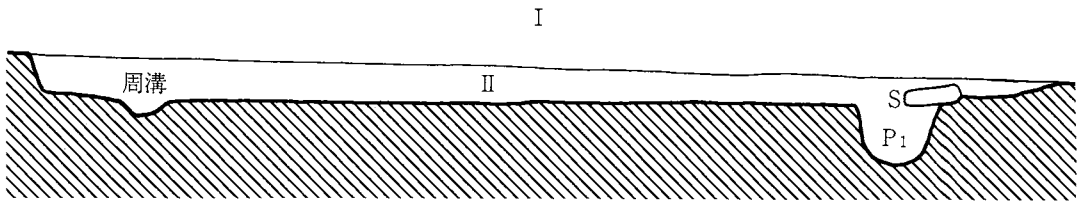
2、12～17、21はいずれも胴部片で、綾杉状文が施されている。22は突起部、26は推定底径5cmの底部片である。いずれも中期後葉Ⅲ期に比定される土器であって、本址の所属時期もそこに考えられる。

18、19、20は爪形状や刺突文が施されたもので、本址の土器に先行する中期中葉の土器である。まぎれ込みとみられる。

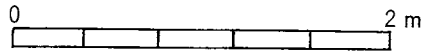
第25号住居址



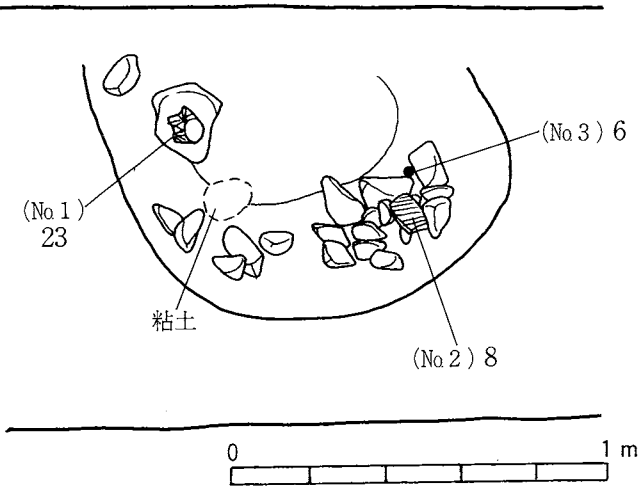
A A' 649.920m



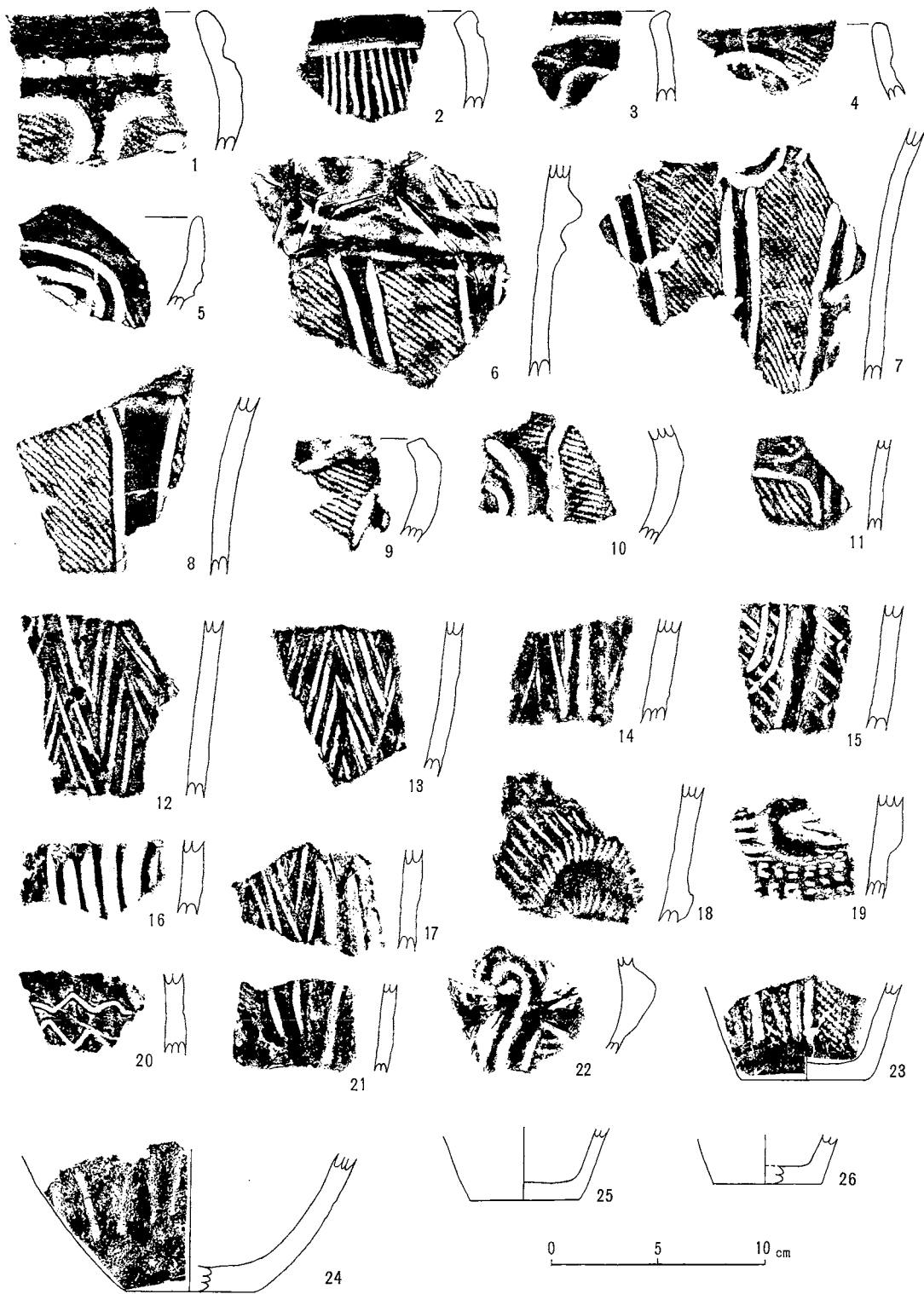
I : 客土
II : 暗褐色土



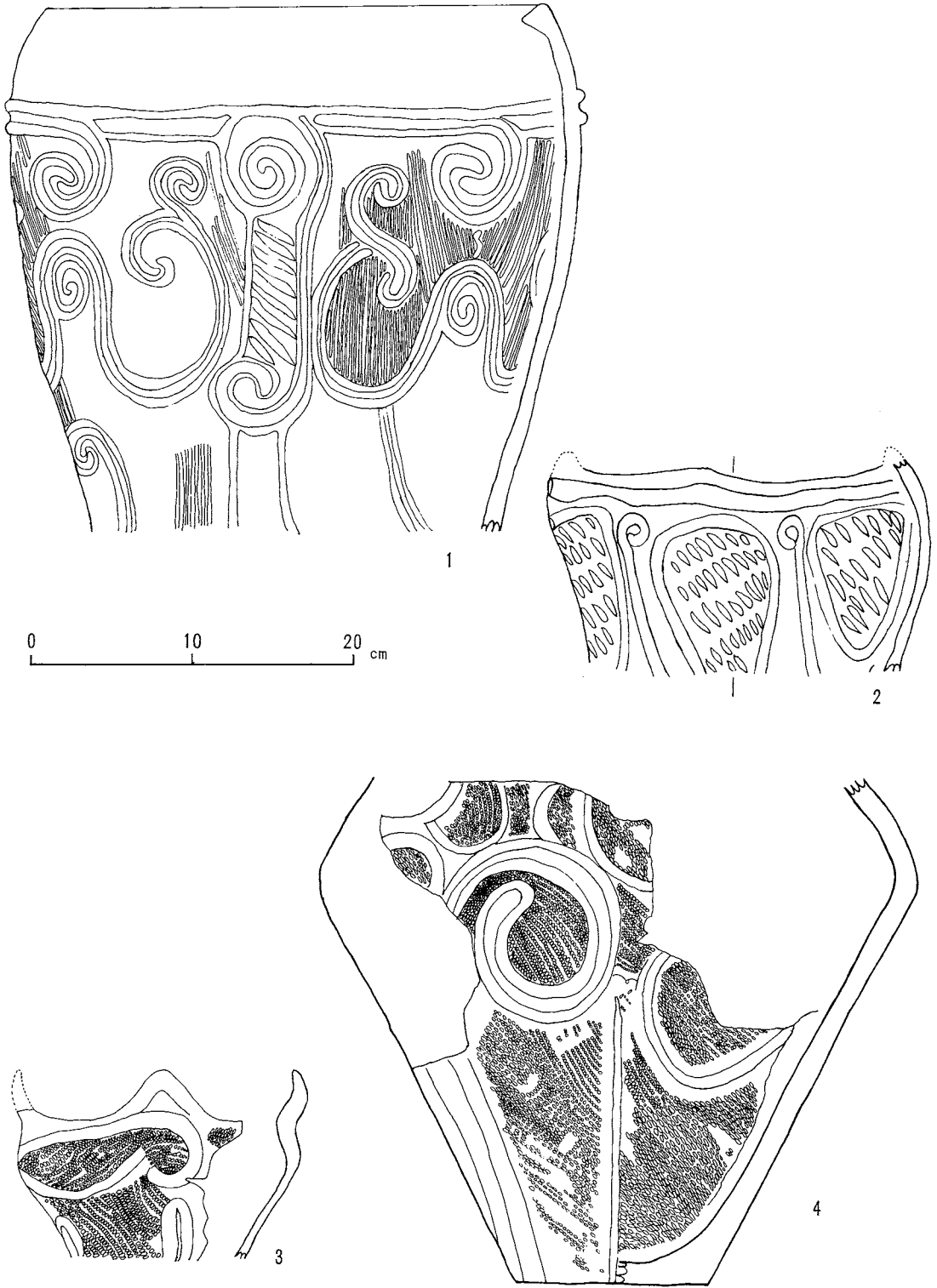
炉遺物出土図



第22図 第25号住居址



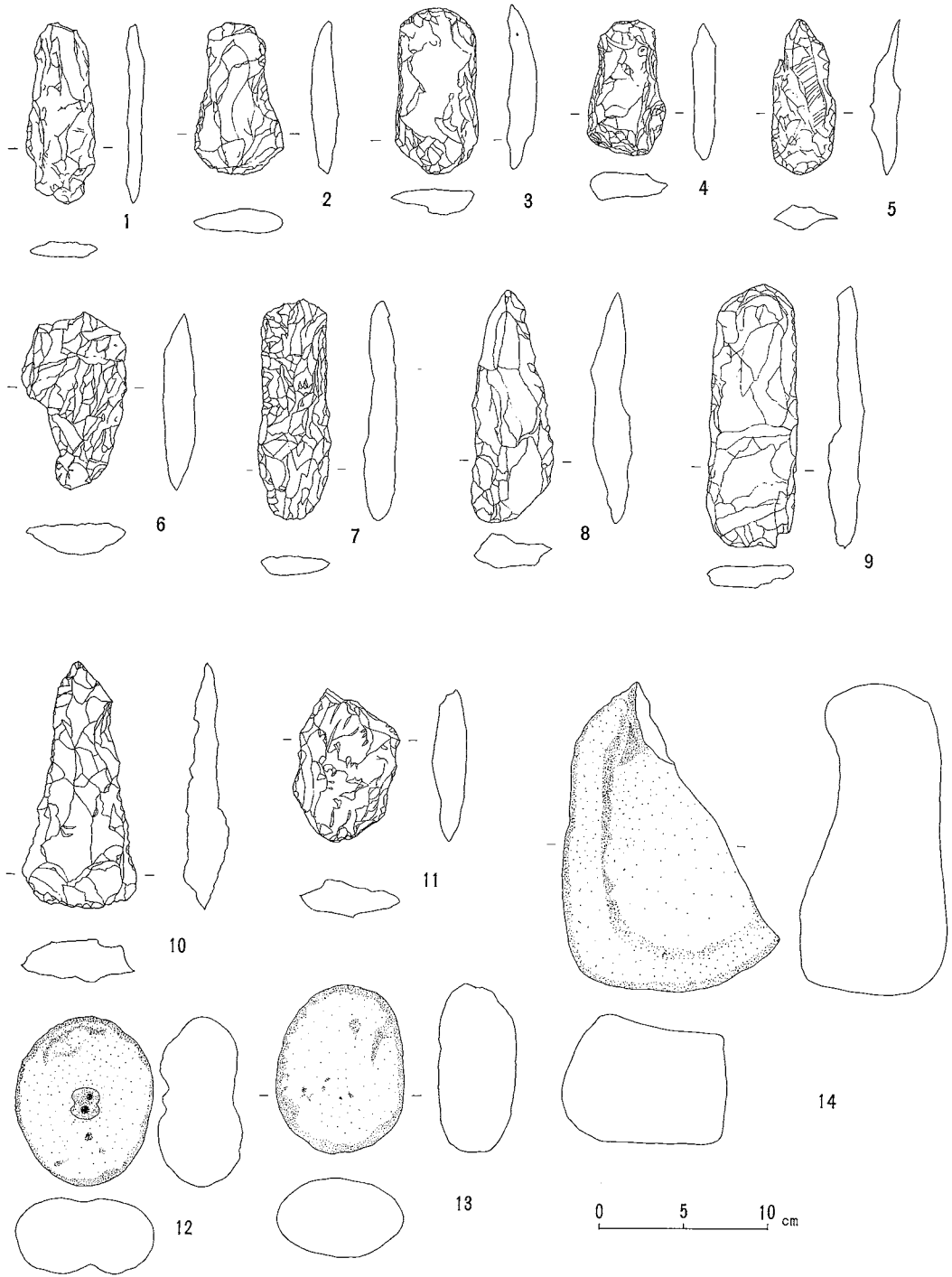
第23图 第25号住居址出土土器拓影（1：3）



第24图 出土土器实测图（1：4）（1—24住，2—土坑120No1，3—土坑134，4—22住）

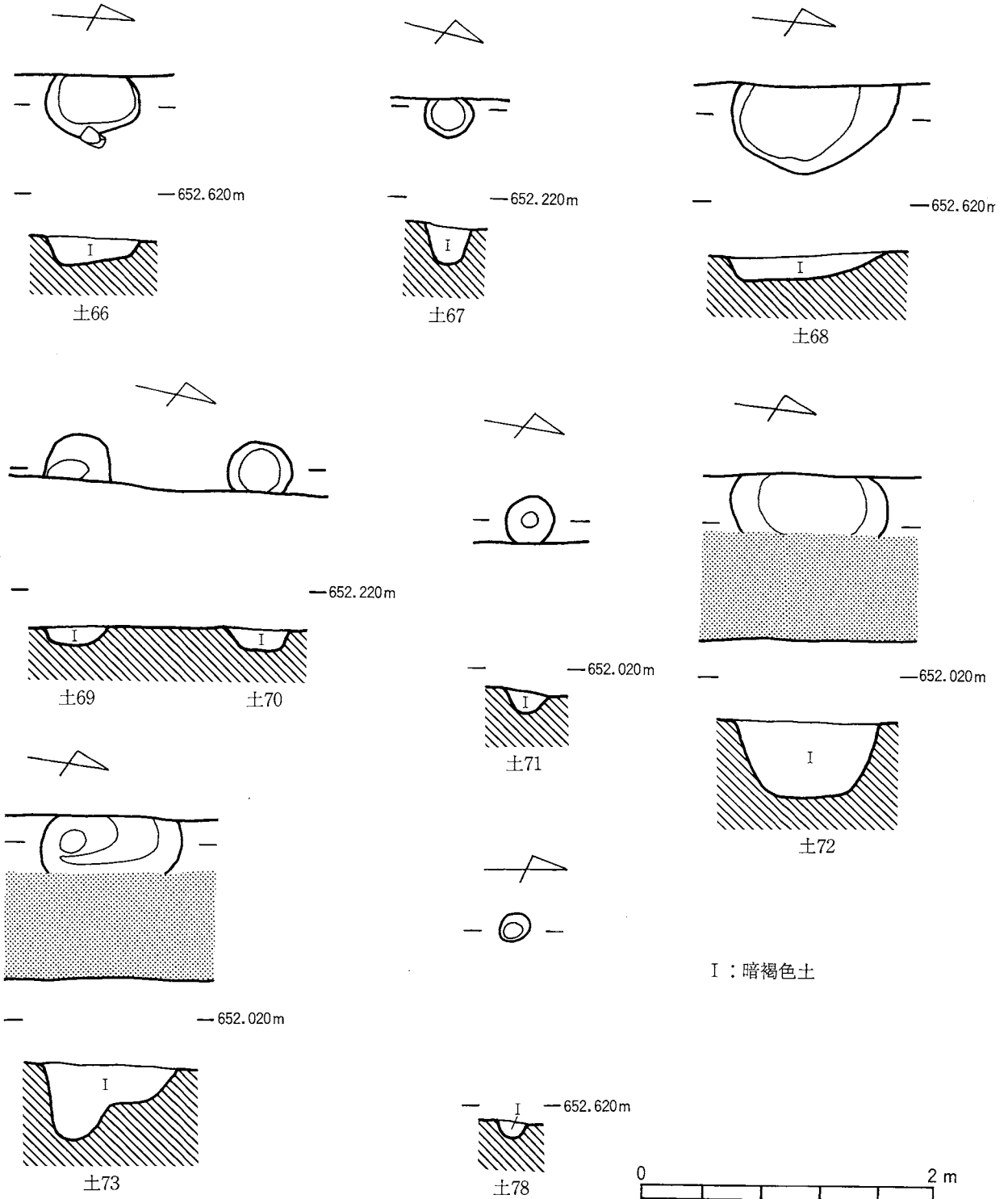


第25图 出土石器实测图 (1~2-1:2, 3~9-1:4) (1-21住, 2-土坑120, 3~9-道路工事)

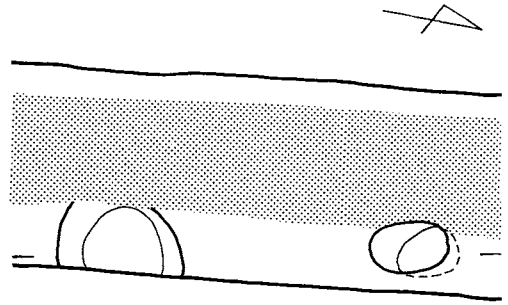
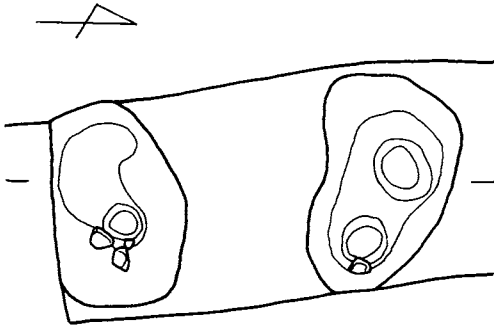


第26图 出土石器实测图(1:4)
 (1~2-22住, 3-土坑101, 4~9-土坑120, 10~13-道路工事, 14-17住)

2. 土 坑

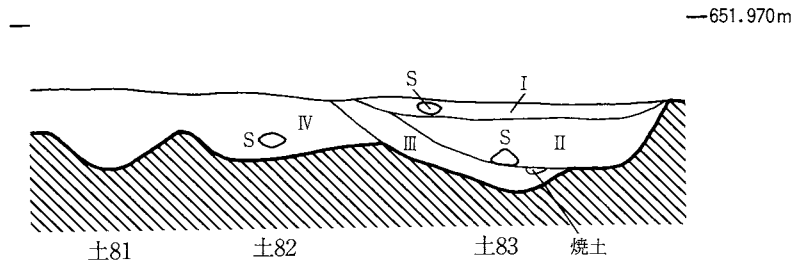
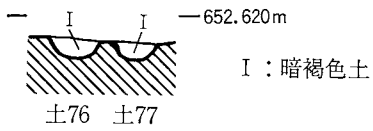
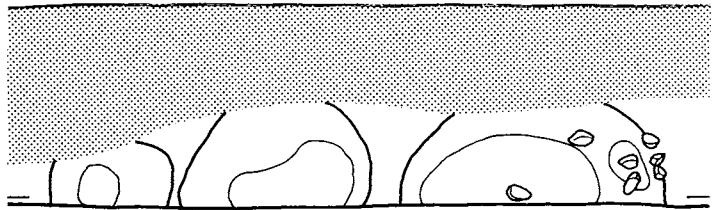
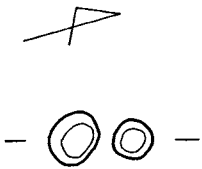
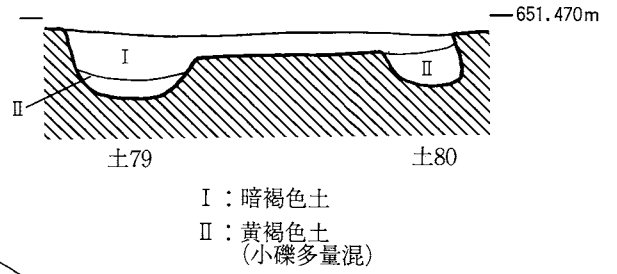
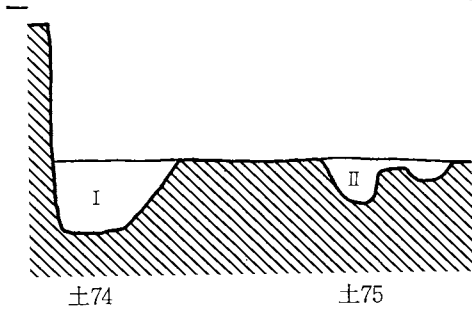


第27図 土坑66~73

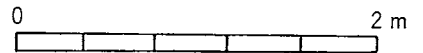


—652.370m

I : 黑褐色土
II : 暗褐色土



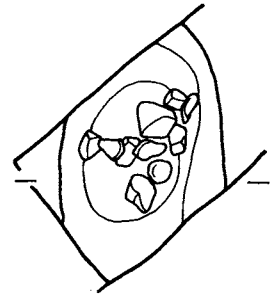
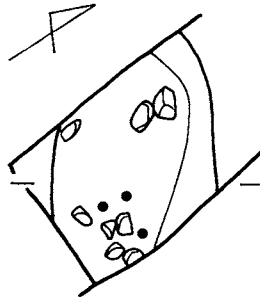
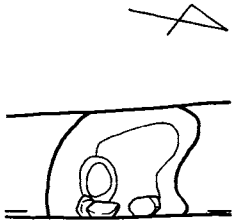
I : 明褐色土
II : 暗褐色土
III : 黄褐色土
(小礫多量混)
IV : 褐色土



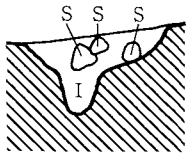
第28图 土坑74~83

遺物出土図. 上面

下面



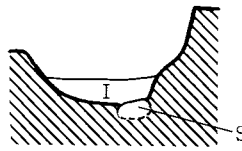
— 651.370m



I : 褐色土

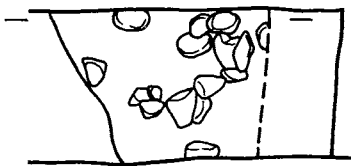
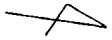
土84

— 651.170m

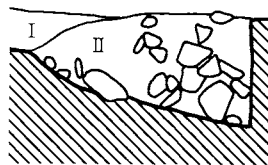


I : 暗褐色土

土85

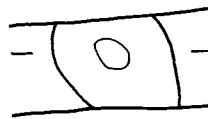
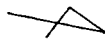


— 651.570m

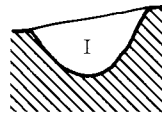


I : 褐色土
II : 暗褐色土
(5~20cm 礫多量混)

土86

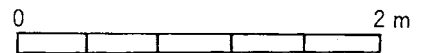


— 650.970m

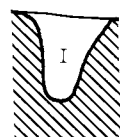
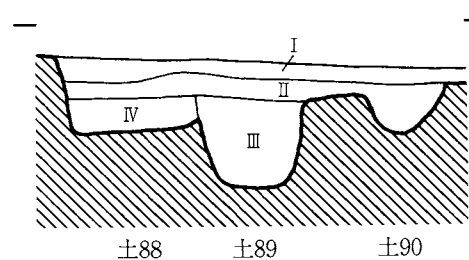
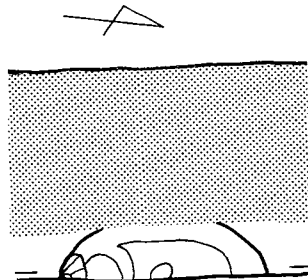
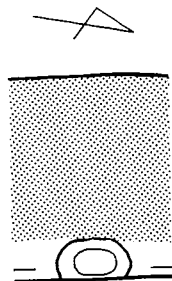
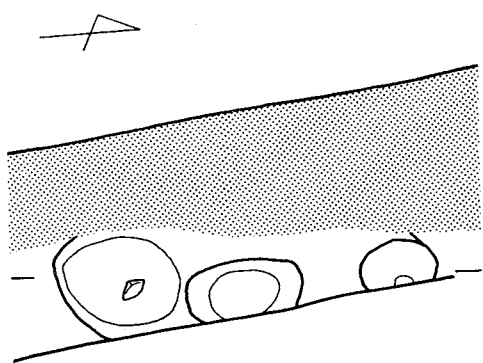


I : 暗褐色土

土87



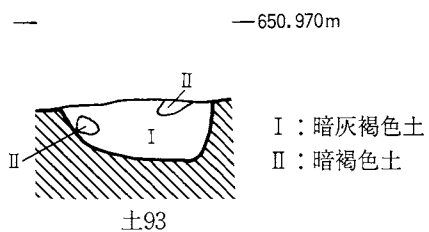
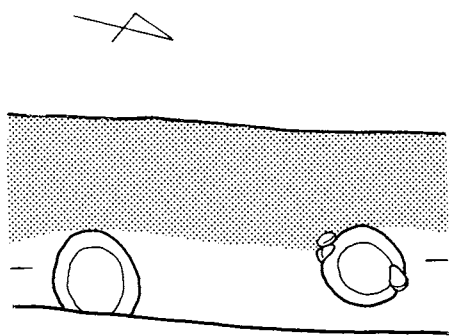
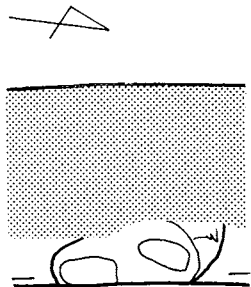
第29図 土坑84~87



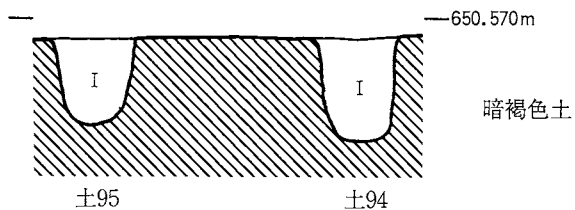
土91
I：暗褐色土

土92
I：暗褐色土
II：暗灰褐色土

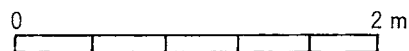
- I：黑褐色土
- II：暗褐色土
- III：暗灰褐色土
- IV：褐色土



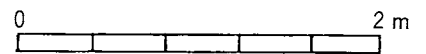
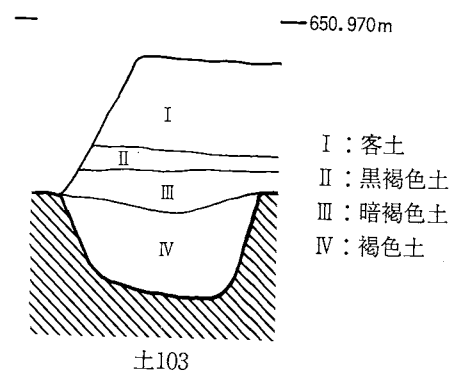
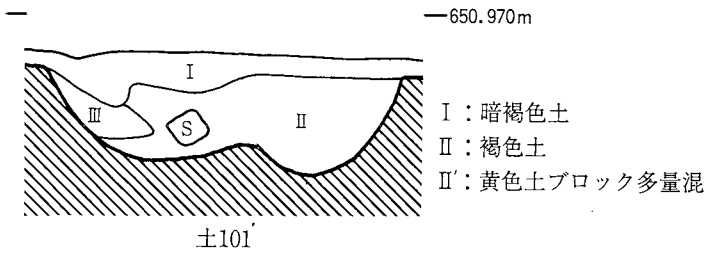
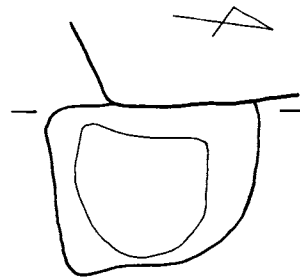
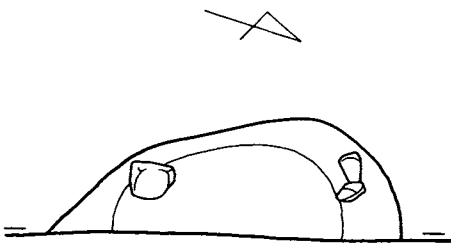
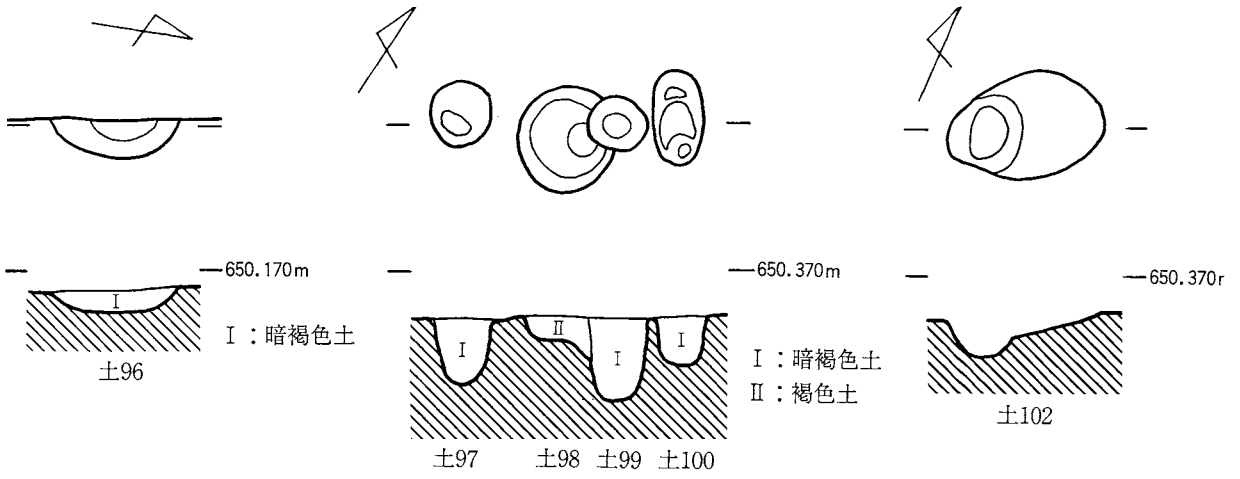
I：暗灰褐色土
II：暗褐色土



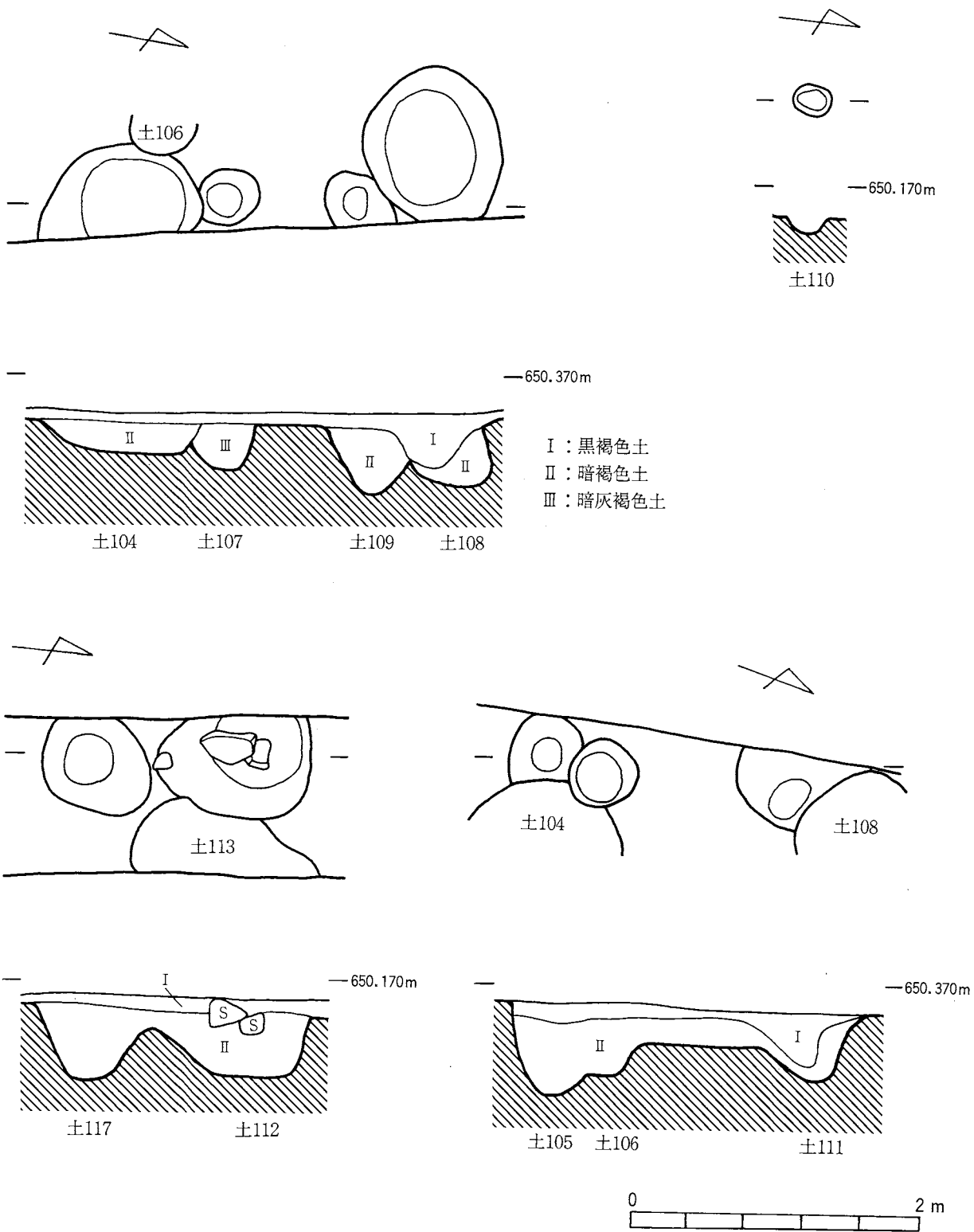
暗褐色土



第30图 土坑88~95

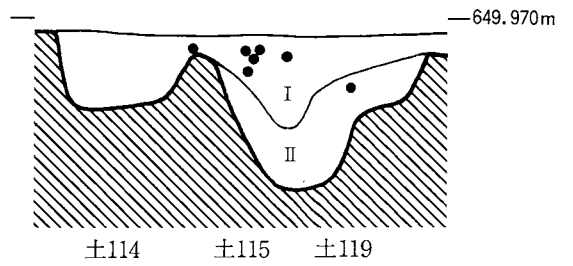
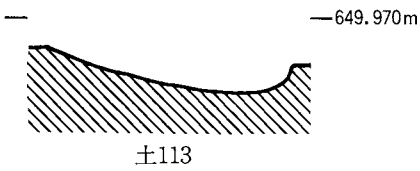
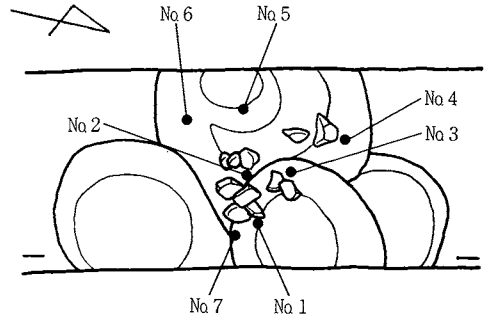
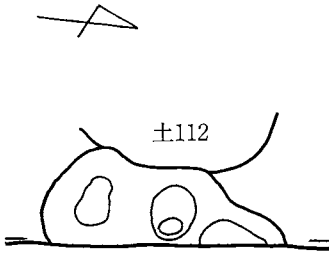


第31図 土坑96~103

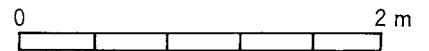
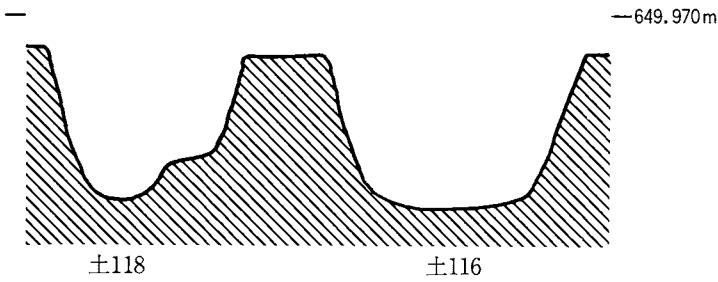
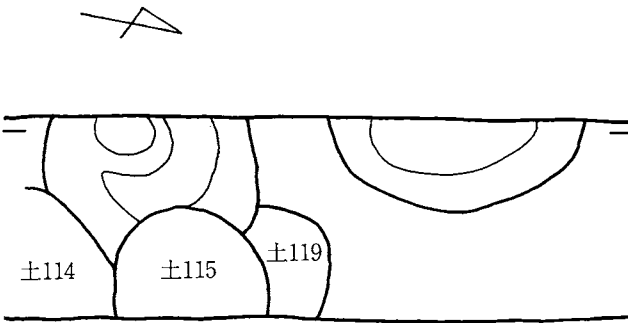


第32图 土坑104~112·117

土115 遺物出土図

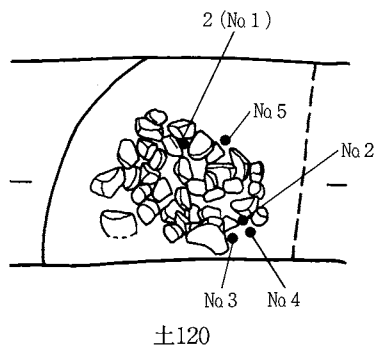


I : 暗褐色土
II : 茶褐色土

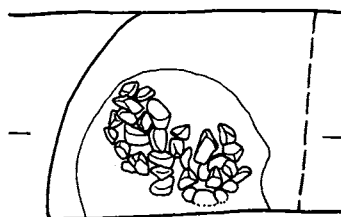
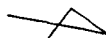


第33図 土坑113~119

遺物出土図. 上面



下面

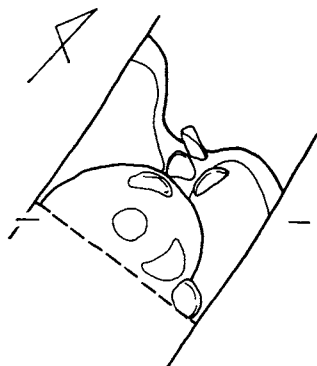


— 650.170m

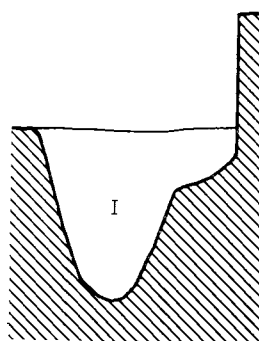


I : 暗褐色土

II : 褐色土 (礫多量混)

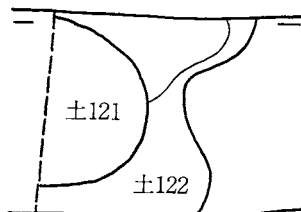
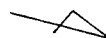


— 650.570m

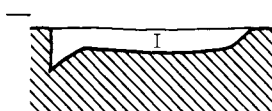


土121

土122



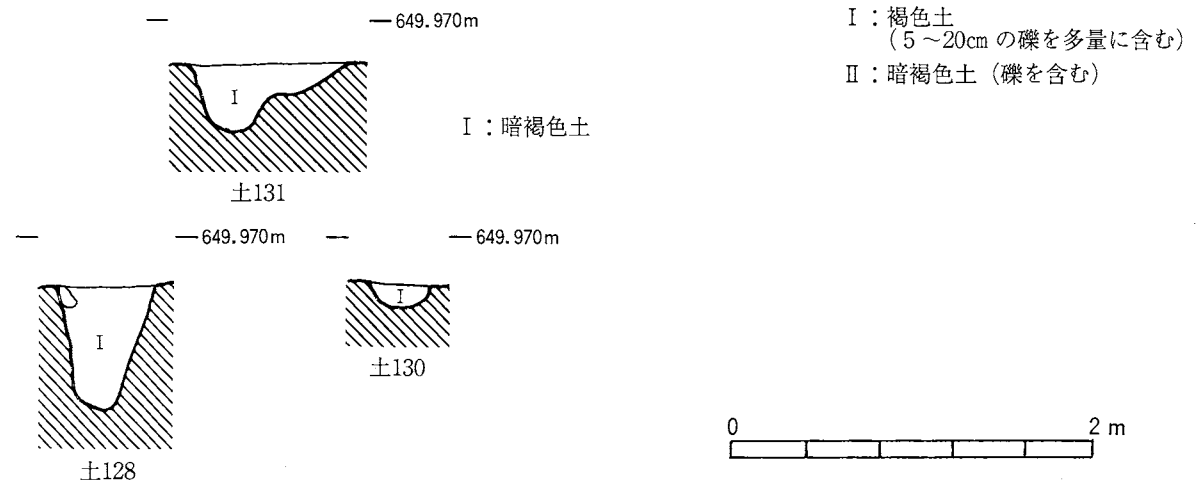
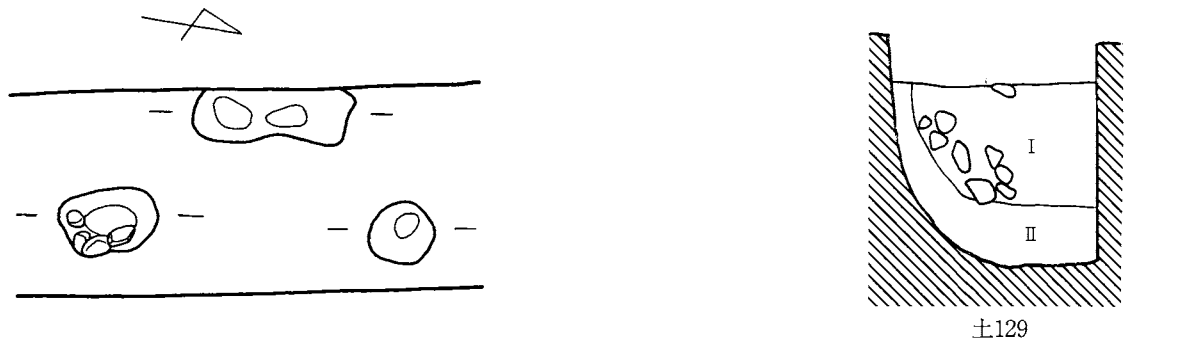
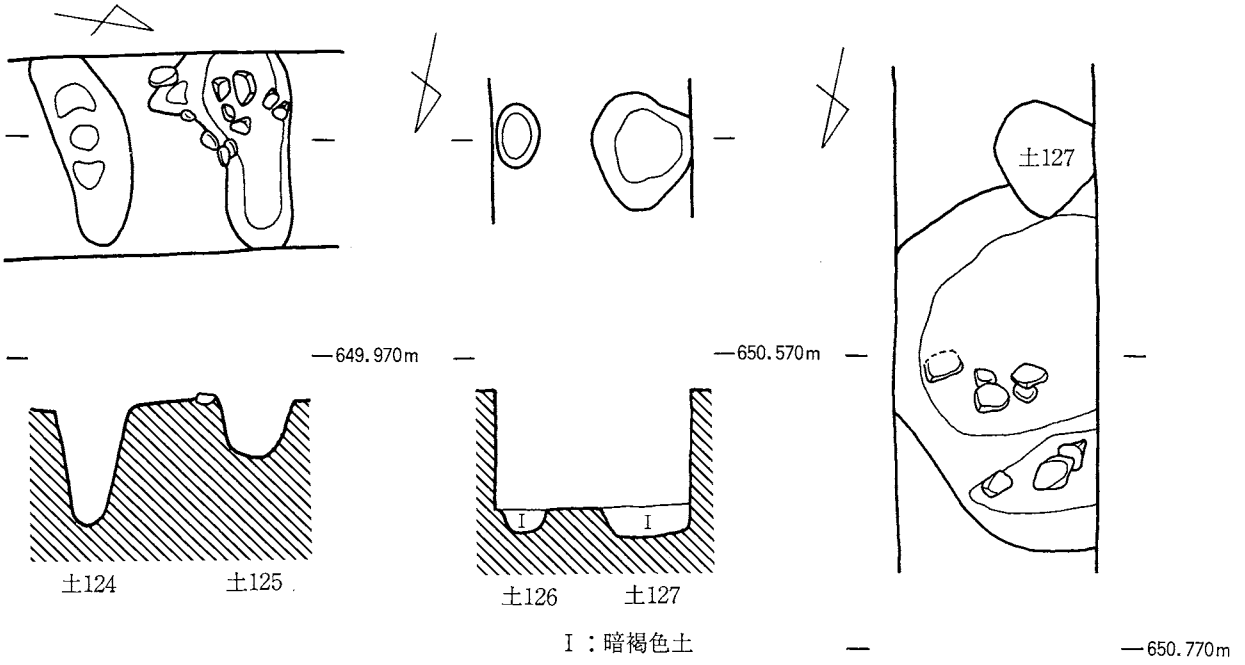
— 649.770m



I : 暗褐色土



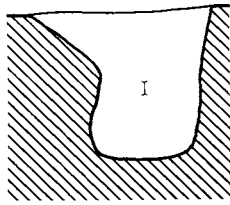
第34図 土坑120~123



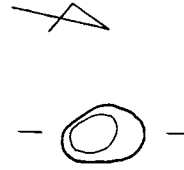
第35図 土坑124~131



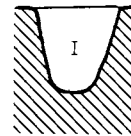
— 649.970m



±132



— 650.570m

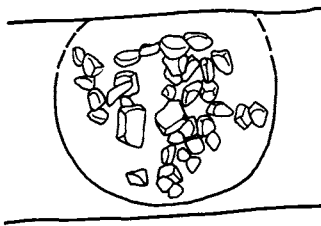


±133

I : 暗褐色土

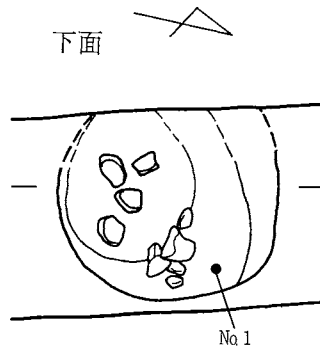
遺物出土図

上面

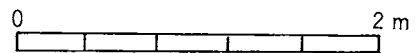
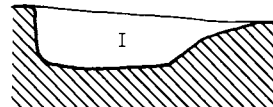


±132

下面



— 650.570m



第36図 土坑132~134

土坑一覽表(1)

土坑 No	位置	規模 (cm)	平面形	備	考
		長軸×短軸×深			
66	N 8	62×(48)×18	橢円形		
67	N15	33×(28)×25	円形		
68	N16	112×(84)×16	不整橢円形		
69	N30	44×(56)×13	橢円形		
70	N31	40×(40)×28	円形		
71	N32	(32)×28×19	円形		
72	N36	100×(88)×52	長円形	磨滅小片30、中期後葉Ⅲ?	
73	N34	94×(56)×54	長円形	磨滅小片3、中期後葉Ⅲ	
74	N39	110×(86)×45	不整橢円形	23片(中に磨滅片)、中期後葉Ⅲ～Ⅳ	
75	N41	125×76×60	不整橢円形	磨滅片50	
76	N39	28×26×10	円形		
77	N39	22×22×13	円形		
78	N39	18×18×12	円形		
79	N44	72×(72)×36	不整円形		
80	N46	42×28×66	橢円形	磨滅片9、中期後葉Ⅲ	
81	N51	644×(50)×18	長円形	磨滅片20、中期後葉Ⅲ～Ⅳ	
82	N52	106×(88)×13	不整円形		
83	N54	146×(114)×26	橢円形	磨滅片40、中期後葉Ⅲ～Ⅳ	
84	N56	(102)×76×49	不整長円形	磨滅片30	
85	N57	92×(92)×32	不整橢円形	磨滅片30	
86	N59	(140)×(140)×50	不明	磨滅片30、説明	
87	N61	68×(64)×48	長円形	磨滅片3、中期後葉Ⅲ～Ⅳ	
88	N62	76×(68)×23	橢円形		
89	N63	64×(40)×35	長円形	磨滅片20、中期後葉Ⅲ?	
90	N64	42×(32)×9	円形		
91	N65	42×(30)×36	橢円形		
92	N69	112×(56)×19	橢円形	磨滅片6、中期後葉Ⅳ	
93	N71	81×(46)×38	不整橢円形		
94	N75	46×42×52	円形	磨滅片7、無文	
95	N73	(56)×48×54	橢円形	磨滅片2、無文	
96	N86	(68)×(66)×12	橢円形		
97	N87	38×34×38	円形	磨滅片3、中期後葉Ⅲ～Ⅳ?	
98	N87	56×52×25	円形	土坑99に切られる。磨滅片7、無文	
99	N87	34×30×46	円形	土坑98に切る。	
100	N87	52×29×99	橢円形		
101	N87	194×132×54	不整橢円形	打製石斧1、6片(底部片2、網代痕)、中期後葉Ⅲ～Ⅳ?	
102	N88	86×58×40	不整橢円形	把手片2、磨滅片15、中期後葉Ⅲ	
103	N89	115×102×60	不整長円形	磨滅片11、中期後葉Ⅲ～Ⅳ	

土坑一覧表(2)

土坑 No	位置	規模 (cm)	平面形	備 考
		長軸×短軸×深		
104	N91	113×(84)×26	不整楕円形	土坑105・土坑106に切られ、土坑107を切る。
105	N91	46×(70)×41	不整長円形	土坑104を切る。
106	N91	52×46×23	不整円形	土坑104を切る。
107	N92	44×42×30	円形	土坑104に切られる。
108	N93	(120)×100×60	不整長円形	土坑111を切る。10片、無文、中期後葉Ⅲ～Ⅳ
109	N93	46×45×35	不整円形	
110	N93	25×20×13	円形	
111	N93	(76)×(70)×25	不整円形	土坑108に切られる。
112	N101	92×(90)×15	不整長円形	土坑113に切られる。磨滅片9、中期後葉Ⅲ～Ⅳ
113	N101	(60)×43×45	長円形	土坑112を切る。
114	N103	82×(80)×29	不整長円形	土坑118を切る。磨滅片12、押型文片1、説明
115	N104	86×(80)×79	不整円形	土坑118を切る。約80片、説明
116	N105	144×(130)×81	楕円形	70片 (No1～6あり)、中期後葉Ⅳ
117	N100	74×(70)×40	不整円形	
118	N103	118×(104)×81	不整長円形	土坑114・土坑115・土坑119に切られる。
119	N104	80×(80)×334	円形	土坑115に切られる。土坑118を切る。
120	N106	(160)×(145)×49	不明	土器、石器、説明
121	N108	88×84×75	不整円形	土坑122・土坑123を切る。
122	N108	60×(60)×17	円形	土坑121に切られる。
123	N108	78×(70)×12	不整楕円形	土坑121に切られる。5片
124	N109	(124)×40×67	不整楕円形	磨滅片6、中期後葉Ⅳ
125	N110	(130)×76×32	不整楕円形	磨滅片3、中期後葉Ⅲ?
126	N111	34×28×11	楕円形	磨滅片2、中期後葉Ⅲ
127	N111	62×(60)×117	不整円形	土坑129を切る。磨滅片2、中期後葉Ⅲ
128	N114	52×34×66	長円形	
129	N112	2204×(204)×93	不整長円形	土坑127に切られる。12片、中期後葉Ⅱ～Ⅲ、中期後葉Ⅰ
130	N115	36×(34)×16	円形	磨滅片3、中期後葉Ⅲ?
131	N115	86×(34)×35	不整長円形	磨滅片2、中期後葉Ⅲ?
132	N120	100×(100)×78	楕円形	
133	N122	43×30×46	楕円形	10片、中期後葉Ⅲ
134	N123	122×(120)×31	不整円形	19片、中期後葉Ⅲ、説明
135	N125	(160)×140×25	楕円形	18片、中期後葉Ⅲ
136				欠番
137	N138	(126)×(120)×43	楕円形	土坑138を切る。磨滅片6、中期後葉Ⅲ?
138	N137	(140)×(130)×36	不整楕円形	土坑137に切られる。
139	N205	(146)×130×26	長円形	

() は推定値

(1) 土坑出土遺物

土坑出土遺物については、土坑一覧表に記載してあるので参照されたい。石器と土器があるが石器は少ないこと、土器は磨滅した小片が多いことが特記される。取り上げて説明したい土坑出土遺物は次の5基である。

① 土坑86 (第38図13～16)

磨滅小片が30点あり無文のものが多い。第38図13～16に拓本をのせてある。13は有孔鏝付土器の口縁部片ではないかとみられるもので、胎土はよいが焼成がややもろい感じにみえる。鏝の部分剥離して黒っぽい帯状をなしている。孔は割れ口に1個と拓本中ほどに1個の計2孔があるが、等間隔にあけたものならもう1孔あってもよさそうに思えて疑問も残る。有孔鏝付土器だとすると今次調査は勿論のこと東小倉遺跡全体出土遺物でも少なく注目されるものである。14は沈線と縄文、15は無文片、16は網代痕をもつ底部片である。無文片が多いので判断に苦しむが中期後葉Ⅲ期に比定したい内容である。

② 土坑114 (第39図12)

磨滅片が12点出土し、縄文をもつものと綾杉状文をもつものが各1点みられる他は無文片である。中期後葉Ⅲ期に比定されるもので本土坑もその期に位置付けられよう。

これに混じって1片だけであるが図示12の楕円押型文片が出土した。三郷村での楕円押型文片は東小倉遺跡では初めてであり、他に稲荷西遺跡で知られる程度で注目される。茶褐色を呈し、胎土焼成共によい。

③ 土坑115 (第39図13～18)

土器片の出土だけであるが約80片と他の土坑に比べて多いことが特記される。発掘時の取り上げで、No 1—22片、No 2—10片、No 3—5片、No 4—1片、No 5—8片があるが器形のまとまるものはない。図示13は口縁部の突起部で渦巻文が施されている。14、15はNo 1として取り上げられた口縁部から頸部にかけての破片であり、耳状の把手が特徴的である。同一個体と思われ、灰褐色をし、胎土も焼成も良好である。16～18は無文部が多くみられるが16には横走る沈線、18には勾玉状文らしいものがみられる。中期後葉Ⅲ～Ⅳ期とみられるものである。

④ 土坑120 (第40図8～20、第24図2、第25図2、第26図4～9)

今次調査の土坑中一番出土遺物が多く、土器と石器がある。

石器は第26図2の不定形石器と第46図の4～9の打製石斧がある。不定形石器は赤色チャート製で長さ4.8cm、最大幅3cmのものである。打製石斧6点は欠損部もみられるが、ほぼ全形のわかるもので、4—8cm、5—9cm、6—10.4cm、7—13cm、8—13.7cm、9—15.3cmを現存部の長さとして計る。硬砂岩製である。

土器は第24図2と拓本図に図示した。2 (No 1) は口縁部から胴部へかけて器のわかるもので最大口縁部径24cm、残存器高13cmを計る。2箇所波状の突起をもつ口縁で、

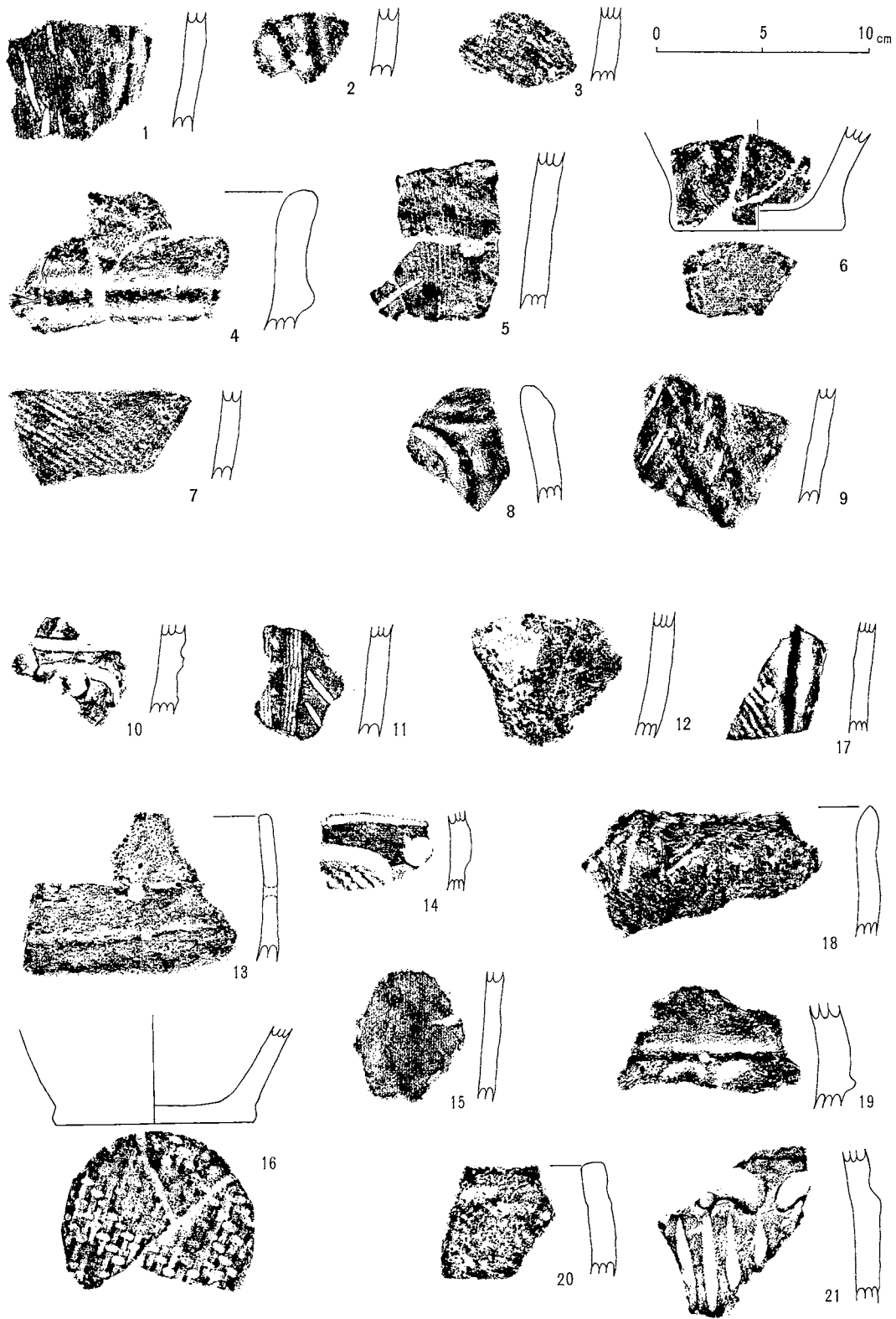
その下に沈線を横走させ、そこから垂下する「の」の字状文と隅丸三角形状の区画内に窺描き文が並んでみられる。拓本図8は無文の口縁部で推定口径28cmほどである。黄褐色を呈し胎土に小石を含み、ややもろい感じのする土器である。13は胴部片で無文部と細い条線が対照的である。黄褐色を呈し胎土に小石を含むが焼成はよい。外面に黒い炭化物の付着がある。「の」の字状の垂下文のある12、19、「ハ」の字状文のある14、15、16、20、沈線内に縄文の施される17等があるが茶褐色を呈して胎土焼成共に良好である。中期後葉Ⅳ期に比定される。出土骨片は、鳥骨ではないかと鑑定されている。

このように石器、土器と出土遺物の多さは注目され、土坑というより堅穴を思わせるような内容と言える。

⑤ 土坑134（第41図13～16、第24図3）

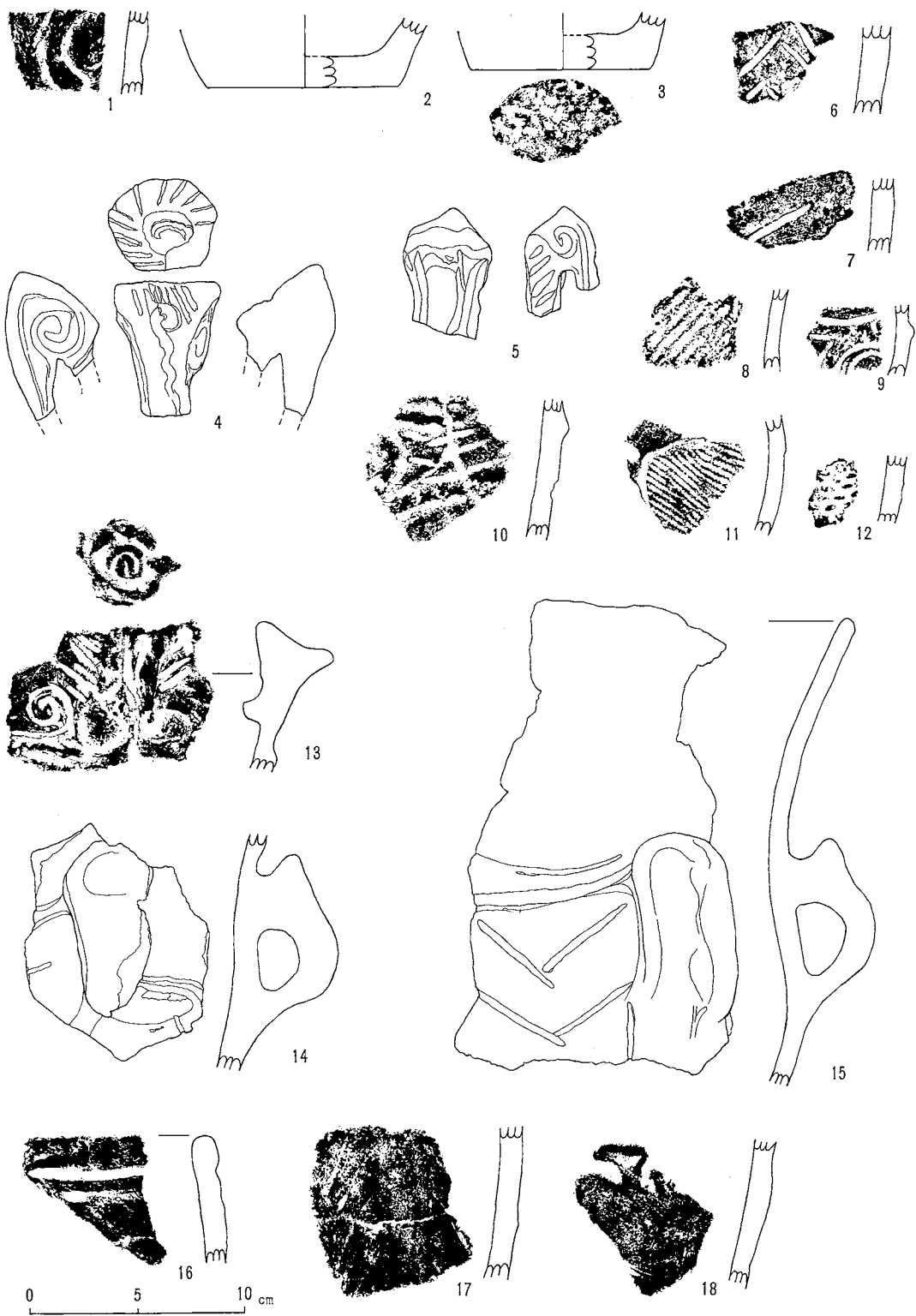
土器の出土がある。第24図3は4波状口縁をもつ深鉢形土器で、口径18cm、残存器高12cmを計る。胎土焼成共によいが、内面に黒く炭化物の付着がみられる。沈線と縄文で飾られる土器である。拓本の13、16には条線が、14、15には沈線間に縄文が施されている。

中期後葉Ⅲ期に比定されよう。



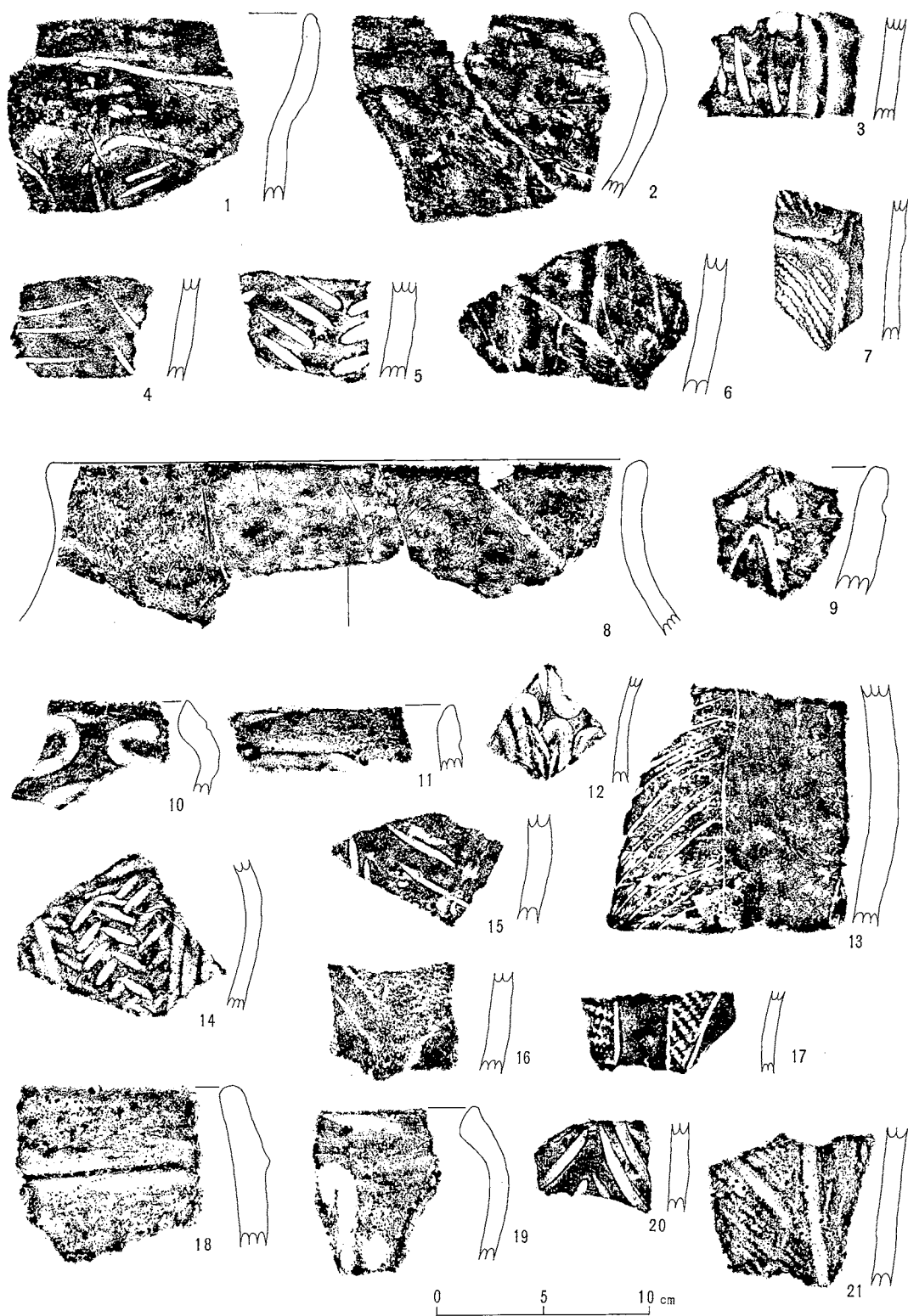
第38图 土坑74~92出土土器拓影(1:3)

(1~3-土坑74, 4~6-土坑75, 7-土坑80, 8~9-土坑81, 10~12-土坑83, 13~16-土坑86, 17~19-土坑87, 20-土坑89, 21-土坑92)

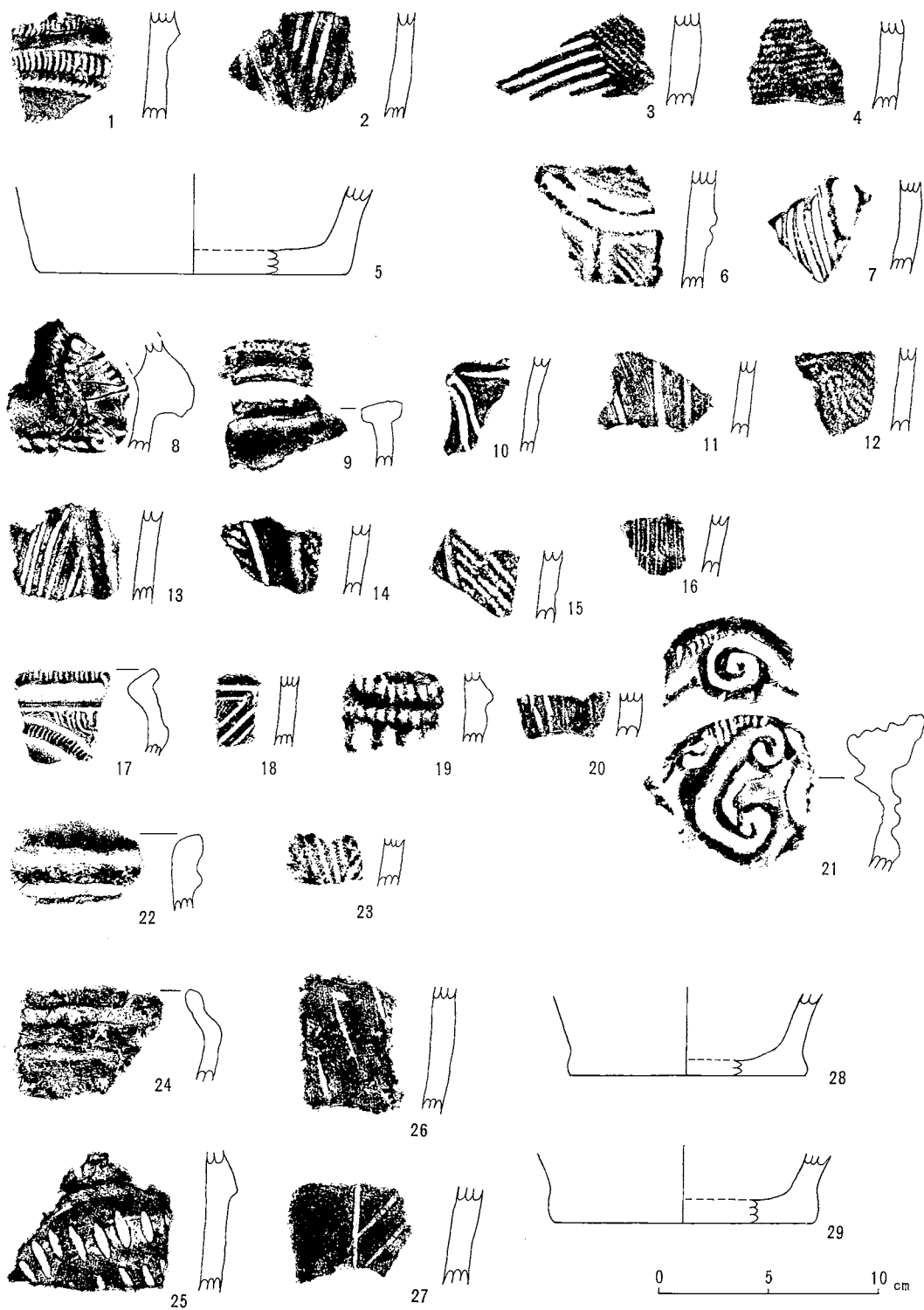


第39图 土坑101~115出土土器拓影(1:3)

(1~3-土坑101, 4~5-土坑102, 6~7-土坑103, 8-土坑108, 9~11-土坑112, 12-土坑114, 13~18-土坑115)



第40图 土坑116~127出土土器拓影(1:3)
 (1~7-土坑116, 8~17-土坑120, 18~20-土坑124, 21-土坑127)



第41图 土坑129~137·遺構外出土土器拓影(1:3)

(1~5-土坑129, 6~7-土坑135, 8~12-土坑133, 13~16-土坑134, 17~22-土坑136, 23-土坑137, 24~29-遺構外)

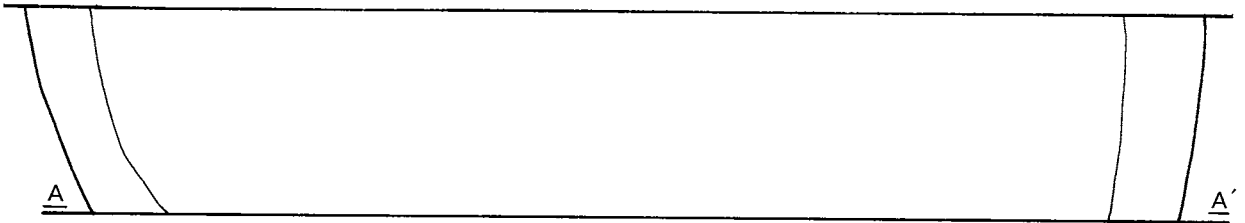
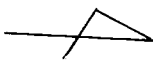
3. 溝 址

(1) 第1号溝址 (第42図)

位置 N207～N213付近に位置する。

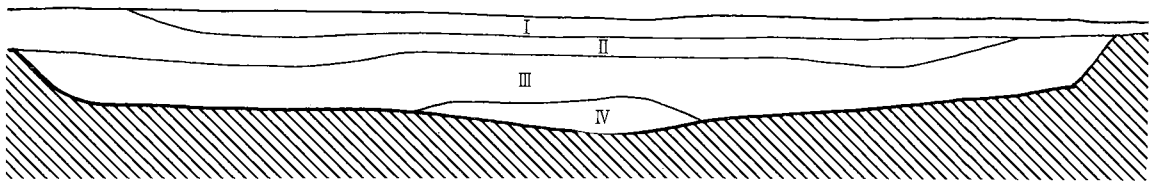
形状・規模 幅6.3mを測る。南側はゆるやかに立ち上がる。北側は工事で削平され判然としない。この溝は、東小倉遺跡2次調査で不明落ち込みとして、最初捉えられた。次に3次調査で幅7.0m深さ1.4mの溝で、断面は舟底型であることが観察された。現在、宅地の間に凹地が点々とみられ、この溝の方向は、推測されていたが、今回の調査でN210m付近に向かっていることが判明した。次に溝の埋没状況は、土層観察から徐々に埋まっていった自然埋没と思われる。洪水性の流路であるならば、砂礫が多量に含まれるはずだが、土層断面からはそういった様子がうかがえない。自然なのか人為的に掘られた溝なのか、もう少し時間をかけて検討すべき課題としたい。また、溝の覆土中からは、遺物の出土がなかった。遺構の切り合いもないことから時期不明である。

37
W24
-

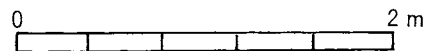


A

A' 647.92



- I : 暗褐色土
- II : 茶褐色土
- III : 暗灰褐色土
- IV : 灰緑色土



第42図 溝 址

4. 過去の道路工事に伴って出土した遺物

昭和61年2月9日、村道改良工事に伴う立合調査が教育委員会と百瀬新治氏によって実施された。この時の道路が今次調査と同一道路であることから、その遺物をここに付記することとした。保管されていた出土遺物は整理箱満杯で3箱分程である。

立ち合った際、墓地の北寄り地点に床面状らしきものと焼土・炭化物の検出があり、土器片の出土をみている。この地点より更に北方にも試掘穴を設定したが遺構や遺物の確認はなかった。この時の出土量は、このように多かったとは記憶していないので、他の地点での出土遺物も一緒になっているものと思われる。この出土地点は、今次調査で第24、25号住居址が確認された付近である。出土土器の時期もほぼ同時期とみられる。

以下その遺物について概略を記したい。遺物には、石器、土器、土製品がある。

石器には、打製石斧、敲打器、磨石、凹石、石皿及び石柱がある。

打製石斧は第26図10、11で、10はほぼ完形であるが、11は半欠している。10は14.5cm、11は約8cmで砂岩製である。敲打器は第26図5～7でいずれも打痕がみられる。5—22cm、6—21cm、7—20cmを計る大きさで、5、7は砂岩製、6はチャート製である。磨石は第26図13と第25図4で共に安山岩製であり、4は欠損しているがやや大き目である。凹石は第25図3と第26図12で共に両面に凹みがある。3は花崗岩製、12は安山岩製である。石皿は第25図8の安山岩製の欠損品である。

第25図9は石柱に使ったと判断されるものである。硬砂岩の縦長の石で45cmを計る。また縦長に剥離している。

土器は多量の破片であり、接合に努めたが第43図にみる4個体のみかろうじて器形をうかがい知ることができる。

1は口縁部と底部を欠くもので残存の頸部口径32cm、器高25cmのものである。垂下する「の」の字状文で区画された中に縄文を満たしており、おそらく口縁部にも縄文帯をもつ土器と思われる。

2は底面を欠く底部片で推定底径11.5cm、縄文が施されている。3は口径28cm、残存器高23cmの深鉢である。無文口縁部下に逆U字状に区画しその中に縄文を施している。

4は推定口径16cm、器高12.5cmほどの浅鉢である。無文で黄褐色をし胎土は良好であるがややもろい感じの焼成である。

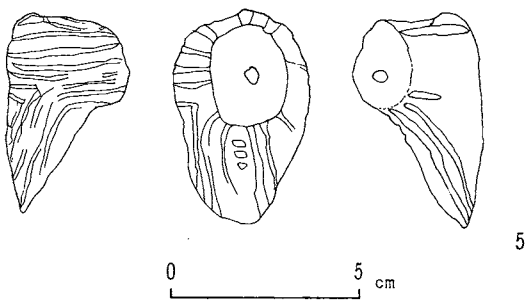
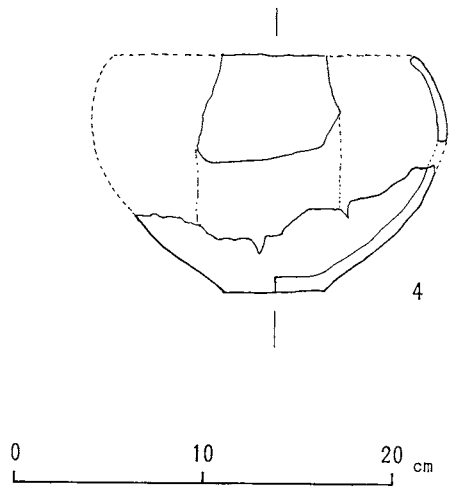
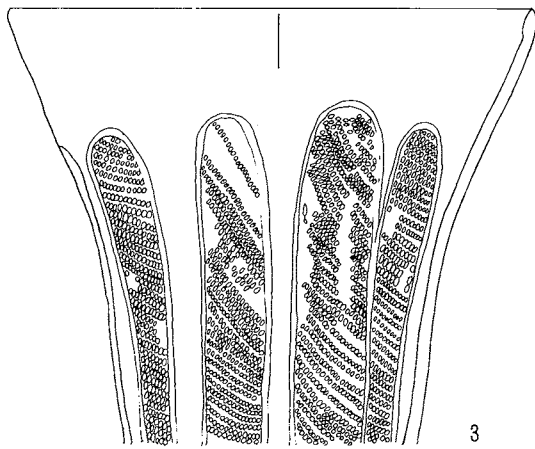
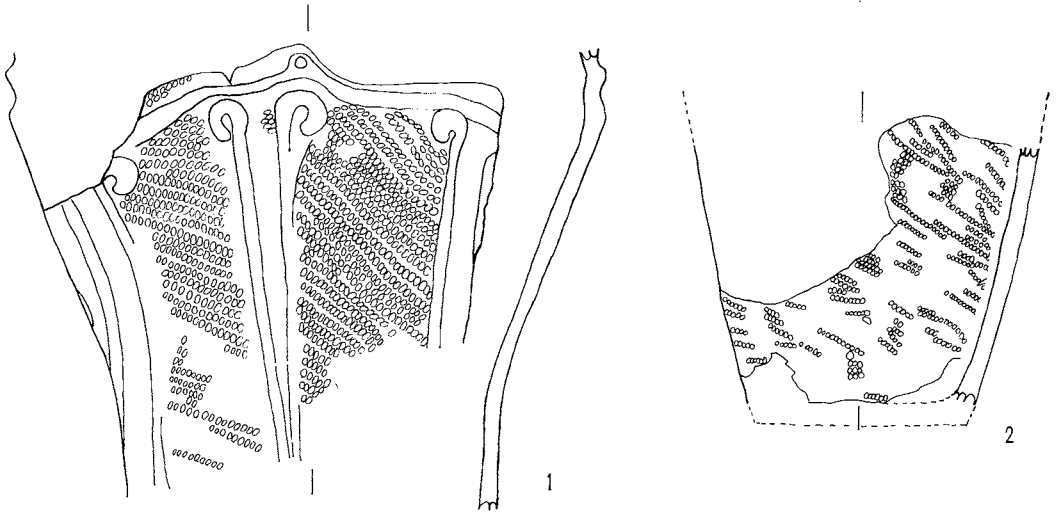
拓本図は第44図1～18に、綾杉状文等、条線で飾られる一群をまとめた。特徴的な渦巻文が2、4～12にはみられ、茶褐色ないし黄褐色を呈して胎土焼成とも良好なものが多い。15のみやや磨滅し灰色をしてもろい感じがする。

第45図19～32には縄文をもつものをまとめた。口縁部に横帯区画を作って中に縄文を満たし、その下も垂下する沈線区画内を縄文で飾る土器である。胎土焼成のよいものが多い。

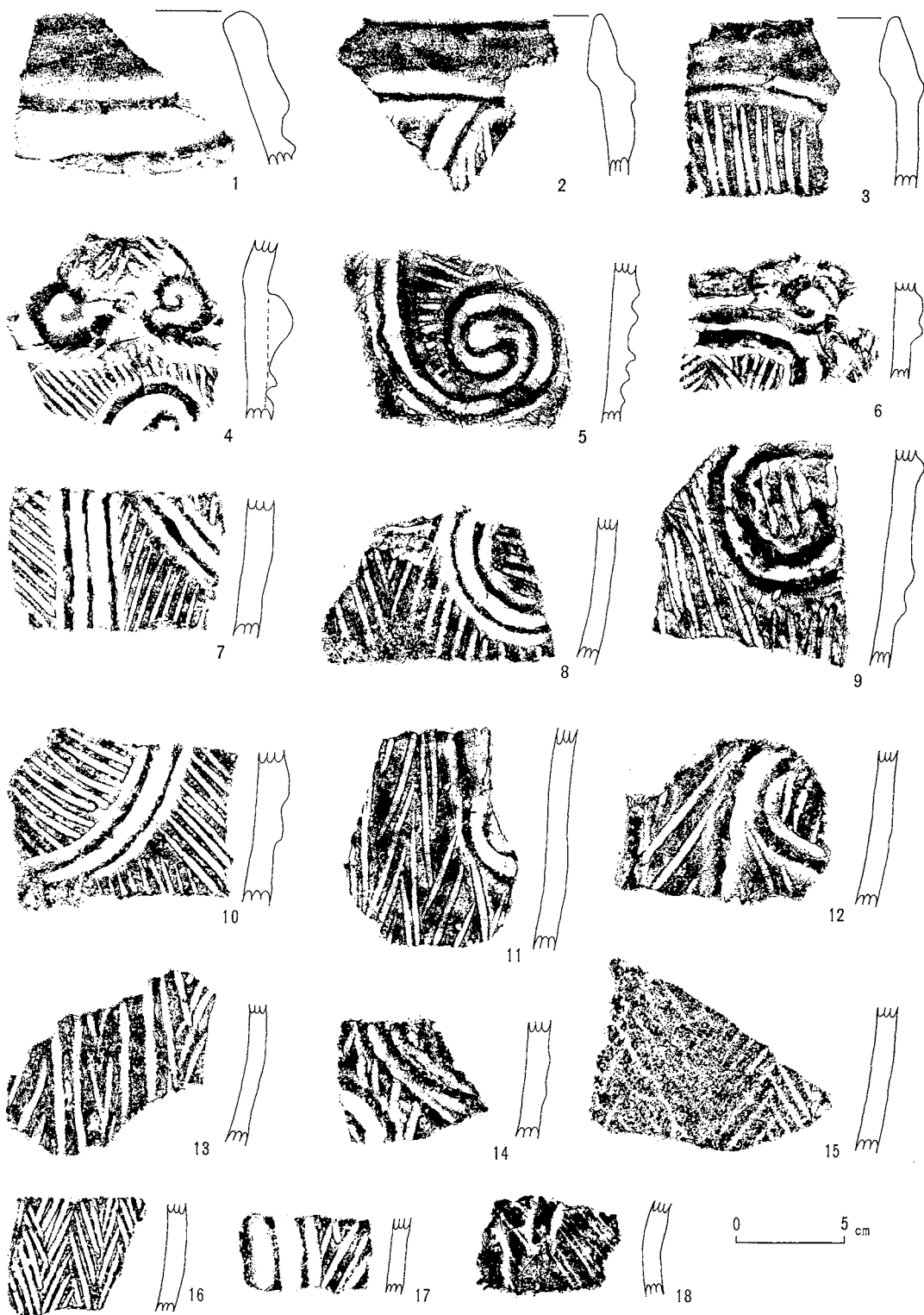
第46図33～49は、32までと若干の施文等に違いのあるものをまとめた。33～38、40は篋状工具による沈線や条線がみられるもので簡略化の傾向が感じられる。42、43、45には櫛歯状のもので描く平行条線がみられる。

これらは中期後葉Ⅲ～Ⅳ期に比定されるものであるが、46～49はそれらに先行する中期中葉のものである。出土地点が異なるのか、まぎれ込んだものなのかは不明である。

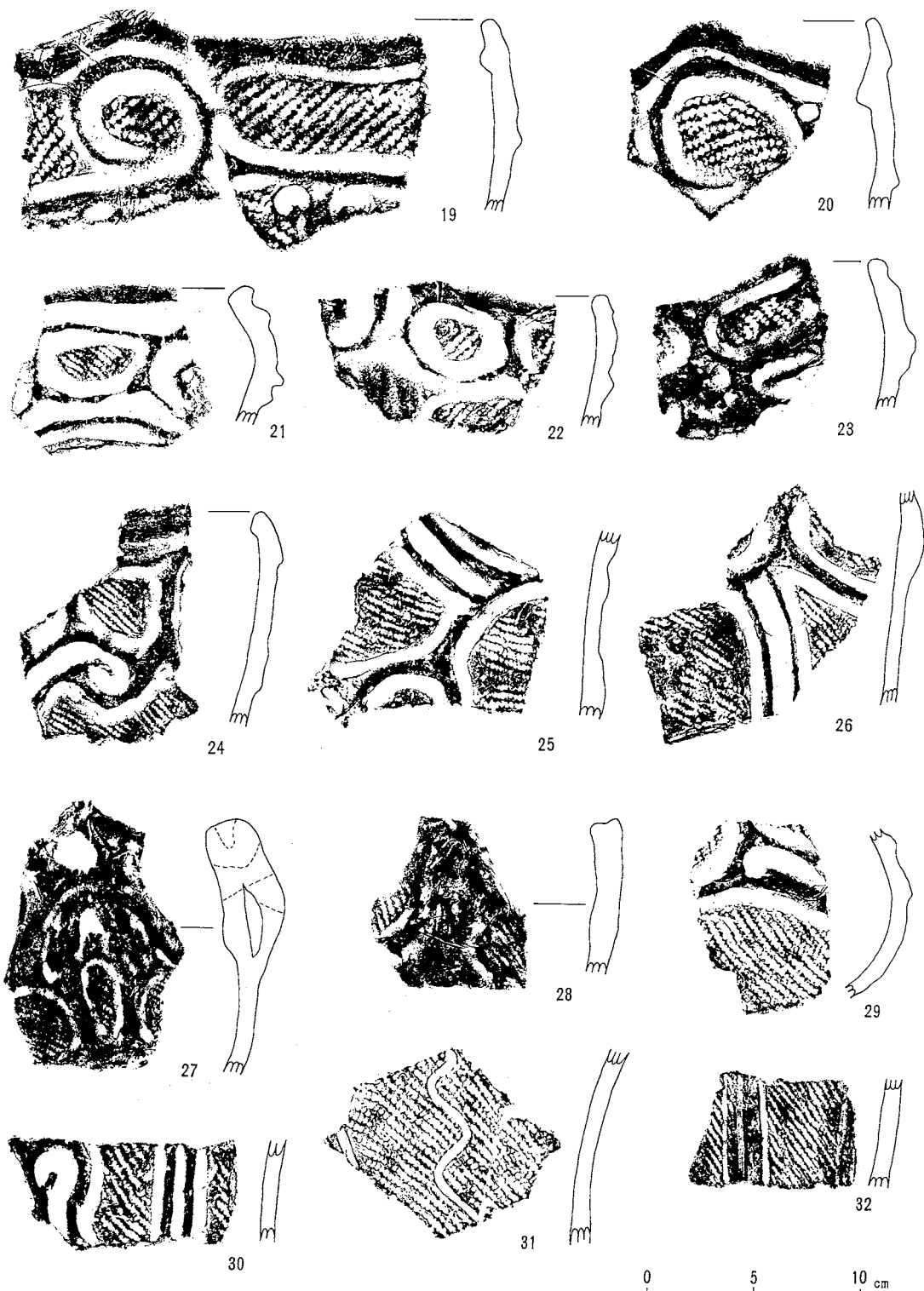
土製品として第43図5の土偶足部片がある。踵から爪先まで5.7cm、幅3.7cm、高さ3.5cmのもので沈線文がみられる。



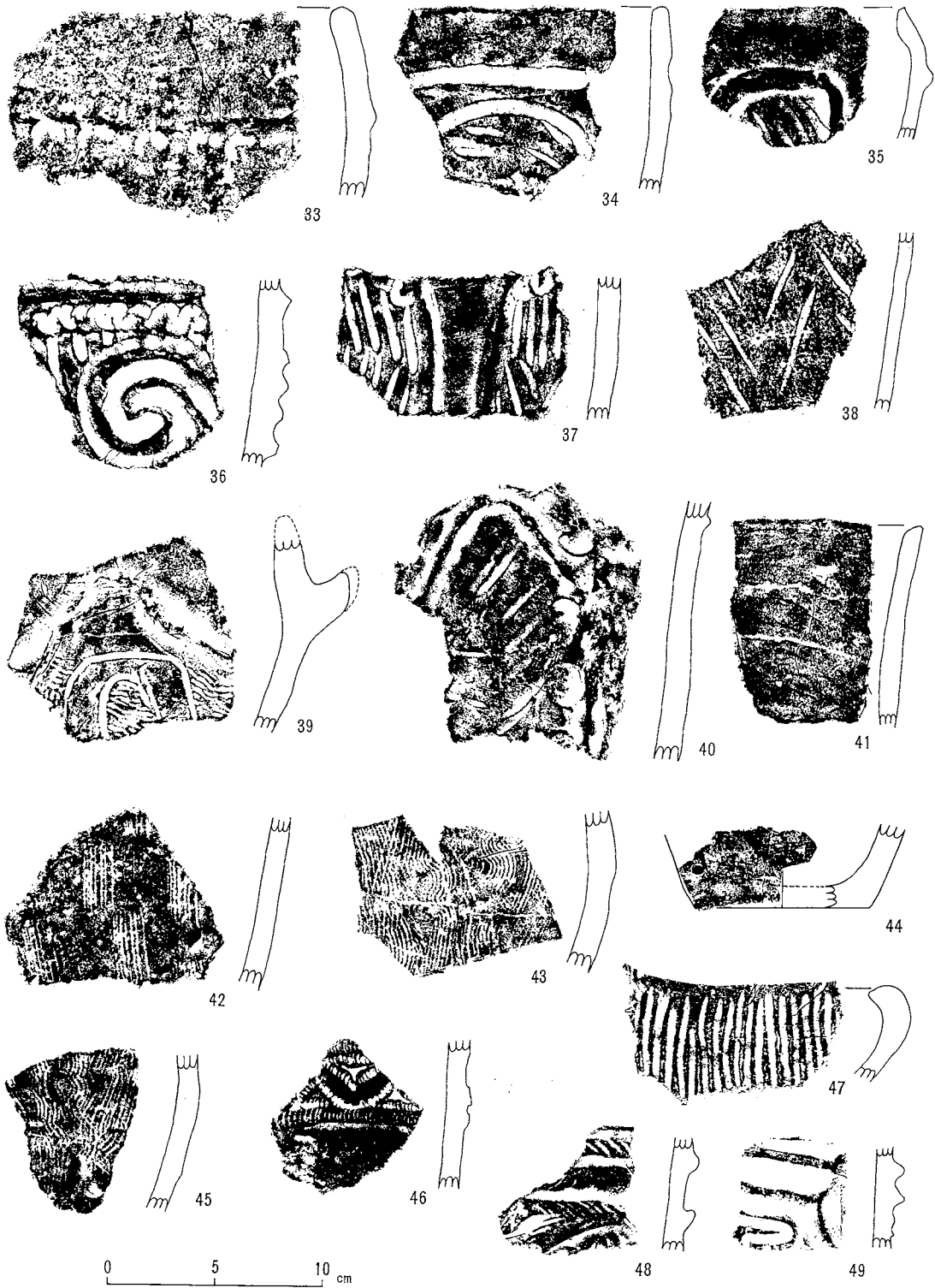
第43図 道路工事出土土器及び土偶実測図 (1~4-1:4, 5-1:2)



第44图 道路工事出土土器拓影 (1 : 3)



第45图 道路工事出土土器拓影 (1:3)



第46图 道路工事出土土器拓影 (1 : 3)

第4章 ま と め

今回の東小倉遺跡第4次調査の成果としては、次の2点があげられる。

1. 過去3回の調査で得られた資料に、新たに貴重な資料を加えることができた。具体的には、1～3次調査では15軒の縄文時代中期後半の住居址と大小の土坑71基、及び同時代の土器・石器が出土しているが、今回は10軒の住居址、土坑72個を追加できた。住居址、土坑、遺物の帰属時期は、縄文時代中期後半におおむね位置付けられる。
2. 縄文時代の集落の範囲、特に北端を捉えることができた。これは南北約240mの調査区においてN150地点から北は遺構が明らかに無くなることから判断した。N210付近にある溝址は縄文時代の遺構とは考えにくいのでのぞいた。東小倉遺跡は発掘当初から、その規模はかなり大きなものではないかと予測されていたが、南北180mの範囲に広がることが判明し、予測を裏付けることができたと言える。

この成果をもって、東小倉遺跡の縄文集落に言及するには、十分とは言えないが、幸い同年9～11月に行われた同遺跡5次調査で新たに住居址30軒他、土坑、遺物など多数の良好な資料を得ることができたことから、今後の整理作業を通じて集落の全体像に言及することが可能になった。

次に、2次調査のまとめの項でも触れられているが、今回の調査区も幅1.2m、長さ240mという細長い範囲に限定された。このため遺構の全容を把握することが困難であった。特に住居址の規模や形状については調査区外にかかる部分が多いことから推定値を多く用いる結果となった。また、調査を行った道路は、昭和61年に道路改良工事が行われた。この時、現地表から深さ約40cmが削平され、遺構・遺物がかなり破壊されたと聞く。このため今回調査した住居址も、覆土がほとんど残っていなかった。そのため良好な土器資料を得られなかった点が悔やまれる。こうした調査上の制約はあるものの、得られた資料は貴重であり、どのように活用していくかが今後の課題と言える。研究に活用する例としては、ここ数年間で近隣の朝日村、穂高町で東小倉遺跡の中心時期と同時期の集落が調査されている。これら遺跡相互の関連について、調べるなどといったテーマも興味深い。また、普及公開活動に活用するため、遺物や写真の整理等準備していくことも当然大切なことである。その他多くの活用方法が考えられよう。

以上、成果と課題について、簡単に触れてみた。最後に、この遺跡の重要性に注目し、調査を継続され多くの資料を蓄積されてきた三郷村教育委員会、ならびに山田瑞穂先生・百瀬新治先生のご尽力に、今回調査を担当させていただいた者として感謝申し上げたい。同時に発掘作業に従事して下さった皆様にも、誌上をお借りしてお礼申しあげる。

(今村 克)

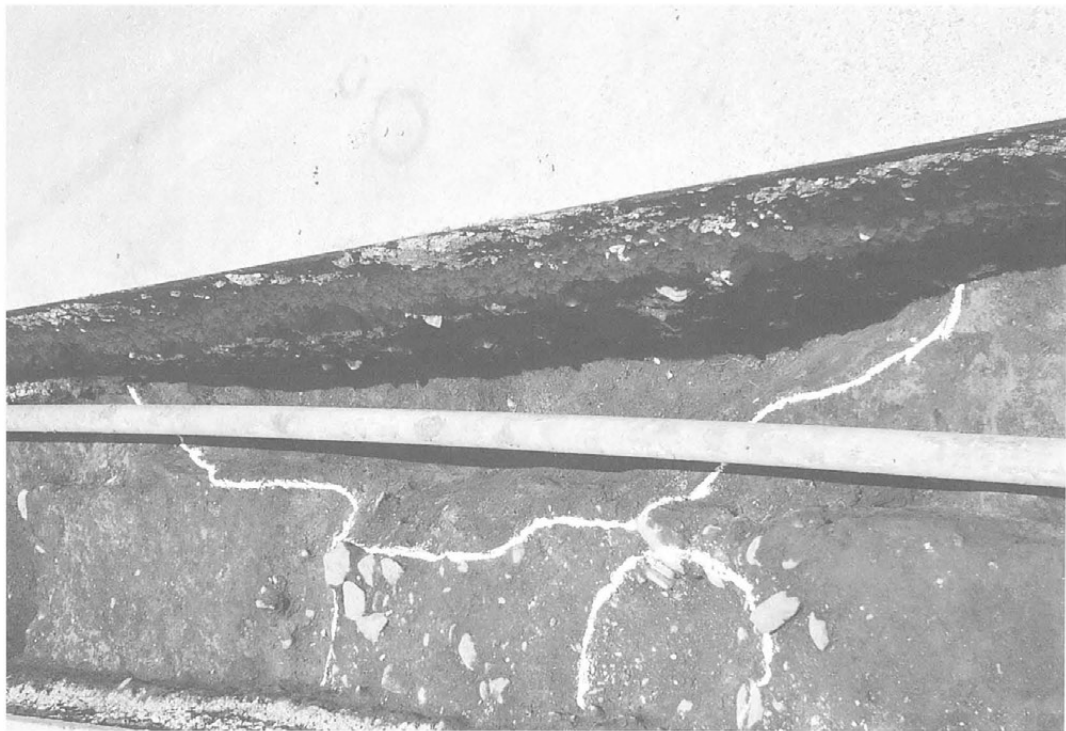
圖 版



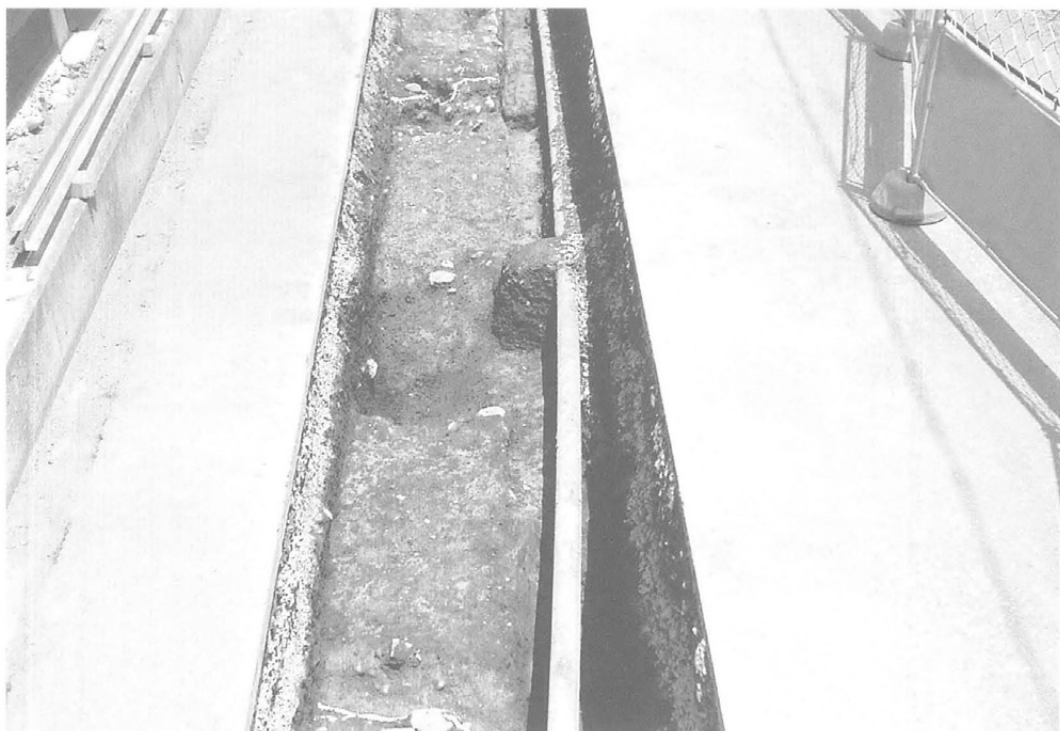
調査風景



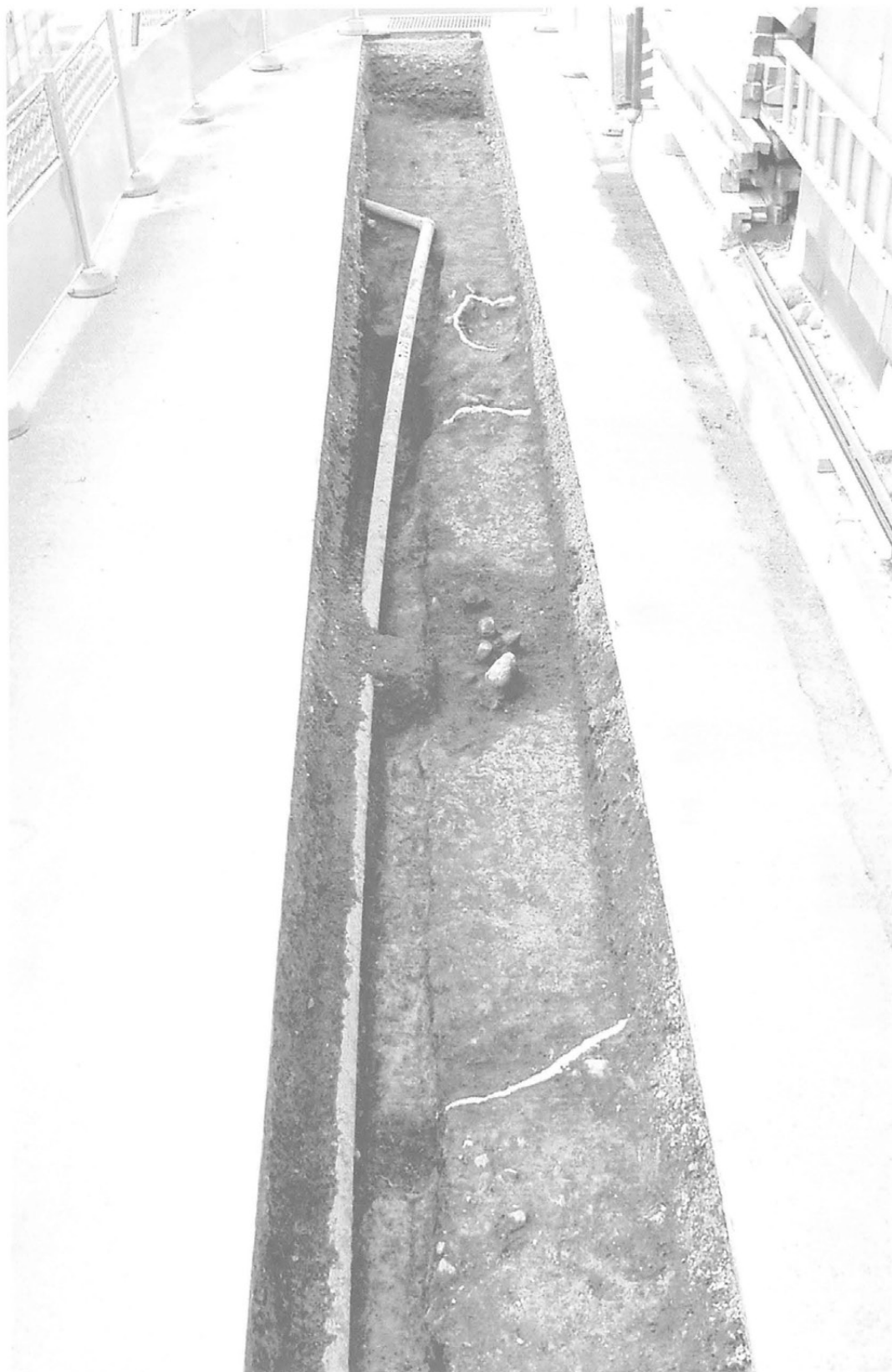
調査風景



16号住居址 完掘



17号住居址 完掘



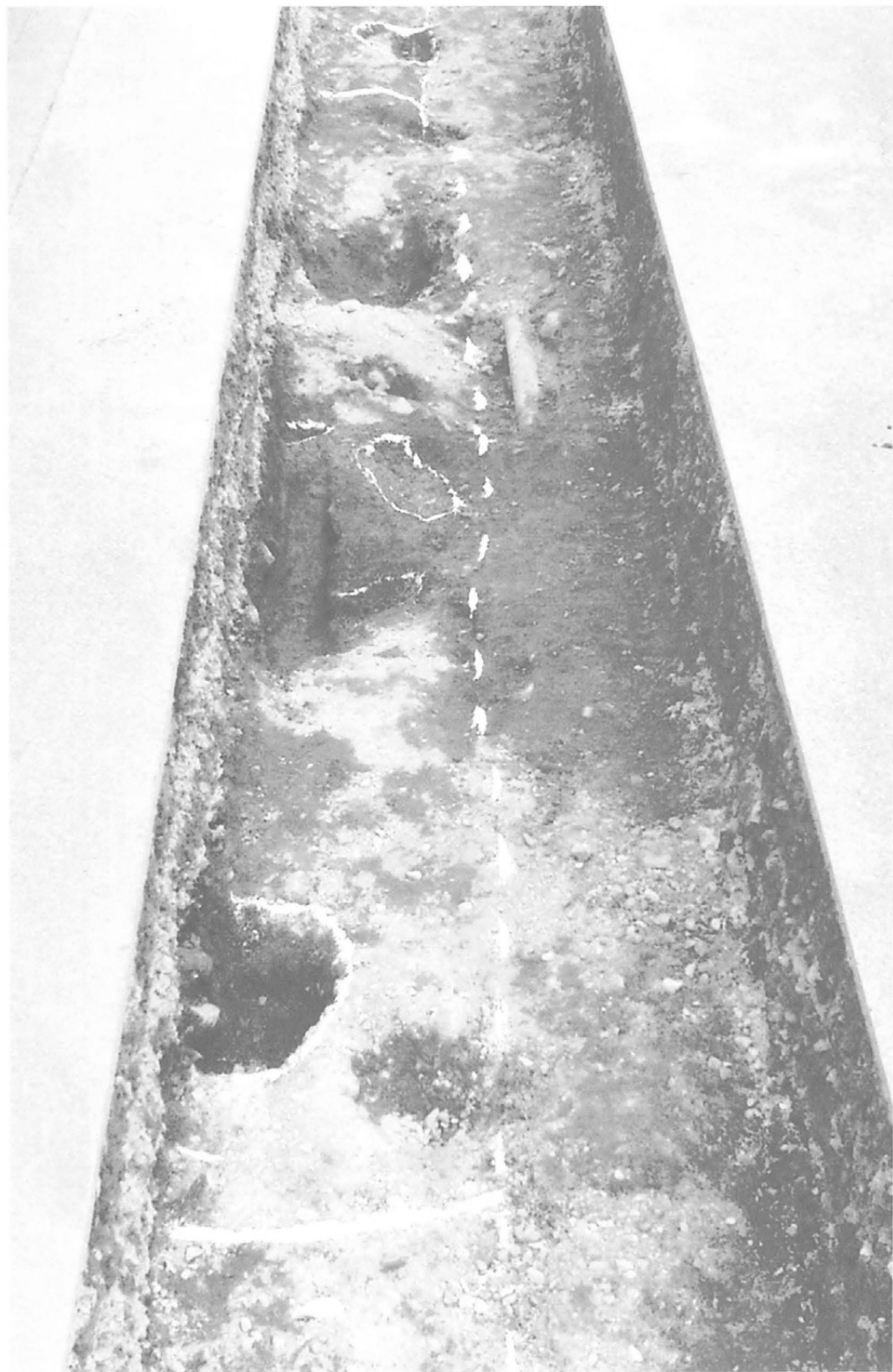
17号住居址



17号住居址 炉覆土上面



17号住居址 炉完掘



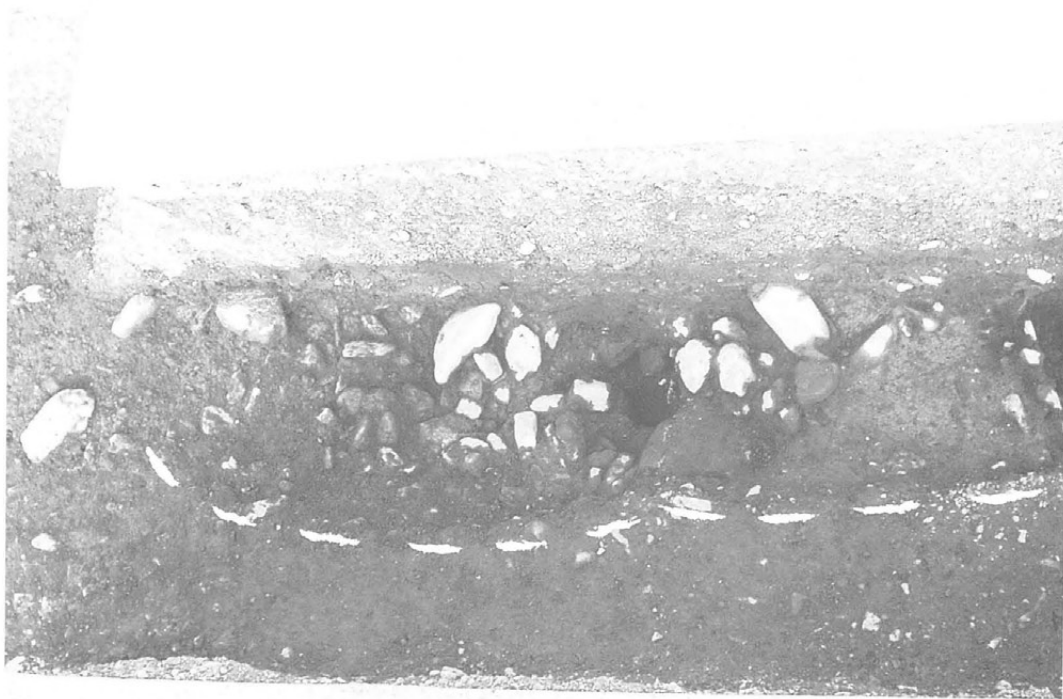
18号住居址



18号住居址 炉内遺物出土



同上 (部分拡大)



19号住居址 礫・遺物出土状況



同上 炉 (部分拡大)



19号住居址 炉



同上 (部分拡大)

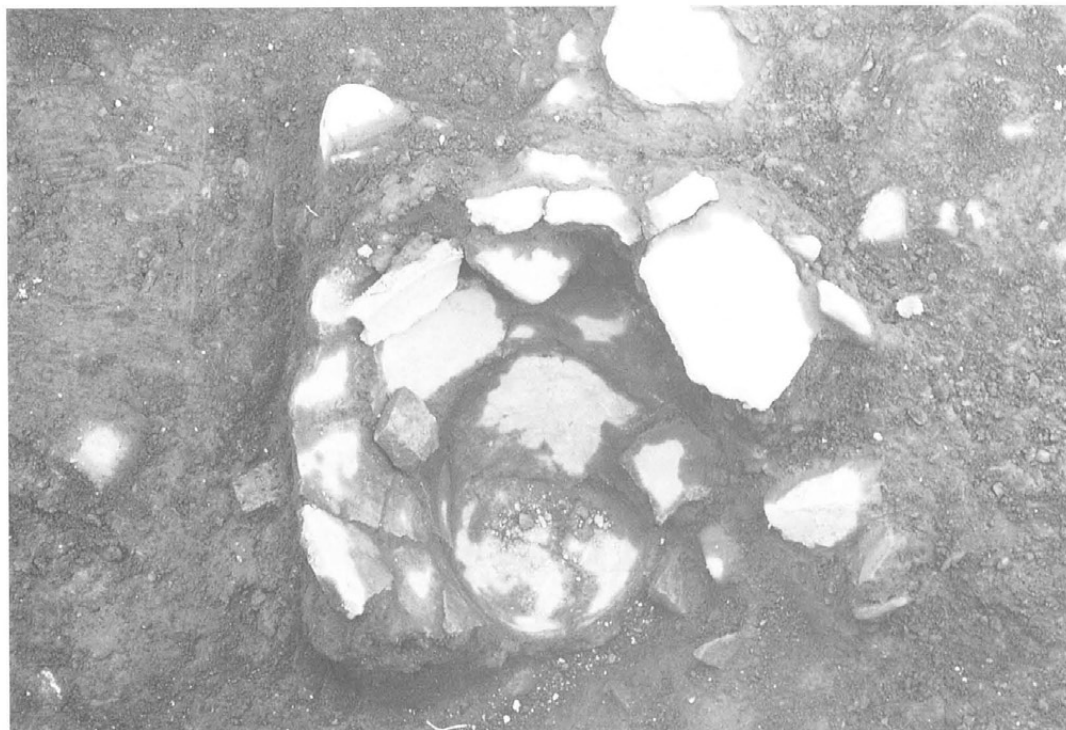


20号住居址



21号住居址





22号住居址 遺物



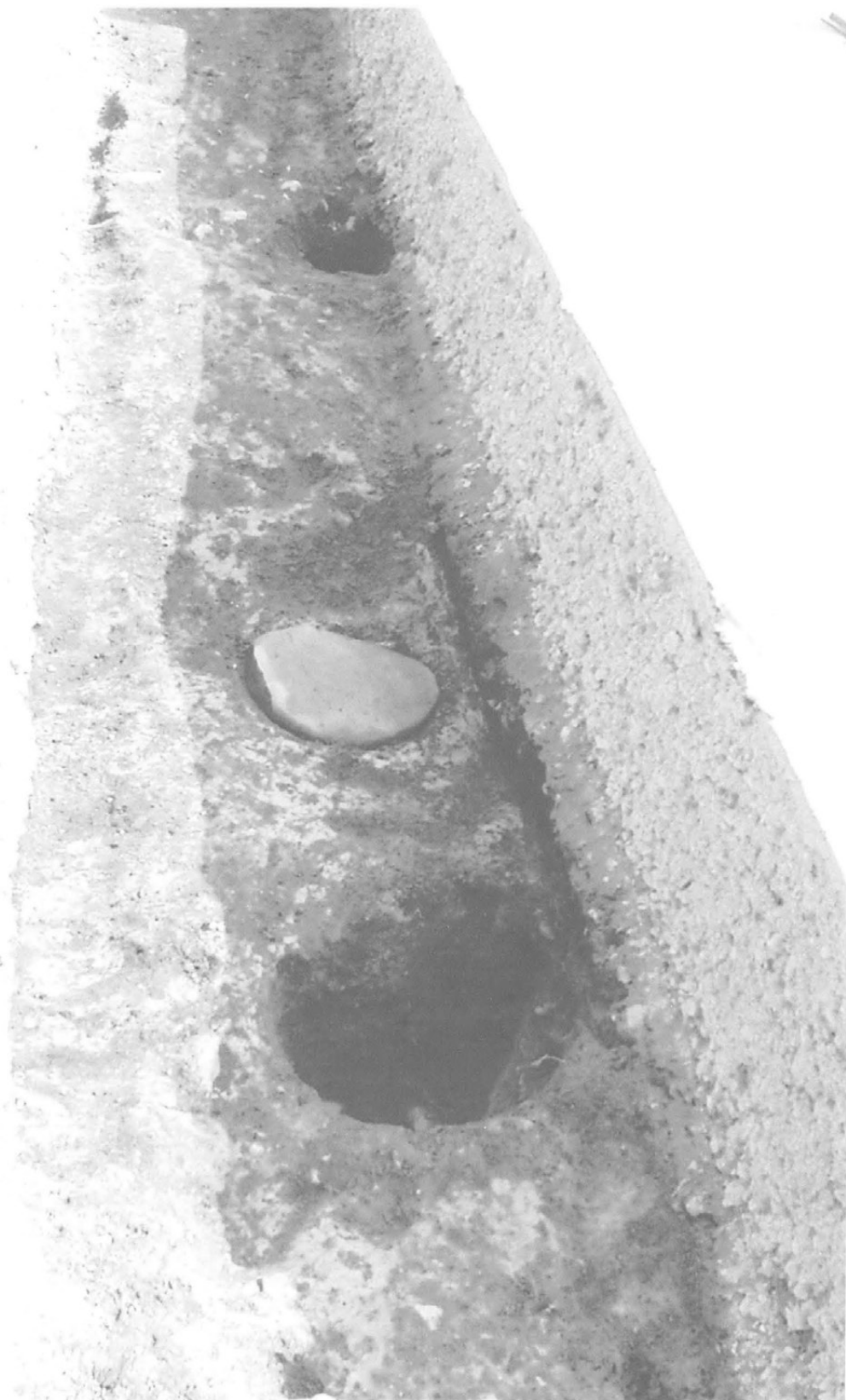
22・23号住居址 遺物出土状況
(奥) (手前)



23号住居址 炉 遺物出土状況

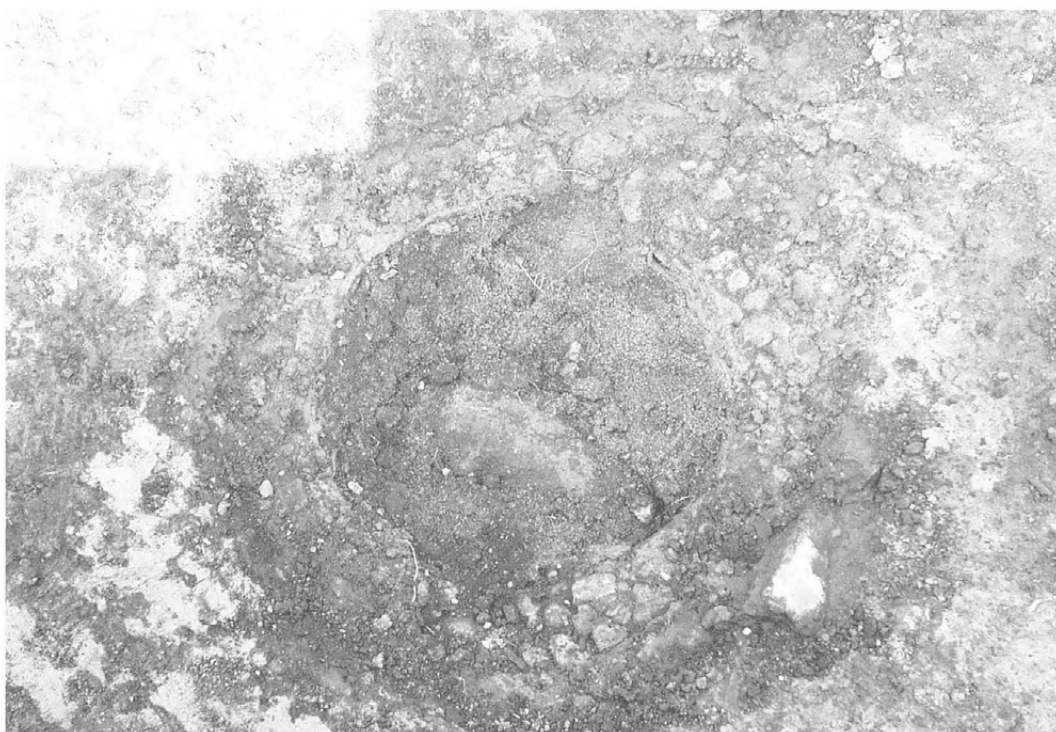


同上 炉 完掘





24号住居址 埋甕蓋石



同上 蓋石を取りはずしたところ。





25号住居址 炉



同上 P₁



左から 土96・97・98・99・100・101完掘



土坑115 遺物出土状況



土坑120 遺物出土状況



同上（部分拡大）



土坑120 集石上層



同上 集石下層

三郷村の埋蔵文化財第5集

東小倉遺跡Ⅲ

平成15年3月25日 印刷

平成15年3月31日 発行

編集発行 三郷村教育委員会
長野県南安曇郡三郷村大字明盛4810-1

印刷 ほおずき書籍株式会社

